宮城県文化財調査報告書第 157 集

狐 塚 遺 跡ほか

平成 5 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序　　文

宮城県には、数十万年を遡る時代から各時代にわたって数多くの埋蔵文化財が存在することが知られており、これらは豊かな自然と長い伝統の中で培われ、育まれてきた貴重な遺産であります。このような、かけがえのない先人の文化遺産を保存し活用するとともに、将来に伝えていくことは現代に生きる私たちの大きな責務と考えられます。

したがって、近年各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、保護・保存するにとどまらずそれを特色ある地域づくりの拠点として整備し活用していこうとするところが多くなっていることは、まことに有意義なことと存じます。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を、具体的な物質的資料に即して解明することができる貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々とって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものでもあります。

しかし、埋臓文化財は土地と深く結び付いてこれまで保存されてきたという特質をもっており、そのため各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき、平成4年度に当教育委員会が実施した発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。

最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘調査にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第であります。

平成5年3月

宮城県教育委員会教育長　　大立目　謙　直

目　　次

狐塚遺跡 …… 3
館南囲遺跡 …… 25
安養寺中窯跡群・安養寺囲窯跡群 …… 47
丹波谷地遺跡 …… 57
向野Ａ遺跡 …… 67
黒沼館跡 …… 87

例　　言

1．本書は、宮城県教育庁文化財保護課が平成 4 年度に実施した 6 遺跡の発掘調査の報告書である。
2．各遺跡の発掘調査から調査報告書作成にいたる一連の作業は、調査の原因となった開発行為に関わる機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。
3．各遺跡の保存協議や発掘調査にあたっては、各開発担当部局や地元教育委員会等から多大な協力をいただいた。
4．本書に使用した土色については、「新版標準土色帖」を参照した。
5．本書に各遺跡の位置図として掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の 1/25,000 もしくは 1/50,000 の地図を複製して使用した。
6．本書は調査員全員の協議を経て下記の者が執筆・編集した。

狐塚遺跡	－千葉正康	黒沼館跡	－三好秀樹
館南囲遺跡	－木皿直幸	丹波谷地遺跡	－佐久間光平
安養寺窯跡群	－古川一明	向野Ａ遺跡	－三好秀樹

7．各遺跡の調査記録類および出土遺物は、宮城県ないし地元市町村教育委員会が保管している。

平成４年度発掘調査の概要

〔狐塚遺跡〕

山元町南部の丘陵上に立地する、狐塚古墳群を含んだ遺跡である。坂元中学校建設に伴い、確認調査と事前調査を実施した。その結果、平安時代の竪穴住居跡４軒と弥生時代中期後葉の遺物を含む層が発見され、古墳の周辺に時期の異なる弥生・平安時代の集落跡が分布することが明らかになった。

〔館南囲遺跡〕

亘理町西部の丘陵上に立地している。亘理中学校および亘理高校の通学路建設に伴い事前調査を実施し、縄文時代中期の竪穴住居跡１軒、古代の竪穴住居跡１軒、近世墓 38 基等が発見された。なお、この道路は亘理城跡とも係わりがあり、同時に調査したが、外堀の一部が検出されるにとどまった。

〔安養寺中窯跡群・安養寺囲窯跡群〕

仙台市北東部の丘陵上に立地する大規模な窯跡群である。安養寺地区の県有地内について、遺跡の範囲と遺構の確認を目的として調査を行ったが、再堆積した瓦などが若干みられただけで、遺構は検出されなかった。

〔黒沼館跡〕

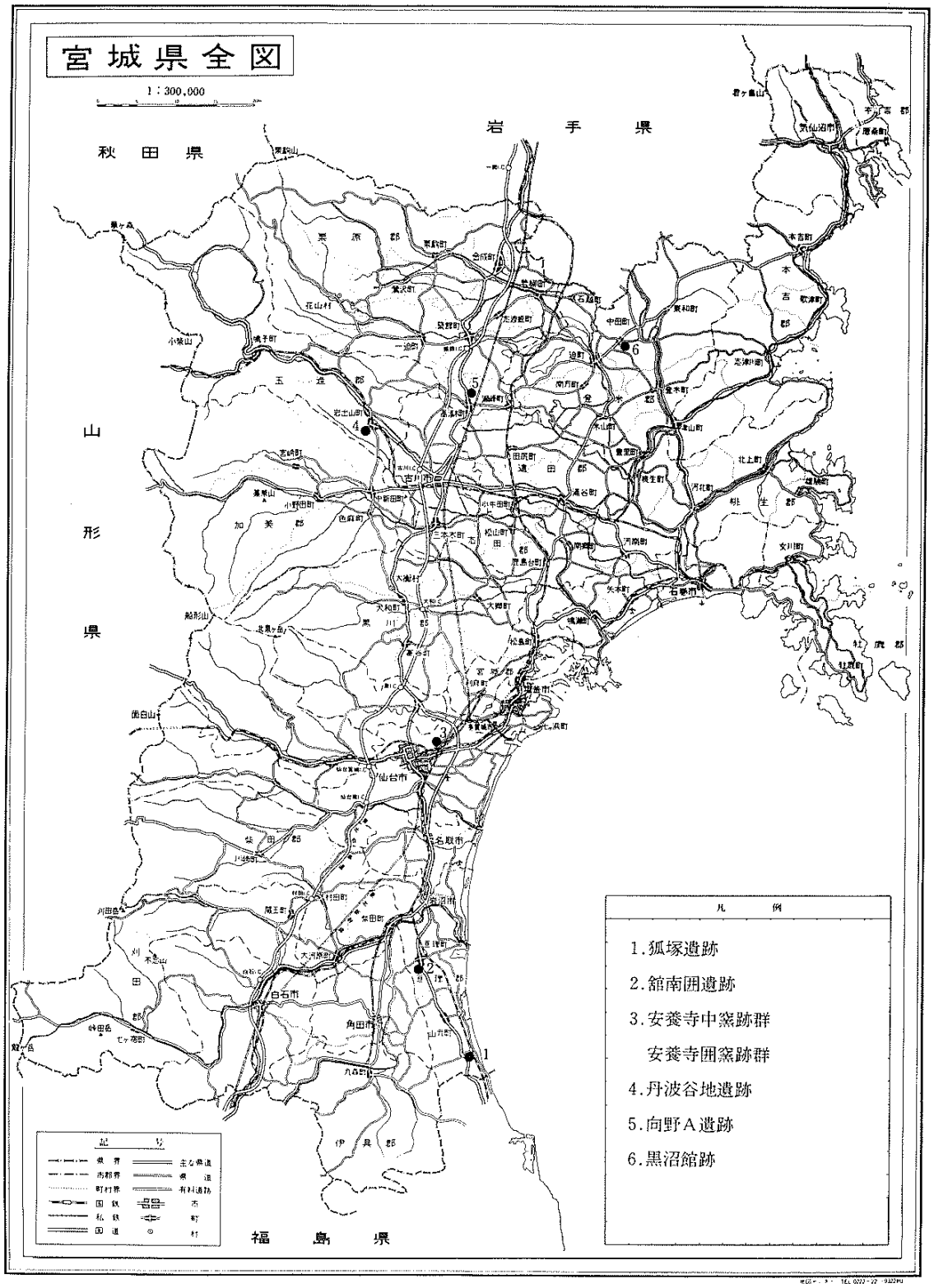
中田町中部の沖積地に位置する平城である。高泉館、鶴ヶ塀館などとも呼ばれており、寛永５年（1628）から宝永２年（1705）にかけて高泉長門定康が居所したとされている。絵図によると東辺と南辺に堀らしきものが見られるが、今回調査を行った南辺西半と西辺では明確に塀といえる遺構は検出されず、館の周囲に広がる沼地の一部に堀としての機能をもたせていた可能性がある。

〔丹波谷地遺跡〕

岩出山南部の丘陵上に立地する。農道の拡幅工事に伴い事前調査を実施した結果、縄文時代の落し穴と思われる土壙３基と溝などが検出された。

〔向野Ａ遺跡〕

高清水町中部の丘陵上に立地する遺跡である。かつて高清水バイパス建設に先だって遺跡の西端を調査した際にはさしたる遺構・遺物はみられなかった。今回の調査は遺跡の南部を東西に横切る町道の拡幅工事に伴う事前調査であり、奈良時代の竪穴住居跡１軒のほか、土壙・溝などが発見された。


宮城県全図
1：300,000
秋田県
岩手県
山形県
福島県
仙台市
石巻市
名取市
白石市
角田市
凡例
1.狐塚遺跡
2.舘南囲遺跡
3.安養寺中窯跡群
安養寺囲窯跡群
4.丹波谷地遺跡
5.向野A遺跡
6.黒沼館跡
記号
県界
市郡界
町村界
国鉄
私鉄
国道
主な県道
県道
有料道路
市
町
村

狐　塚　遺　跡

目　　次

Ⅰ　位置と地理的環境 …… 5
Ⅱ　周辺の遺跡について …… 5
Ⅲ　調査の方法と経過 …… 5
Ⅳ　遺構と遺物 …… 9
Ⅴ　まとめ …… 17

調 査 要 項

遺 跡 名：狐塚遺跡
遺跡記号：ＯＱ（宮城県遺跡地名表登載番号 14056）
所 在 地：亘理郡山元町坂元字坂下
調査原因：亘理郡山元町立坂元中学校建設
調査期間：平成 4 年（1992 年）10 月 15～16、19 日（確認調査）
　　同年 11 月 5 日、9～13 日、15～16 日（事前調査）
調査面積：1200 ㎡
調査主体：亘理郡山元町教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：小井川和夫・加藤道男・佐藤則之・古川一明・木皿直幸・千葉正康・三好秀樹

狐 塚 遺 跡

Ⅰ　位置と地理的環境

狐塚遺跡の所在する山元町は、宮城県の東南端に位置する。山元町周辺の地形を概観すると、西側は、福島県から延びる阿武隈山地の支脈が連なる。この阿武隈山地は、宮城県に入ると東西二つに枝分かれし北上する。東側を北上する支脈は、北端が阿武隈川と接する標高 200～300mの小丘陵で、その縁辺は小河川によって開析され、東辺には、海岸段丘が形成され海岸線がほぼ平行に延びており、その間には沖積地が広がっている。

狐塚遺跡は、亘理郡山元町坂元字坂下に所在し、常盤線坂元駅の南西約 1ｋｍの地点にある。阿武隈山地の縁辺から東に延びる小丘陵の北麓に位置している。北側には坂元川が流れ、両側に発達した沖積地には水田が営まれている。

今回調査した地点は、標高約 10m前後で北向きの緩斜面である。調査前は荒地となっており、古くは桑畑が営まれていた。そのため、遺構のほとんどが何らかの削平を受けていた。また調査区の東側は沢であったが、現在は造成されて杉林になっている。

Ⅱ　周辺の遺跡について

狐塚遺跡の所在する丘陵上には、3 つの遺跡が隣接している。東隣には、古墳時代から平安時代にかけての遺物包含地である向山遺跡があり、同じく南隣には、古代の遺物包含地である熊の作遺跡がある。向山遺跡・熊の作遺跡ともに分布調査しか行なわれていないため詳細は不明である。

狐塚遺跡の北約 2.5ｋｍの地点には合戦原遺跡があり、平成 2 年度の調査によって従来知られていた古墳群、横穴古墳群、窯跡群に加えて、古墳時代の集落跡の存在が明らかにされた。

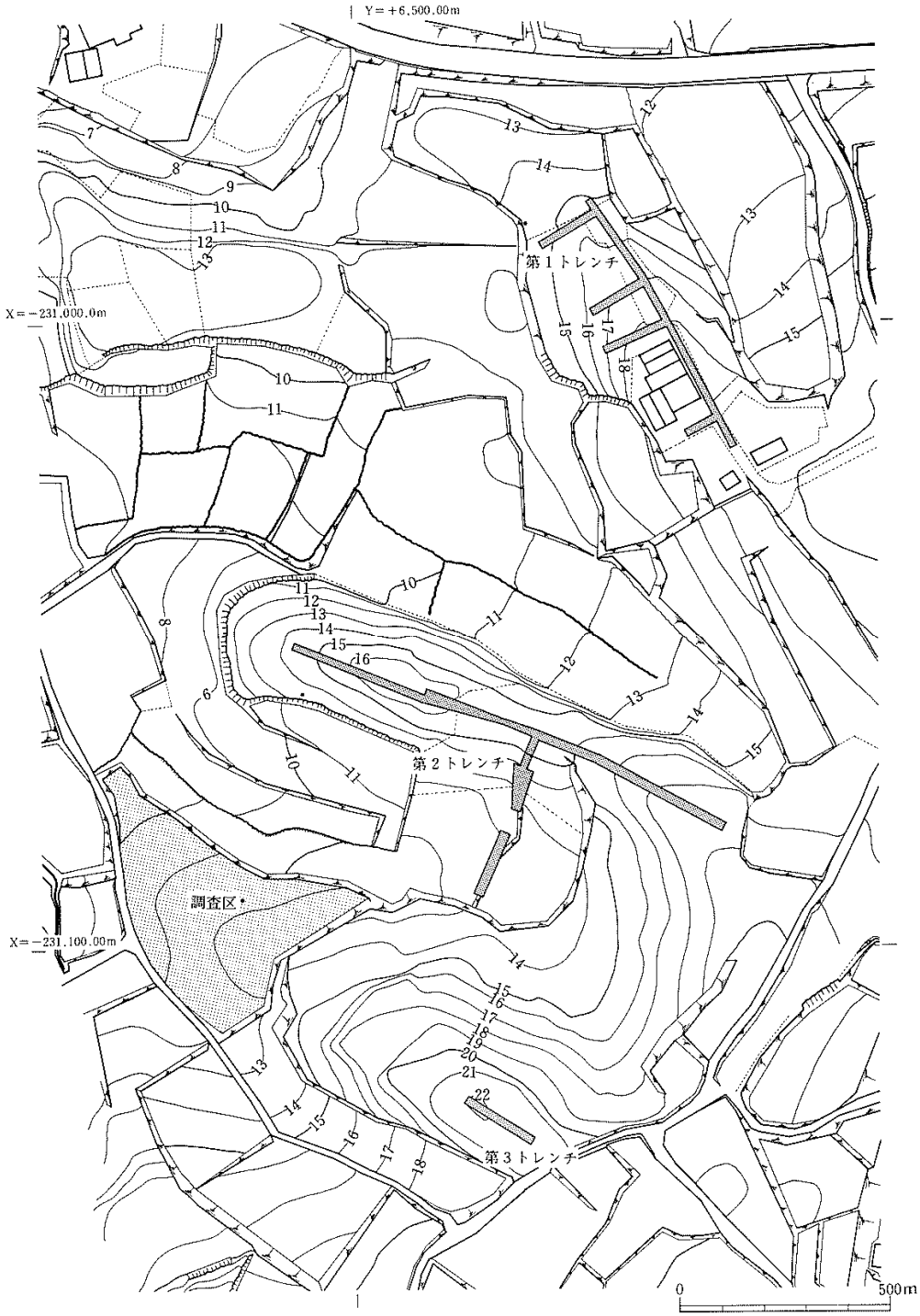
Ⅲ　調査の方法と経過

本遺跡の調査は、宮城県亘理郡山元町立坂元中学校建設に係わるものである。確認調査は、平成 3 年の分布調査によって遺構の存在が予想されていた丘陵の尾根上にトレンチを設定し、遺構の確認調査を行った（第 2 図）。その結果、最も西側のトレンチに住居跡が確認されたため､その地点を中心に拡張し 11 月 5 日から 11 月 16 日までの延べ 2 週間で事前調査を行った。

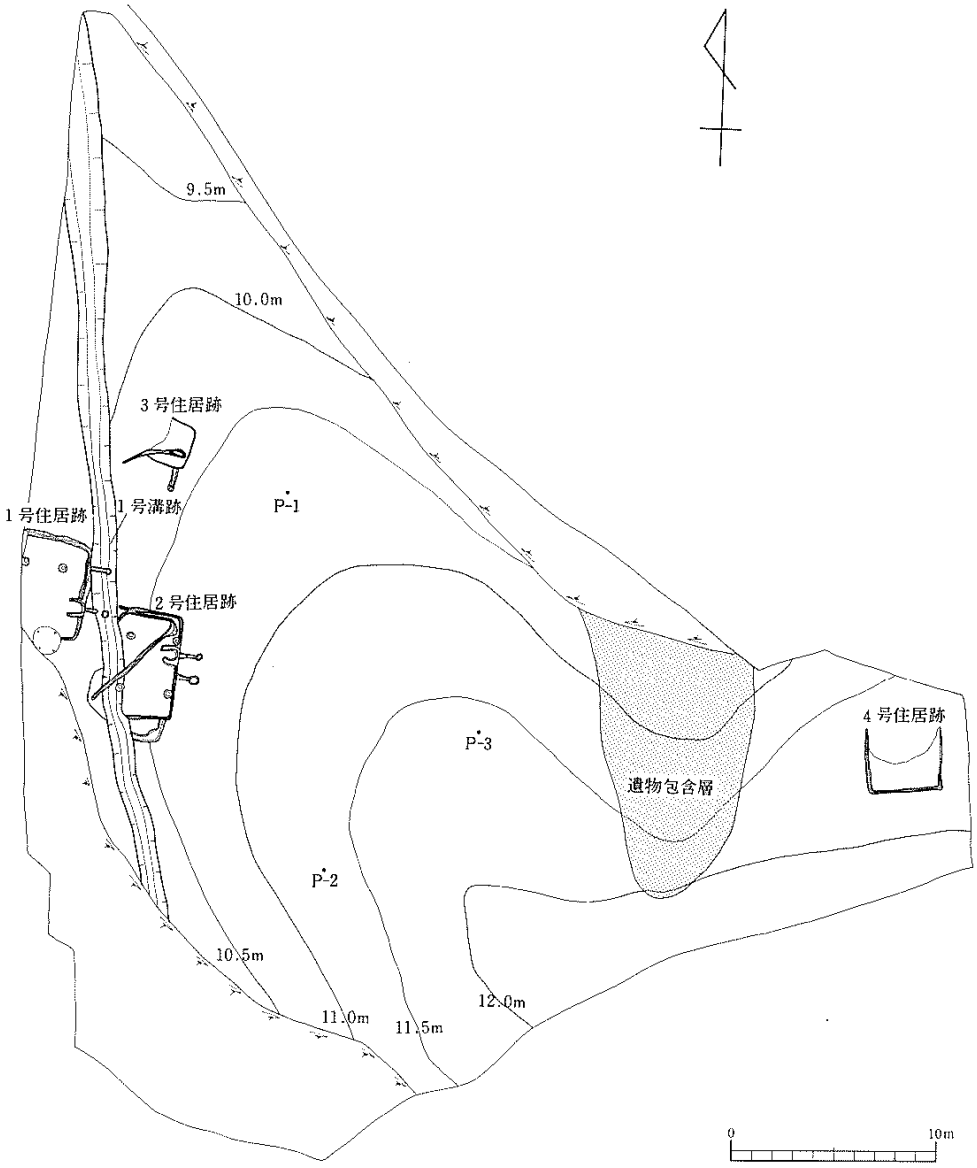
調査は、調査区の表土除去後に遺構の精査を行った。調査区は、平板により 100 分の 1 の平面図を作成し、各遺構については 20 分の 1 の平面図・断面図を作成した（第 3 図）。

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	下大沢遺跡	包含地	縄文前	18	浅生遺跡	包含地	古代
2	宮後遺跡	包含地	古代	19	北鹿野遺跡	包含地	古墳
3	大久保遺跡	包含地	縄文、古墳、古代	20	井戸沢横穴古墳群	横穴古墳	古墳後
4	館下窯跡	窯跡	古代	21	愛宕山館跡	城館	室町
5	中島館跡	城館	中世	22	日向遺跡	包含地	古墳中・後
6	石山原遺跡	包含地	縄文	23	館下遺跡	包含地	弥生
7	北の原遺跡	包含地	縄文早・前・後	24	向山遺跡	包含地	古墳～平安
8	室原遺跡	包含地	古代	25	狐塚古墳群	古墳	古墳後
9	北名生東遺跡	窯跡	古代	26	狐塚遺跡	集落	弥生、古墳、平安
10	合戦原遺跡	集落地	古墳	27	熊の作遺跡	包含地	古代
11	戸花山窯跡	窯跡	平安	28	饗首城跡	城館	江戸
12	貝吹城跡	城館	中世	29	川内遺跡	製鉄跡	平安？
13	卯月崎塚	塚	中近世	30	上平横穴古墳群	横穴古墳	古墳後
14	北越塚	塚	中世	31	駒場原遺跡	包含地	古代
15	上台遺跡	包含地	弥生（桝形囲）	32	一の沢遺跡	包含地	弥生
16	原遺跡	包含地	古墳	33	大壇・小壇・13壇	塚	不明
17	南楡現遺跡	包含地	縄文早・前、古墳	34	唐船番所跡	番所跡	江戸

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡


Y＝＋6,500.00m
X＝－231,000.0m
X＝－231,100.00m
第１トレンチ
第２トレンチ
第３トレンチ
調査区
0
500m

第２図　トレンチ配置図


9.5m
10.0m
3 号住居跡
1 号住居跡
1 号溝跡
P-1
2 号住居跡
P-3
遺物包含層
4 号住居跡
P-2
10.5m
11.0m
11.5m
12.0m
0
10m

第 3 図　遺構配置図

Ⅳ　遺構と遺物

調査区内からは、竪穴住居跡４軒と遺物包含層が検出された。

(1)　竪穴住居跡

第１号住居跡（第４図）

〔位置・確認面〕　調査区西側隅の、ほぼ中央部の地山面で検出された。西壁は、調査区外に延びている。

〔重複〕　第１号溝跡に切られている。また、南壁の一部が撹乱を受けている。

〔平面形・規模〕　残存する部分から平面形は南北 4.7m、東西 3.3m以上の方形を基調とするものと推定される。

〔堆積土〕　自然流入土である。

〔壁〕　地山を壁としており、急角度で立ち上がる。壁高は、最も残りの良い北壁で約 30ｃｍほどある。

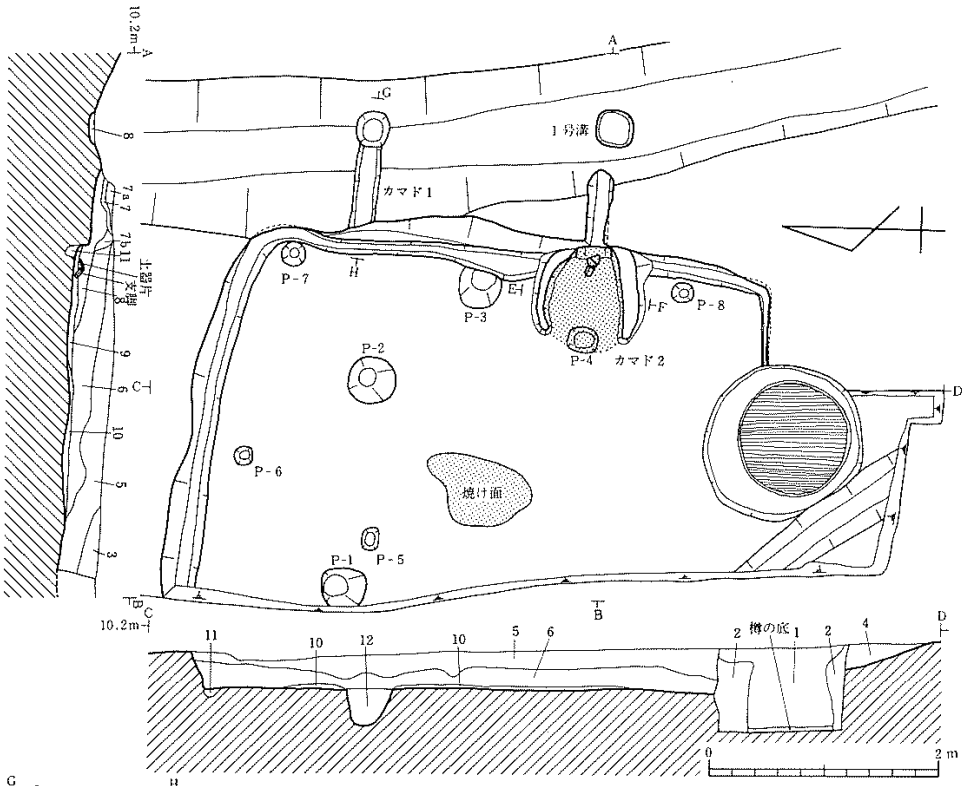
〔床面〕　地山を床としており、ほぼ平坦である。

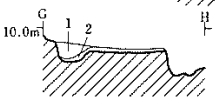
〔柱穴〕　床面で、合計８個のピットを検出した。これらのうち、位置関係や規模からＰ-1、Ｐ-2 の２個が主柱穴と考えられる。柱は抜き取られている。

〔カマド〕　東壁北寄り（カマド 1）と東壁中央よりやや南より（カマド 2）の２つが検出された。カマド１は煙道と煙出しピットが残存している。カマド２は、燃焼部、燃焼部側壁、煙道及び煙出しピットが検出された。燃焼部底面は赤褐色に焼けた痕跡があり、また中央よりやや奥に支脚に転用したと考えられる砥石とそれに折り重なるように甑がつぶれた形で検出された。燃焼部側壁は、粘性のあるシルトを積み上げて構築されている。煙道は長さが約 90ｃｍあり地下式になっていたと考えられるが、１号溝跡に一部削平されている。煙道の先端に、直径 32ｃｍの円形を呈する煙出しピットが掘られている。

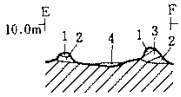
〔周溝〕　北壁から東壁沿いと南壁沿いの一部に検出され、幅は約 10ｃｍ～30ｃｍ程度である。東壁のカマド１付近で、２時期の変遷が確認された。古い時期のものは東側によっており、カマド２構築時に西側に作り替えたものと考えられる。

〔出土遺物〕　土師器、砥石がある。土師器は３点図示した（第５図 1～3）。これらはカマド内または煙り出しピット内から出土している。それ以外からの出土遺物は、全て小破片である。甑を除く土師器は、全て製作時にロクロを使用した痕跡が認められた。砥石は１点図示した（第５図 4）。これは出土状況及び表面に焼けた痕跡が認められることから、カマドの支脚に転用したものと考えられる。土師器については平安時代のものと考えられ、砥石についても同じ時期と考えられる。





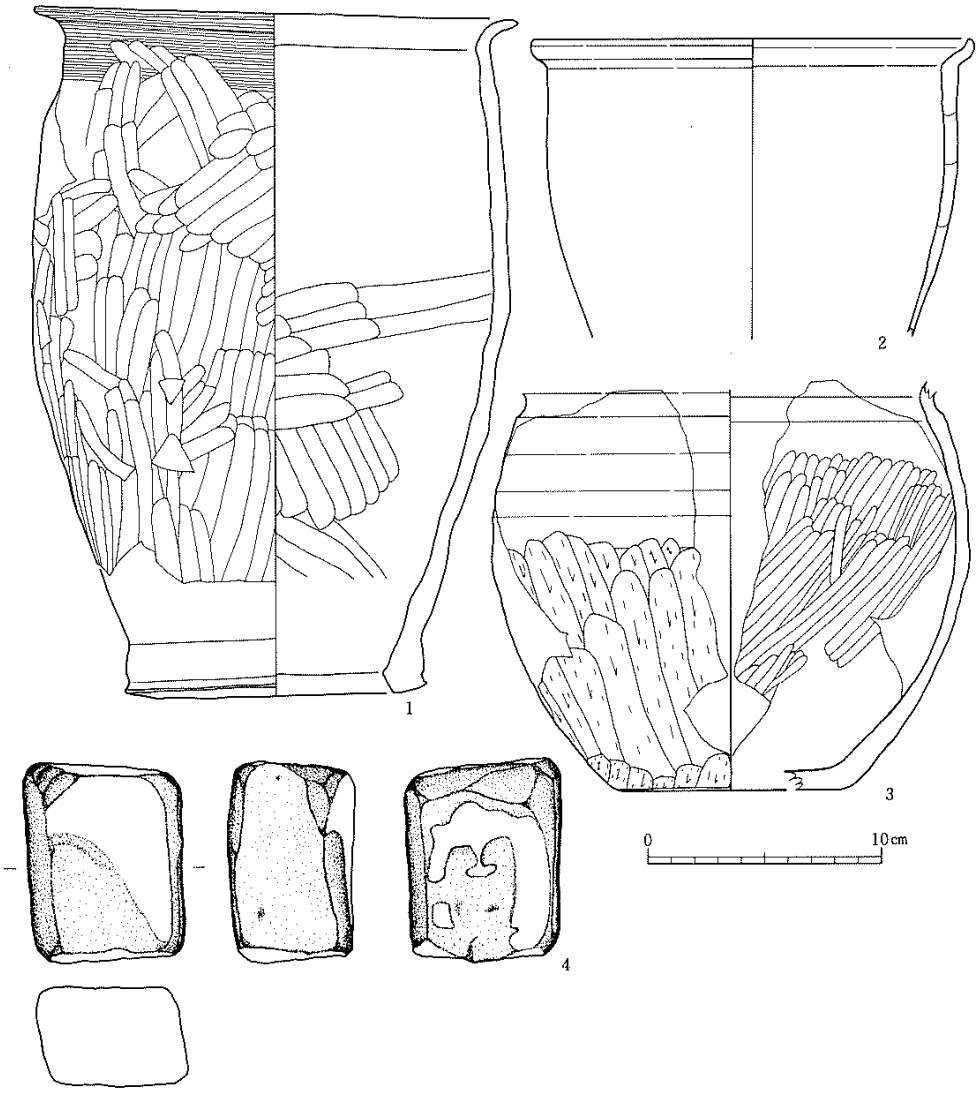
層No.	土色	土性	備考	
1	暗褐色土 (10YR3/3)	シルト	炭化物を多量に含む。焼土を含む。	自然流入土
2	灰黄褐色土 (10YR5/2)	シルト	焼土及び炭化物を少量含む。	



層No.	土色	土性	備考	
1	明黄褐土 (10YR6/6)	シルト	焼土及び炭化物粒が入る。	カマド構築土
2	にぶい黄褐土 (10YR6/4)	砂質シルト	焼土を少量含む。	
3	明黄褐土 (2.5YR7/6)	シルト	粘性及び締まりあり。	
4	暗赤褐土 (2.5YR3/4)		焼土を多く含む。	焼け面

層No.	土色	土性	備考	
1	黄褐色土 (10YR5/6)	シルト	炭化物粒及び酸化鉄を微量に含む。	攪乱
2	黒褐色土 (10YR3/1)	シルト	浅黄色砂質シルトをブロックで含む。	
3	にぶい黄褐色土	砂質シルト		表土
4	暗褐色土 (10YR3/3)	シルト	炭化物を微量に含む。	自然流入土
5	黒褐色土 (10YR3/2)	シルト	炭化物を少量含む。下部に黄褐色シルトを粒状に少量含む。	
6	黄褐色土 (10YR5/6)	砂質シルト	炭化物を少量含む。	
7 a	明黄褐色土 (10YR6/8)	シルト	褐灰色土が筋状に入る。	煙道崩落土
7 b	にぶい黄褐色土 (10YR5/4)	シルト		
8	褐色土 (10YR4/4)	シルト	焼土、炭化物を含む。	カマド内堆積土
9	暗褐色土 (10YR3/4)	粘質シルト	焼土、炭化物を多量に含む。	
10	明黄褐色土 (10YR7/6)	砂質シルト	炭化物を多く含む。焼土を含む。	住居内堆積土
11	にぶい黄褐色土 (10YR5/4)	粘質シルト	地山の土を若干含む。	周溝堆積土
12	黄褐色土 (10YR5/6)	粘質シルト		P 2 堆積土

第4図　第1号住居跡



番号	種　別	層　位	口　径	器　高	外　　面	内　　部	図版No.
1	土師器　甕	カマド内	20.7cm	29.7cm	口縁部：横ナデ　体部：ヘラナデ	体部：ヘラナデ	1
2	土師器　甕	P－5	(19.2cm)	——	不明	不明	2
3	土師器　鉢	カマド内	——	——	ロクロ調整、体下部：ヘラケズリ	体部：ヘラミガキ	3

番号	種　別	層　位	高　さ	幅	厚　さ	備　　考	図版No.
4	砥石	カマド内	(8.6cm)	6.9cm	5.5cm	再細に転用したもの。	4

第５図　１号住居出土遺物

第 2 号住居跡（第 6 図）

〔位置・確認面〕　調査区西側地山面で検出された。

〔重複〕　第 1 号溝跡に切られている。

〔平面形・規模〕　残存する部分から平面形は南北 5m、東西 3.2m以上の方形を基調とするものと推定される。

〔堆積土〕　自然流入土である。

〔壁〕　地山を壁としており、急角度で立ち上がる。壁高は、最も残りの良い東壁で約 30ｃｍほどある。

〔床面〕　地山を床としており、ほぼ平坦である。

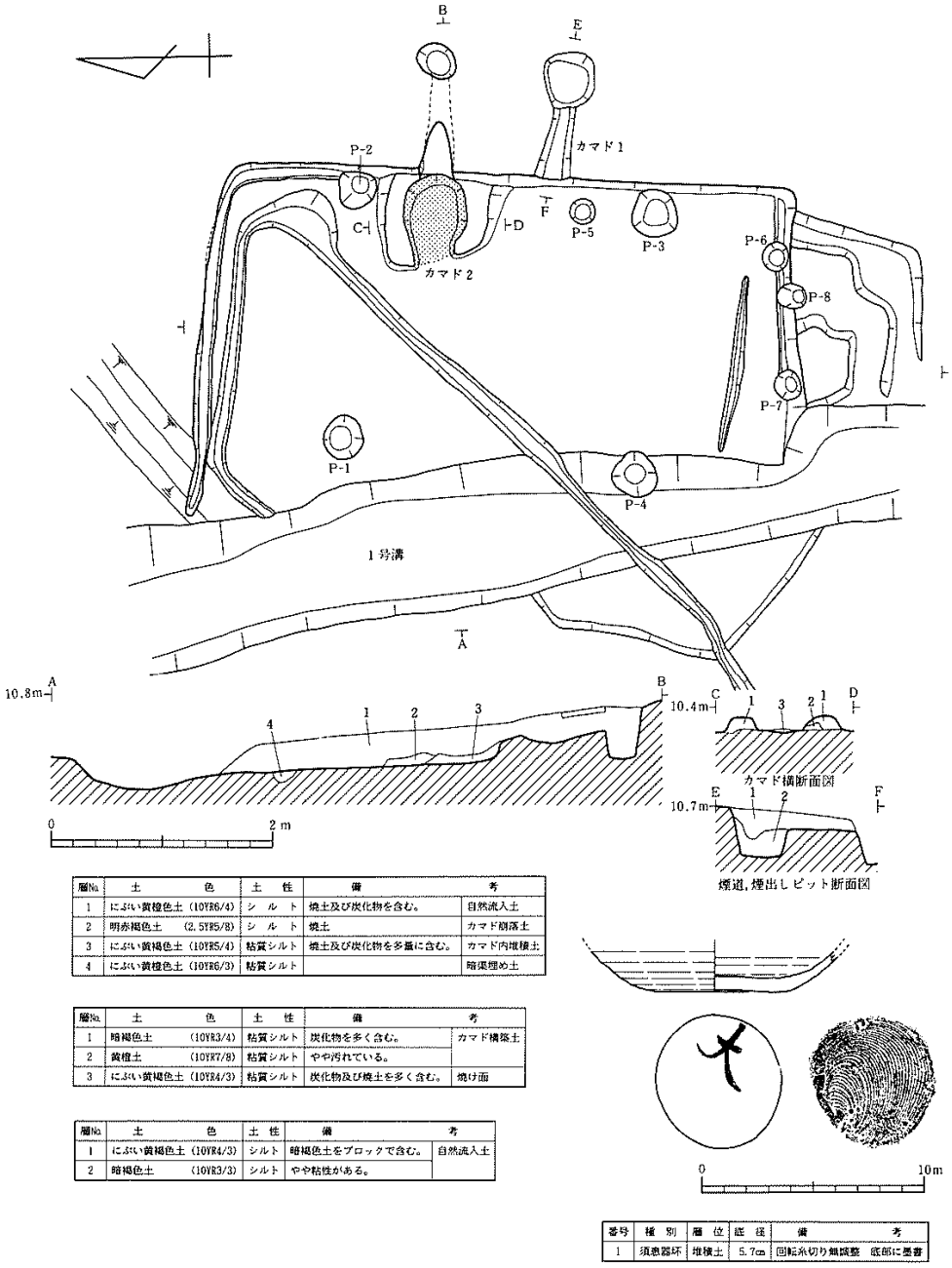
〔柱穴〕　床面で、合計 8 個のピットを検出した。これらのうち、位置関係や規模からＰ1～Ｐ4 の 4 個が主柱穴と考えられる。Ｐ2・Ｐ3 は、東壁沿いで検出され、全体的に東によっていると考えられる。この内、Ｐ2 は周溝を切る形で検出されている。柱痕跡は認められなかった。

〔カマド〕　東壁中央よりやや南寄り（カマド 1）と東壁中央より北寄り（カマド 2）の 2 つが検出された。カマド 1 は煙道と煙出しピットのみ残存し、燃焼部及び燃焼部側壁は撤去されている。カマド 2 は、燃焼部、燃焼部側壁、煙道及び煙出しピットが検出された。燃焼部底面には、赤褐色に焼けた痕跡がある。燃焼部側壁は、粘性のあるシルトを積み上げて構築されている。煙道は長さが 86ｃｍあり地下式になっていたと考えられ、煙道の先端に短径 29ｃｍ、長径 38ｃｍの楕円形を呈する煙出しピットが掘られている。

〔周溝〕　北壁沿いから東壁沿いの一部・南壁沿いに検出され、幅約 16ｃｍ程度である。北壁沿いの周溝は西端が撹乱を受けている。東壁沿いの周溝は北壁からＰ2 まで伸びるが、カマド以南では検出されなかった。南壁沿いの周溝は南東隅からＰ7 まで伸び、Ｐ7 以西では検出されなかった。

〔溝〕　床面下から、幅 10～45ｃｍの溝跡が検出された（第 6 図）。北壁沿いの周溝に沿うようなかたちで伸び、北東隅から西南西に抜けていくものと、南壁沿いで、東西に 1.6m伸び終結しているものである。

〔出土遺物〕　土師器、須恵器坏がある。土師器は、小破片で図示できるようなものが無かったが、製作時にロクロを使用した痕跡が認められた。堆積土中からは、須恵器坏が出土している。底部は回転糸切り無調整で、「大」の墨書がある。これらはともに、平安時代のものと考えられる（第 6 図）。



層No.	土色	土性	備考	
1	にぶい黄橙色土 (10YR6/4)	シルト	焼土及び炭化物を含む。	自然流入土
2	明赤褐色土 (2.5YR5/8)	シルト	焼土	カマド崩落土
3	にぶい黄褐色土 (10YR5/4)	粘質シルト	焼土及び炭化物を多量に含む。	カマド内堆積土
4	にぶい黄橙色土 (10YR6/3)	粘質シルト		暗渠埋め土

層No.	土色	土性	備考	
1	暗褐色土 (10YR3/4)	粘質シルト	炭化物を多く含む。	カマド構築土
2	黄橙土 (10YR7/8)	粘質シルト	やや汚れている。	
3	にぶい黄褐色土 (10YR4/3)	粘質シルト	炭化物及び焼土を多く含む。	焼け面

層No.	土色	土性	備考	
1	にぶい黄褐色土 (10YR4/3)	シルト	暗褐色土をブロックで含む。	自然流入土
2	暗褐色土 (10YR3/3)	シルト	やや粘性がある。	

番号	種別	層位	底径	備考
1	須恵器坏	堆積土	5.7cm	回転糸切り無調整 底部に墨書

第6図　第2号住居跡と出土遺物

第３号住居跡（第７図）

〔位置・確認面〕　調査区西側、北寄りの地山面で検出された。

〔平面形・規模〕　西側が削平を受けているが、残存する部分から平面形は南北 2m、東西 2m以上で方形を基調とするものと推定される。

〔堆積土〕　自然流入土である。

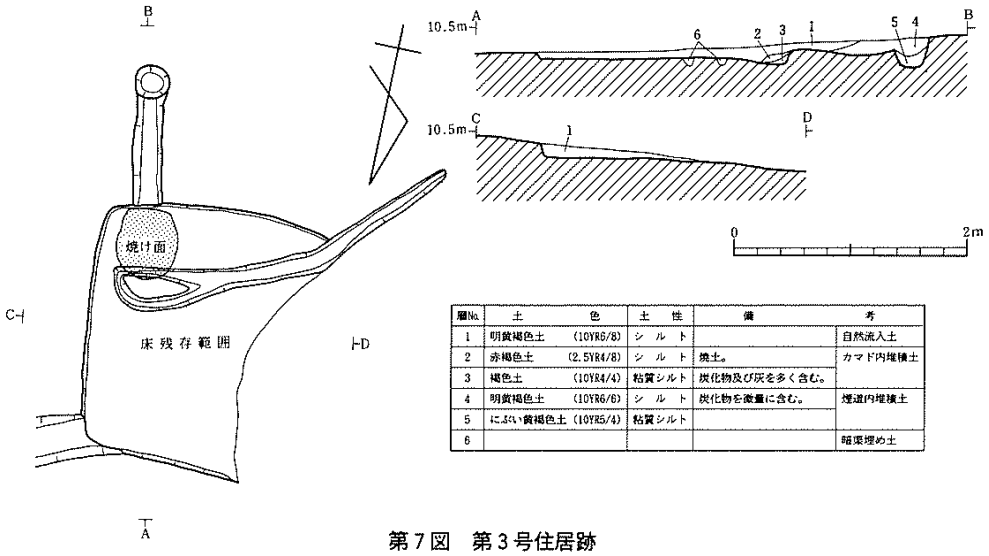
〔壁〕　地山を壁としており、急角度で立ち上がる。壁高は、最も残りの良い東壁で約 14ｃｍほどある。

〔床面〕　地山を床としており、ほぼ平坦である。

〔カマド〕　南壁東隅に設けられており、煙道と煙出しピットが検出された。煙道は、長さ約 90ｃｍあり、その先端に直径約 29ｃｍの円形の煙出しピットが掘り込まれている。燃焼部側壁は検出されず、燃焼部底面と思われるところに焼けた痕跡が認められた。

〔溝〕　床面下から幅 9～20ｃｍの溝跡が検出されている。南壁の焼け面下から、南壁隅を通り住居外に伸びるものである。これは、暗渠と考えられる。

〔出土遺物〕　土師器がある。土師器は小破片で図示できるようなものが無かったが、製作時にロクロを使用した痕跡が認められ、平安時代のものと考えられる。



層No.	土　　色	土　性	備　　考	
1	明黄褐色土　(10YR6/8)	シ　ル　ト		自然流入土
2	赤褐色土　(2.5YR4/8)	シ　ル　ト	焼土。	カマド内堆積土
3	褐色土　(10YR4/4)	粘質シルト	炭化物及び灰を多く含む。	
4	明黄褐色土　(10YR6/6)	シ　ル　ト	炭化物を微量に含む。	煙道内堆積土
5	にぶい黄褐色土　(10YR5/4)	粘質シルト		
6				暗渠埋め土

第７図　第３号住居跡

第４号住居跡（第８図）

〔位置・確認面〕　調査区東側地山面で検出された。

〔平面形・規模〕　北側が削平を受けているが、残存する部分から平面形は南北 3.2m以上、東西 3.6mで方形を基調とするものと推定される。

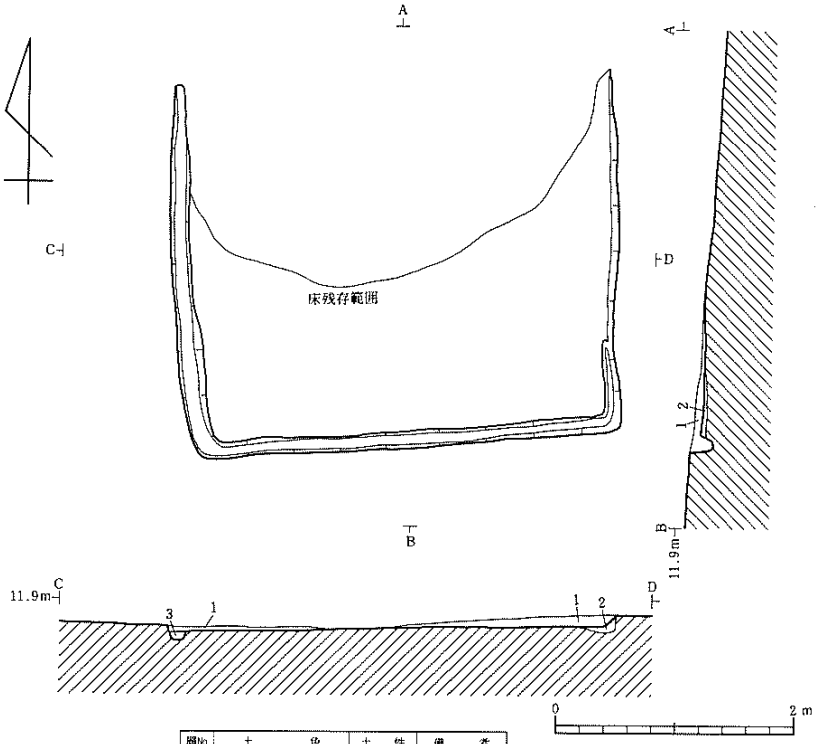
〔堆積土〕　自然流入土である。

〔壁〕　地山を壁としており、急角度で立ち上がる。壁高は、最も残りの良い東壁で約 20ｃｍほどある。

〔床面〕　地山を床としており、ほぼ平担である。

〔周溝〕　南壁沿いと西壁沿い・東壁沿いの一部で検出され、幅は 10ｃｍ～22ｃｍ程度である。

〔出土遺物〕　土師器がある。土師器は、小破片で図示できるようなものが無かったが、製作時にロクロを使用した痕跡が認められ、平安時代のものと考えられる。



層No.	土　色	土　性	備　考
1	黄褐色土　(10YR5/8)	砂質シルト	
2	黄褐色土　(10YR5/8)	砂質シルト	掘り方埋め土。
3	明黄褐色土　(10YR6/8)	シ　ル　ト	周溝内堆積土。

第８図　第４号住居跡

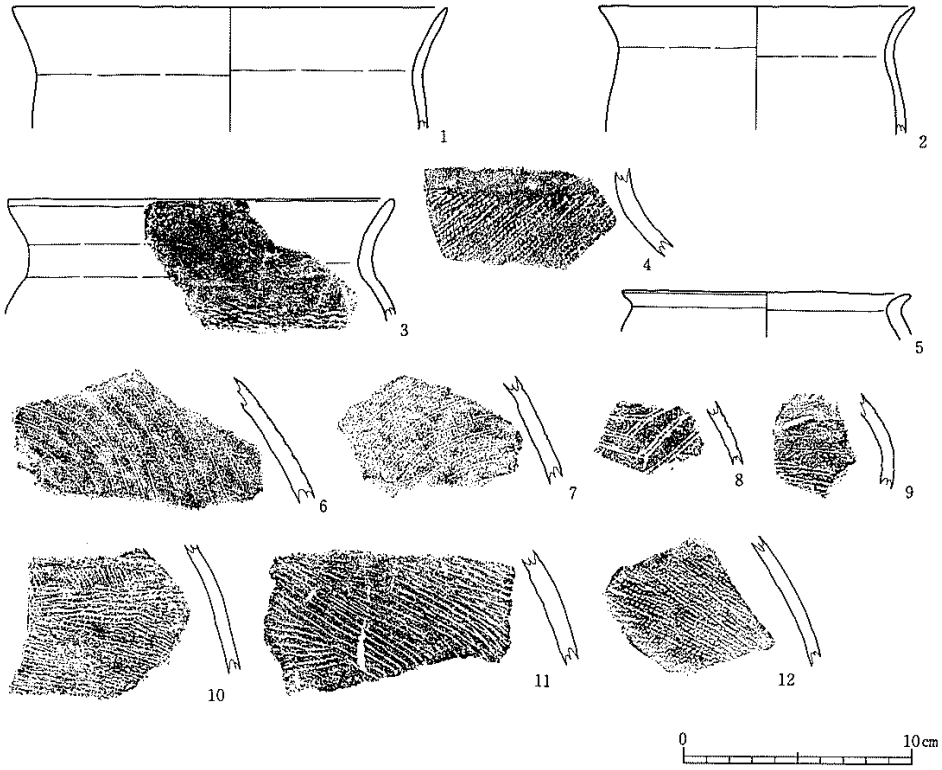
(2)　弥生時代遺物包含層（第９図）

〔位置・確認面〕調査区東側の、北側へ沢状に落ち込んでいる地点で確認された。

〔規模〕北側へ広がる形で堆積しており、面積は約 70 ㎡ある。

〔堆積土〕１層からなり、最も厚いところで約 29ｃｍ確認した。

〔出土遺物〕遺物には甕、壷、フレイク類があり、出土状況はまばらで不規則である。甕や壷は、完形品がなく全て破片資料である。口縁部破片資料は 12 点、うち図示 4 点、体部破片資料（文様の明確なもの）82 点、うち図示 8 点である。ここでは、文様及び器形の不明確なものを略いた。



番号	外　　面	図版No.	番号	外　　面	図版No.
1	体部：不明　頸部：無文	3	7	体部：２本一単位の平行沈線	10
2	体部：不明　頸部：無文	1	8	体部：２本一単位の平行沈線	9
3	体部：撚り糸文　頸部：無文	2	9	体部：２本一単位の平行沈線・撚り糸文	11
4	体部：撚り糸文（Ｒ）　頸部：無文	5	10	体部：横方向に撚り糸文　頸部：縦方向に縄文？	7
5	体部：不明　頸部：無文	4	11	撚り糸文	12
6	体部：２本一単位の平行沈線	8	12	体部：撚り糸文（Ｒ）	6

第９図　弥生時代遺物包含層出土遺物

第 9 図 1～5 は、頚部から口縁部にかけて無文のものである。6～9 は、体部に 2 本 1 単位の平行沈線が施文されたもので、体部下半に撚糸文が施文されたものもある。10～12 は、体部に地文の撚糸文のみを施したものである。

以上の土器については東北南部における弥生土器編年の中での位置付けを考えると、6～9 は施文方法及び特徴が明瞭であり、十三塚式（伊東：1957）に比定される。

その他の遺物についても、時期的な差違はないものと考えておく。

Ⅴ　まとめ

今回の調査によって、従来から知られていた古墳群に加えて弥生時代の遺物や平安時代の住居跡が複合する遺跡であることが明らかとなった。

住居跡からは、土師器甕、土師器鉢、土師器甑、須恵器坏、砥石が出土しており、時期は平安時代である。弥生時代の遺物は中期後葉の甕や壷、フレイク類が出土している。

遺跡の範囲は、調査区から水田に行くにしたがって傾斜が緩やかになっていることから、本遺跡は北側の水田付近まで広がっていく可能性が考えられる。また、同丘陵上に所在する向山遺跡、熊の作遺跡についても本遺跡との何らかの関連性が考えられるため今後の調査に期待したい。

引用・参考文献

伊東信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』1

氏家和典（1957）：「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第 14 輯　東北史学会

竹島國基（1968）：「先史時代」『原町市史』

山元町誌編纂委員会（1971）：『山元町誌』

丹羽茂・柳田俊雄・阿部恵（1974）：「西野田遺跡－東北新幹線調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第 35 集宮城県教育委員会

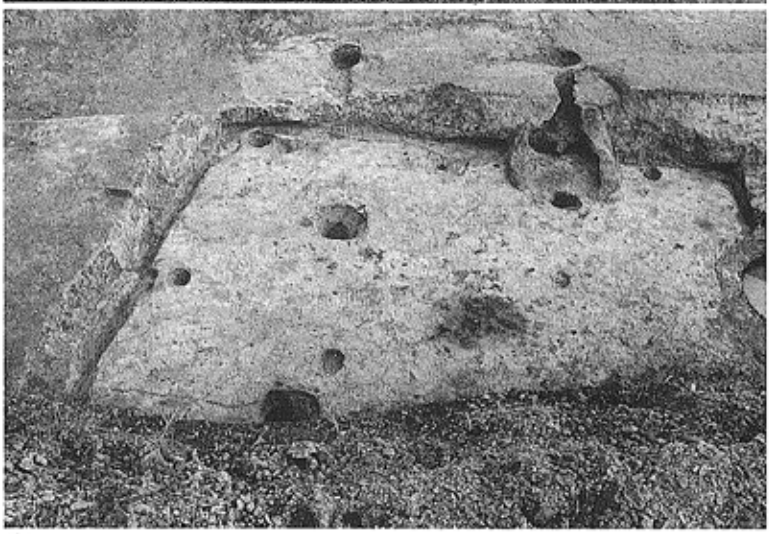
太田昭夫（1988）：「宮城県における弥生土器編年研究の現状と課題」『第 2 回縄文文化検討会シンポジウム・東北地方の弥生土器の編年について』縄文文化研究会

加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』

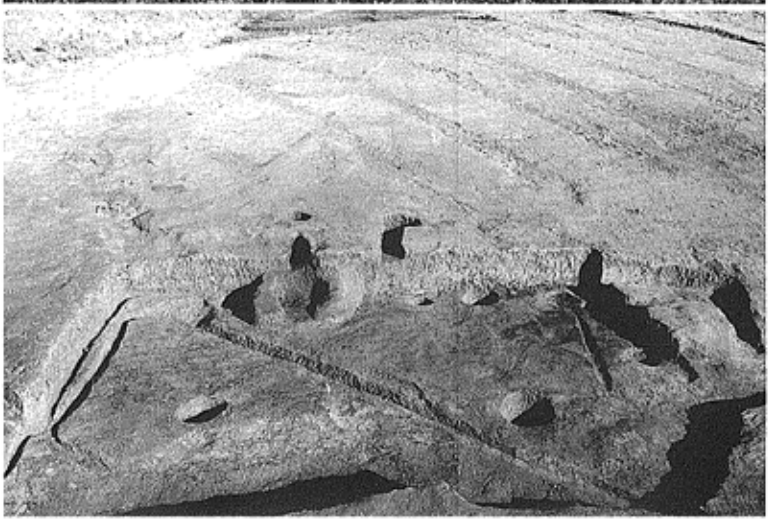
写　真　図　版

図版１　調査区遠景
（北から）

図版２　１号住居跡
（西から）



図版３　２号住居跡
（西から）



図版４　３号住居跡
（北から）

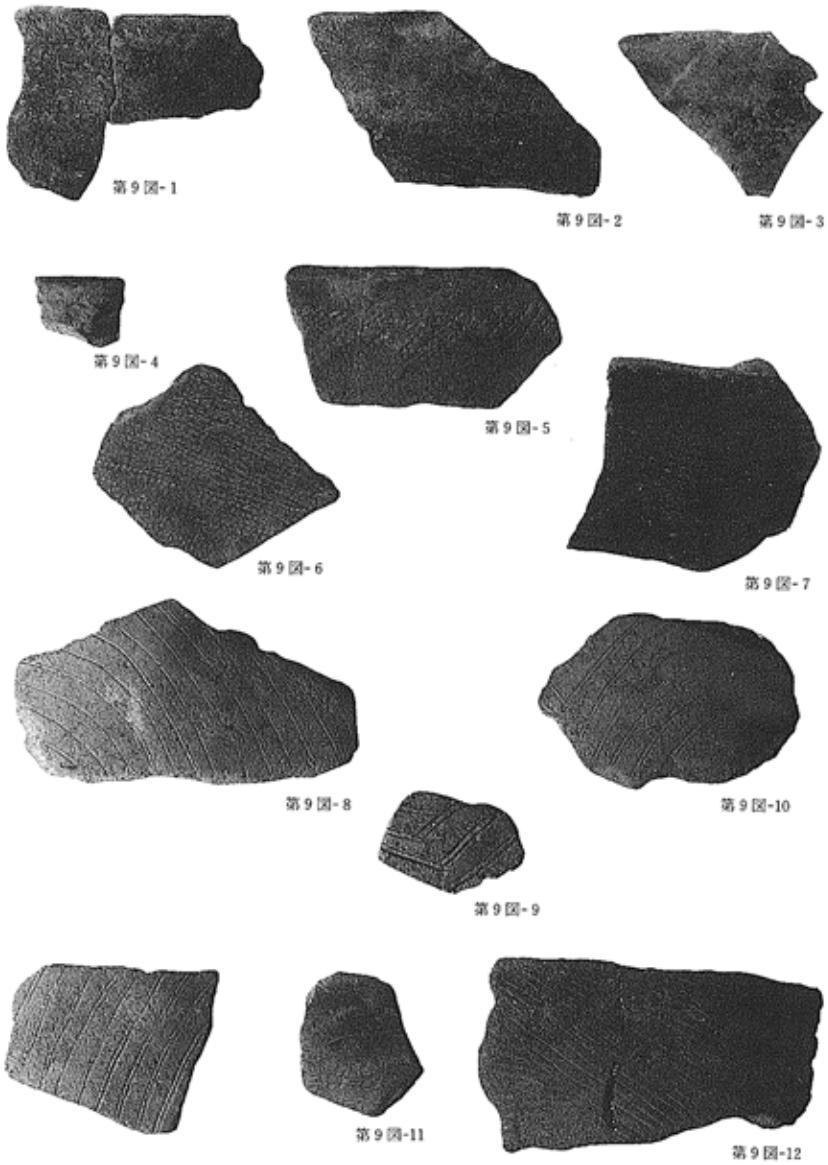
図版５　４号住居跡
（北から）

第5図-1

第5図-3

第5図-2

図版6　1号住居跡出土遺物



図版7　弥生時代遺物包含層出土遺物

舘　南　囲　遺　跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 27
Ⅱ　周辺の遺跡 …… 27
Ⅲ　調査の方法と経過 …… 30
Ⅳ　発見された遺構と遺物 …… 30
Ⅴ　まとめ …… 39
引用・参考文献 …… 40
写真図版 …… 41

調 査 要 項

遺 跡 名：舘南囲遺跡（たてみなみがこいいせき）
　　宮城県遺跡地名表記載番号 13005
遺跡記号：ＭＫ
遺跡所在地：亘理郡亘理町字雪穴地内
調査原因：通学路建設
発掘面積：2800 ㎡
調査期間：1992 年 3 月 2～31 日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：阿部博志、佐藤則之、須田良平、菅原弘樹、小村田達也、岩見和泰、木皿直幸、
　　早川英紀

舘南囲遺跡

Ⅰ　遺跡の位置と環境

舘南囲遺跡は常磐線亘理駅の南西方向約 2ｋｍ、宮城県亘理郡亘理町字雪穴に所在する。亘理町は宮城県の南東部に位置し、北は阿武隈川を境にして岩沼市、南は亘理郡山元町、西は角田市と接し、東は太平洋と面している。

町内の地形は大きく東西に二分される。東部には沖積平野が開け、西部には標高 200m の阿武隈山地が南北に走っている。沖積平野には西部の阿武隈山地から派生する数条の丘陵が延びている。

舘南囲遺跡は、これら阿武隈山地の縁辺に発達した北東へ延びる小丘陵のほぼ東端、標高 33～35mの丘陵頂部に立地する。今回の調査区の北側は土取りによって旧地形は失われており、東側は国道 6 号線が南北を縦走し、さらにその東には亘理城が立地している。

なお、同じ小丘陵上の南斜面には、1989・90 年度に調査され、中世の遺構群が検出された舘南囲遺跡が立地している。

Ⅱ　周辺の遺跡

亘理町内には旧石器時代から中・近世にかけて多くの遺跡が営まれている。縄文時代の遺跡としては、中期の八ツ入遺跡、鹿野遺跡、北鹿島遺跡、後・晩期には畑中貝塚、椿貝塚などがある。とくに椿貝塚はヤマトシジミを中心とした汽水性貝塚で規模も大きく、昭和 48 年の調査では縄文後期の住居跡も検出されている。

弥生時代の遺跡としては吹田東遺跡、大森山遺跡などがあるが、その数は少なく、実態は明らかではない。

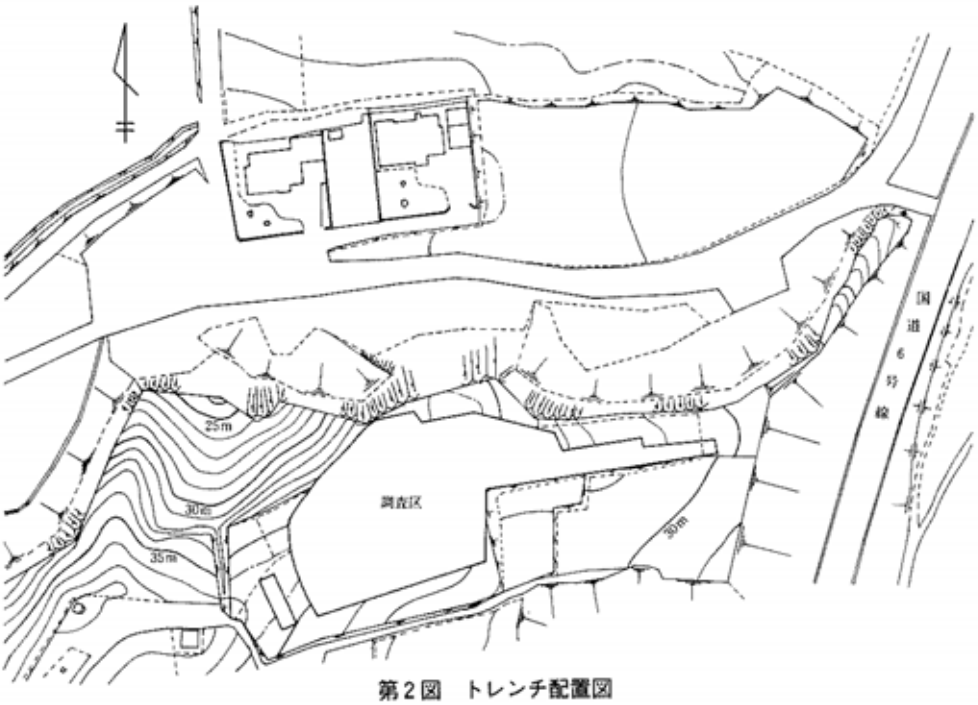
古墳時代の遺跡としては、長井戸古墳群、鹿島八幡堂横穴群、桜小路横穴群、竹の花横穴群などの古墳群が数多く分布している。また、これら古墳群形成の背景となったと考えられる集落跡も数多く分布しているが、その代表的なものとして宮前遺跡があげられる。昭和 48 年の調査では、古墳時代前期の住居跡が 23 軒、中期の住居跡が 8 軒、奈良・平安時代の住居跡が 7 軒検出されている（宮城県教委：1975・1983）。

奈良・平安時代になると平成元年・2 年に調査された舘南囲遺跡のような集落跡が増えてくる。また、集落跡以外の遺跡としては三十三間堂官衙遺跡がある。三十三間堂官衙遺跡は、はじめ平安時代末ごろの寺院跡かと考えられていたが、昭和 61 年からの 4 次にわたる調査によって平安時代前半ごろの陸奥国亘理郡衙であることが明らかとなった。

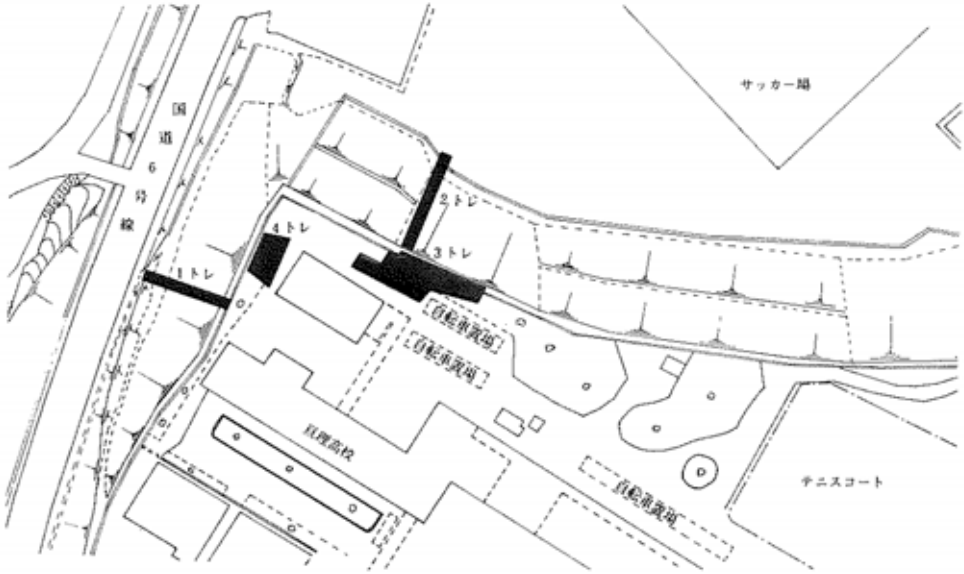
中・近世の遺跡としては、本遺跡に隣接する亘理城をはじめとして、1989・1990 年度に

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	舘南囲遺跡	縄文中、弥生、古代、中世	24	吹田東遺跡	弥生	47	大森山遺跡	弥生
2	亘理城跡	弥生、古墳、中世、近世	25	北鹿島東遺跡	平安	48	小松堂館跡	弥生、古代、中世
3	小堤城跡（大雄寺館）	中世	26	柚ケ沢横穴古墳群	古墳後、奈良	49	三十三間堂遺跡	弥生、奈良、平安
4	雷穴囲遺跡	古代	27	竹の花囲遺跡	古代	50	山入遺跡	縄文中・後
5	泉ケ入囲遺跡	縄文、古代	28	竹の花横穴	平安	51	山入南遺跡	縄文
6	泉ケ入遺跡	縄文中、古代	29	北鹿島遺跡	縄文中、古代	52	三門城跡	中世
7	卑ケ入遺跡	弥生、古代	30	北鹿島西遺跡	古代	53	鳩原城跡	中世
8	竜円寺遺跡	縄文、平安	31	雁田西遺跡	平安	54	石原遺跡	縄文中・古代
9	堀の内遺跡	古代	32	オフロ遺跡	縄文中、古代	55	石名畑遺跡	古墳後
10	松栗囲遺跡	縄文後・晩古代	33	雁田横穴古墳群	古墳後	56	館貝塚	縄文前・中
11	竜円寺前遺跡	弥生、古代	34	雁田遺跡	弥生、古代	57	北橋城跡	中世
12	砂取場遺跡	古代	35	椿貝塚	縄文後・晩	58	南橋城跡	中世
13	北長瀞遺跡	古代	36	若宮囲遺跡	古代	59	逗館跡	中世
14	中条遺跡	古代	37	堤の内横穴古墳群	古墳後、古代	60	細町横穴古墳群	古墳後
15	鳥飼遺跡	古代	38	小松堂遺跡	縄文中、弥生、古代	61	細町横穴古墳群	古墳後
16	鹿野遺跡	縄文中	39	堤の内遺跡	弥生	62	古内城跡	中世
17	河原囲横穴古墳群	奈良、平安	40	八ツ入遺跡	縄文中、古代	63	鹿田館跡	中世
18	宮前遺跡	弥生、古墳、古代	41	小松堂囲遺跡	縄文中、弥生、古代	64	八幡城跡	中世
19	長井戸古墳群	古墳前・中	42	中沢横穴古墳群	古墳後	65	土浮貝塚	縄文前
20	桜小路遺跡	平安	43	小城内遺跡	縄文前・中、古代	66	小坂城跡	中世
21	桜小路古墳群	奈良、平安	44	小城内館跡	中世	67	西田遺跡	古墳、奈良
22	鹿島八幡堂横穴古墳群	古墳後、奈良	45	谷地添遺跡	旧石器、弥生、古代	68	八幡堂後遺跡	平安
23	寺前囲遺跡	古代	46	田沢遺跡	縄文前・中			

第１図　周辺の遺跡



第2図　トレンチ配置図



第3図　亘理城トレンチ配置図

調査された舘南囲遺跡・小堤城（大雄寺館）跡、小城内館跡、十文字館跡などが知られている。

Ⅲ　調査の方法と経過

本遺跡の調査は、亘理中学校および亘理高校通学路建設に係わるものである。

まず、工事に先立って通学路建設にかかる部分に任意のトレンチを設定し、遺構の有無を確認したところ、焼け面を検出し少量の遺物も出土したため、事前調査に切り替えて調査を行なった。

その結果、縄文時代の住居跡１軒、古墳時代の住居跡１軒、近世墓多数、遺物包含層などを検出した。

調査は、まず調査区の表土除去を重機によって行ない、その後に遺構の精査を行なった。調査で検出した遺構については、平板測量および 20 分の１の簡易遣り方測量によって平面図を作成し、必要に応じて断面図も作成した。写真記録については、35mmモノクロ写真・同カラーリバーサル写真によって行なった。

また、舘南囲遺跡の調査に伴行して亘理城に関しても調査を行なっている。

亘理城の調査は、通学路建設にかかる部分にトレンチを任意に設定して行なった（第 3 図）。その結果、1 トレンチから亘理城の外掘が新旧 2 時期確認された。しかし、堀は現在の国道 6 号線の下まで延びておりその幅を確認することはできなかった。また、2 トレンチでは旧表土の上に 3 枚の整地層を確認したが、これらは旧地形から考えるといずれも現代のもので、亘理城構築に伴うものではないと考えられた。その後、平板測量によって 100 分の１の調査区平面図、20 分の１の断面図を作成し、写真撮影を行ない調査を終了した。

Ⅳ　発見された遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構には、竪穴住居跡 2 軒、焼土遺構１基、土壙、ピット、溝があり、また、調査区北側の斜面からは遺物包含層を検出した。それらの遺構や遺構外から、縄文土器、土師器、石器などが出土している。

第１号住居跡（第 4・5 図）

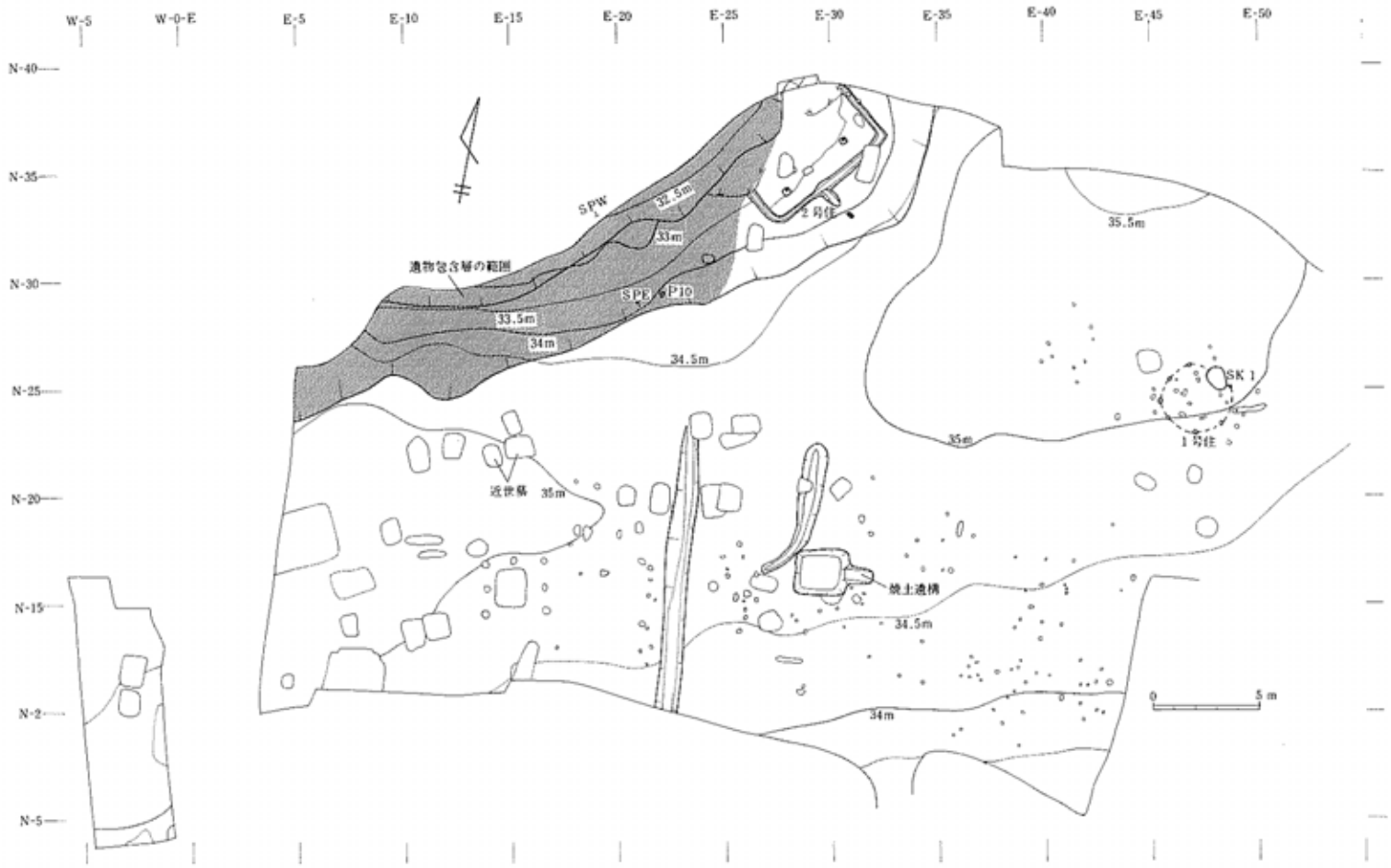
[位置・確認面]　調査区のほぼ中央やや東寄りで検出した。確認面は地山である。

[平面形]　平面形を知る手がかりは少ないが、壁柱穴と思われるピットの配置などから、円形を基調とするものと考えられる。

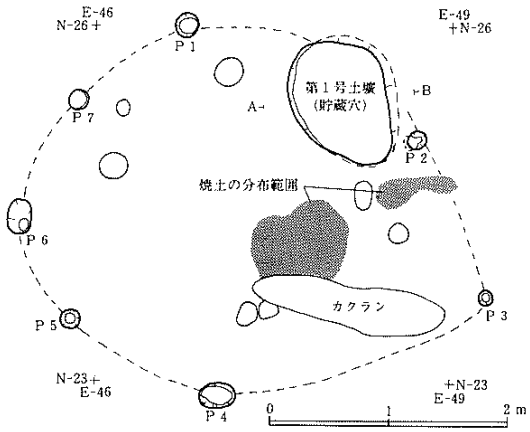
[堆積土・壁]　削平を受けており、残っていない。

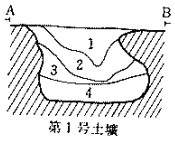
[床面]　削平されているが、地山を床としているものと思われる。

[柱穴]　住居内と考えられる範囲から、14 個のピットが検出されている。どのピットからも柱痕跡は見つかっていない。主柱穴と考えられるピットは見つかっていないが、P1～P


W-5
W-0-E
E-5
E-10
E-15
E-20
E-25
E-30
E-35
E-40
E-45
E-50
N-40
N-35
N-30
N-25
N-20
N-15
N-2
N-5
SPW
32.5m
33m
遺物包含層の範囲
SPE
PIO
33.5m
34m
34.5m
2号住
35.5m
SK 1
1号住
35m
近世墓
35m
焼土遺構
34.5m
34m
0
5m

第4図　遺構配置図





No	土色	土性	特徴
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	撹乱
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土、炭化物を若干含む
3	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を若干含む
4	10YR2/2 黒褐色	シルト	焼土、炭化物を含む

第5図　1号住居跡・第1号土壌

No	器種	器形	層位	特徴	登録	図版
1	縄文土器	深鉢?	4層	胴部：曲流渦巻文（隆沈線）、各部連結	32	3－1
2	縄文土器	深鉢	2層	胴部：渦巻文（沈線文）、縄文RL	1	3－2
3	縄文土器	深鉢	1層	口縁部：渦巻文	3	

第6図　第1号住居貯蔵穴出土遺物

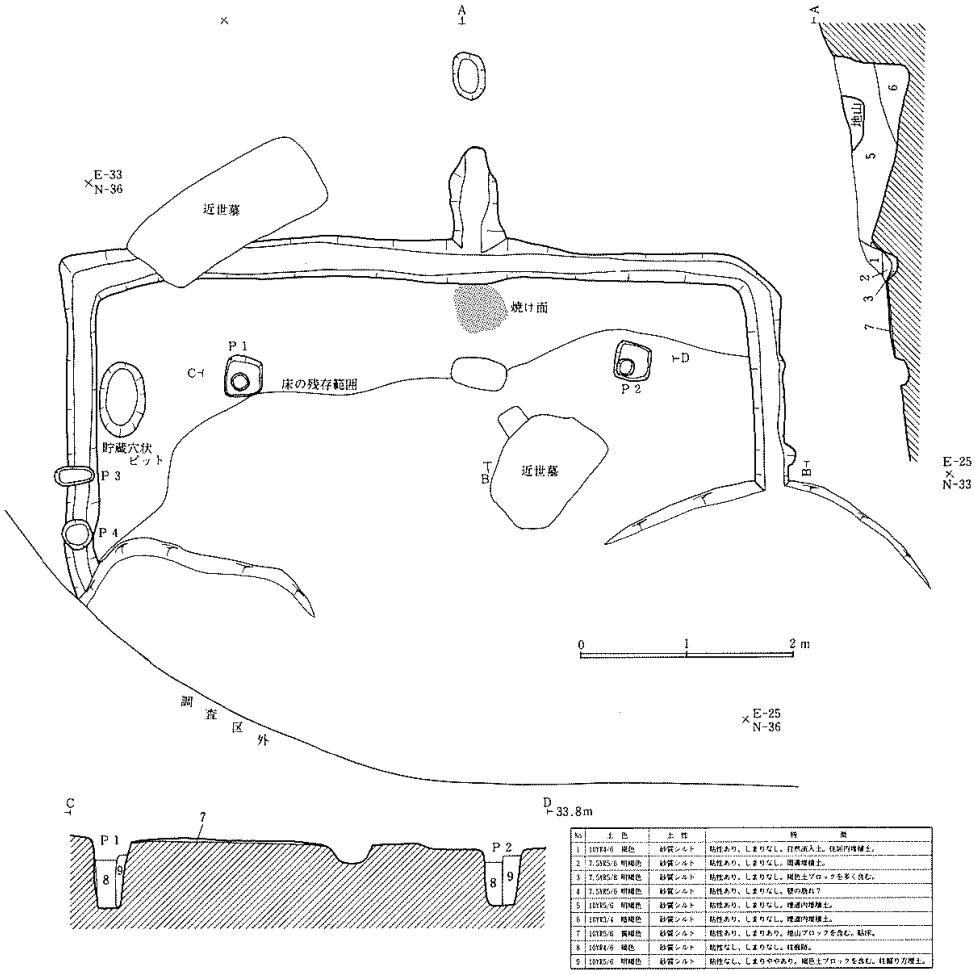
7は、その位置から壁柱穴と考えられる。

[炉]　削平を受けているため、石組部などは検出されず、住居のほぼ中央やや東寄りのところと、東寄りのところに焼け面が認められたのみである。

[貯蔵穴状ピット]　住居の北東に貯蔵穴と考えられる土壙が検出された。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸104ｃｍ、短軸80ｃｍ、深さが62ｃｍである。断面形は底面に向かって東壁がくびれ、くびれ部分から底面までは径が大きくなる形状を呈する。底面はほぼ平坦である。堆積土は4枚に分けられ、第1層は撹乱、第2～4層は自然堆積土で、いずれにも炭化物が含まれる。

堆積土から、縄文土器、石器が出土している。

[出土遺物]　住居は削平を受け堆積土は失われており、また、ピットからの遺物もなく、出土した遺物はすべて貯蔵穴出土のものである。大半が小片で摩滅も著しく、図示できたものは3点である。第5図1は小型の深鉢で、胴部に隆沈線による平行線文や渦巻文が施されている。2は深鉢の胴部破片で、隆沈線による曲流渦巻文が施されている。地文はＬ



No	土色	土性	特徴
1	10YR4/6 褐色	砂質シルト	粘性あり、しまりなし。自然流入土。住居内堆積土。
2	7.5YR5/6 明褐色	砂質シルト	粘性あり、しまりなし。周溝堆積土。
3	7.5YR5/6 明褐色	砂質シルト	粘性あり、しまりなし。褐色土ブロックを多く含む。
4	7.5YR5/6 明褐色	砂質シルト	粘性あり、しまりなし。壁の崩れ？
5	10YR5/4 明褐色	砂質シルト	粘性あり、しまりなし。煙道内堆積土。
6	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	粘性あり、しまりなし。煙道内堆積土。
7	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	粘性あり、しまりあり。地山ブロックを含む。貼床。
8	10YR4/6 褐色	砂質シルト	粘性なし、しまりなし。柱痕跡。
9	10YR5/6 明褐色	砂質シルト	粘性なし、しまりややあり。褐色土ブロックを含む。柱掘り方埋土。

第７図　２号住居跡

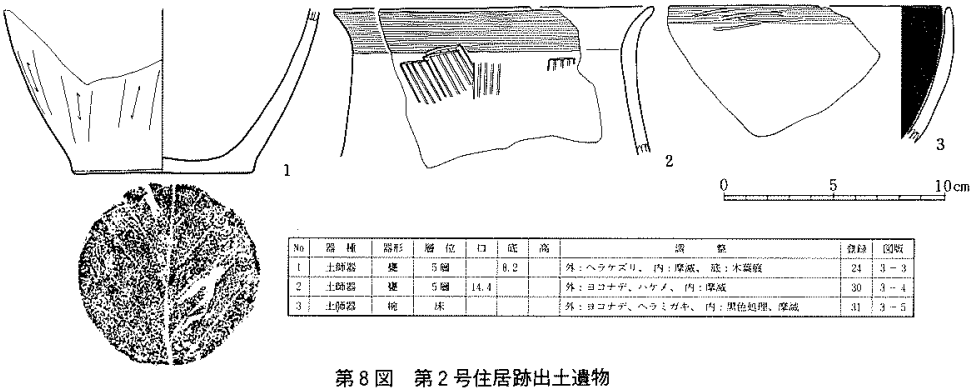
R縄文である。3 は深鉢または浅鉢の破片で渦巻文である。これらの土器はその文様の特徴から勝負沢遺跡第Ⅱ群土器と類似しており、大木 8b 式と考えられる。よって、この住居の時期もその頃と考えたい。

第２号住居跡（第６・７図）

[位置・確認面]　調査区北側斜面で検出した。確認面は地山である。

[平面形・規模]　北側は削平を受けており残っていないが、残存する部分から平面形は方形を基調とするものと考えられる。規模は、東西 6.5m、南北（残存）3.2mを計る。

[堆積土]　堆積土は７層に分けられ、第１層が住居堆積土である。第２・３層は周溝内堆積土、第４層は壁の崩れと考えられるもの、第５・６層は煙道内堆積土、第７層は貼床で



No	器種	器形	層位	口	底	高	調整	登録	図版
1	土師器	甕	5層		8.2		外：ヘラケズリ、内：摩滅、底：木葉痕	24	3－3
2	土師器	甕	5層	14.4			外：ヨコナデ、ハケメ、内：摩滅	30	3－4
3	土師器	椀	床				外：ヨコナデ、ヘラミガキ、内：黒色処理、摩滅	31	3－5

第8図　第2号住居跡出土遺物

ある。

[壁]　壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は最も残りのよいところで30ｃｍある。

[床面]　北西側が削平されており、住居床面の3分の2以上が失われている。残存部分にはすべて貼床が施されており、ほぼ平坦である。

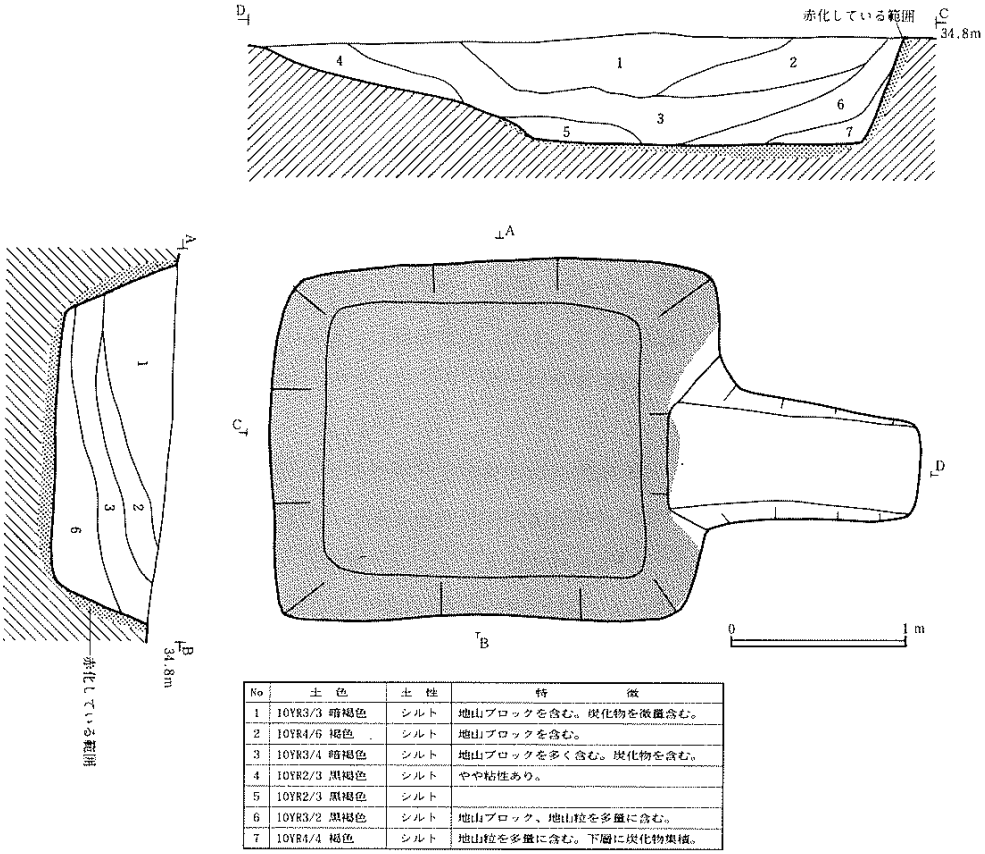
[柱穴]　住居内から5個のピットが検出され、規模や位置から、P1・P2が主柱穴と考えられる。ピットの平面形は方形で、深さは56ｃｍ～62ｃｍである。柱痕跡はいずれも径16ｃｍの円形を呈する。また、P3・P4はその位置から壁柱穴の可能性が考えられる。

[周溝]　壁に沿って周溝が認められた。幅は30～38ｃｍ、深さ8～10ｃｍで断面形はU字状を呈する。

[カマド]　住居の南壁中央やや西寄りで検出した。側壁は削平されて残っておらず、燃焼部と考えられる部分に50×50ｃｍほどの焼け面が認められた。煙道部は長さが約140ｃｍあり、先端に直径約40ｃｍの煙出しピットが掘られている。

[貯蔵穴状ピット]　住居南東隅で貯蔵穴状ピットを検出した。平面形は楕円形、規模は長軸72ｃｍ、短軸44ｃｍ、深さ9ｃｍである。堆積土は赤褐色砂質シルトで、地山の小ブロックを含んでいる。堆積土から土師器坏の小片が小量出土している。

[出土遺物]　住居内および煙道部堆積土から土師器椀・甕が出土しているが、ほとんどが小片で摩滅しており、図示できるものは少ない。第7図1は甕の底部破片で、木葉痕がみられるものである。2は甕口縁部破片で、口縁部は緩やかに外反する。口縁部はヨコナデ、体部にはハケメが施されている。内面の調整は摩滅しているため不明である。3 は椀の口縁部から体部破片で、口縁部はヨコナデ後ヘラミガキが施されているが、体部および内面は摩滅しており、調整は明らかでない。内面は黒色処理されている。



No	土　色	土　性	特　　徴
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山ブロックを含む。炭化物を微量含む。
2	10YR4/6 褐色	シルト	地山ブロックを含む。
3	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山ブロックを多く含む。炭化物を含む。
4	10YR2/3 黒褐色	シルト	やや粘性あり。
5	10YR2/3 黒褐色	シルト	
6	10YR3/2 黒褐色	シルト	地山ブロック、地山粒を多量に含む。
7	10YR4/4 褐色	シルト	地山粒を多量に含む。下層に炭化物集積。

第９図　焼土遺構

これら土器の年代についてだが、年代を決定付けるような資料が少なく詳細は不明だが、おおよそ古墳時代ないしは奈良時代に位置付けられるものと考えられる。

焼土遺構（第８図）

調査区のほぼ中央の地山面で検出された。平面形は長方形で東に凸字形の張り出し部を持ち、長軸 226ｃｍ（凸字部を含めた長軸長 368ｃｍ）、短軸長 200ｃｍ、確認面からの深さ 62ｃｍを計る。壁は直立気味に立ち上がるが、張り出し部は緩やかなスロープ状になって立ち上がる。底面は平らで、また、張り出し部以外の底面および壁が焼けて固くしまっている。堆積土には地山ブロック・地山粒の混入が多くみられ、人為的堆積土と考えられるものである。底面近くには炭化物が一面に集積しており、また、張り出し部近くの土壙底面から、焼けた貝殻が 20×20ｃｍほどのかたまりとなって出土した。

この遺構の性格についてだが、底面および壁面が焼けて硬化しており、炭化物が集積していることから、ここで火を燃やしたことが想定される。また、凸字型の張り出し部については、内容物の掻き出し口もしくは煙出しと考えられる。

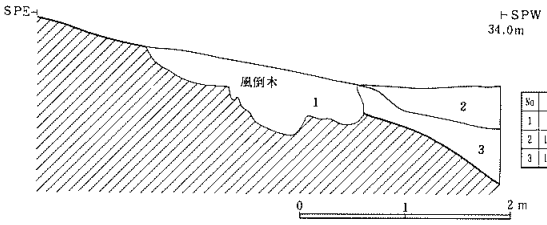
これと類似した遺構を検出している遺跡としては、群馬県藤岡市白石大御堂遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団：1991）がある。そこでは、堆積土中に人骨が含まれており、火葬跡であるとしている。しかし、本遺跡の焼土遺構については、壁が焼けていること、スロープ状の張り出し部があることなどの類似点が見出だせるものの、その規模が白石大御堂遺跡の火葬跡よりもかなり大きく、また、人骨と思われるものも出土していないことから、火葬跡であるという断定はできない。

また、焼けた貝殻が出土していることから、いわゆる貝灰を生産するための遺構の可能性も考えられる。しかし、貝灰生産遺構の考古学的調査例は少なく、その実態は不明な点が多い。塩竈市の新浜A遺跡では明治時代に貝灰を生産した窯跡が検出されている（宮城県教委：1986）が、壁に切石が積まれていることなど、本遺跡の焼土遺構とは異なる点が見受けられる。また、海辺から遠く離れた場所で貝灰を生産したということも考えにくく、貝灰生産遺構であるという断定もできない。

よって、この焼土遺構の性格については明らかにすることはできず、火葬跡もしくは貝灰生産遺構両者の可能性が考えられる、という程度に留めておきたい。

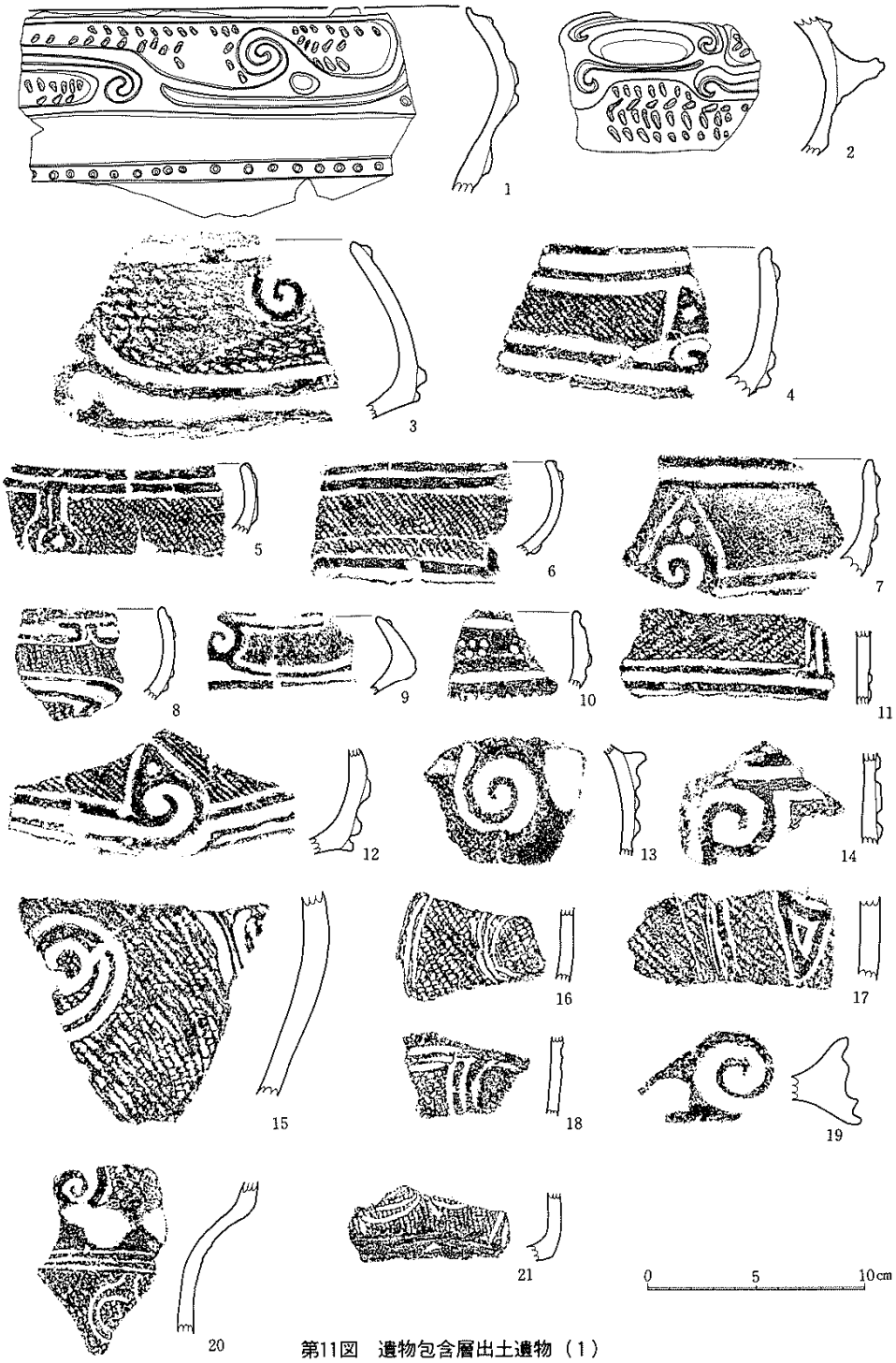
土壙

38 基検出した。平面形が長方形を呈するもの、小判形を呈するもの、不整形を呈するものがあり、規模も一辺が１m以下のものから 2m以上あるものまでさまざまみられた。それらの内の数基を断ち割った結果、どの形態の土壙からも寛永通宝、煙管、人骨などが出土した。今回の調査区は以前墓地であったところで、調査に入る前に除去した近世の墓石が調査区の周囲に見受けられた。そのため、これらの土壙については近世墓と判断し、そ

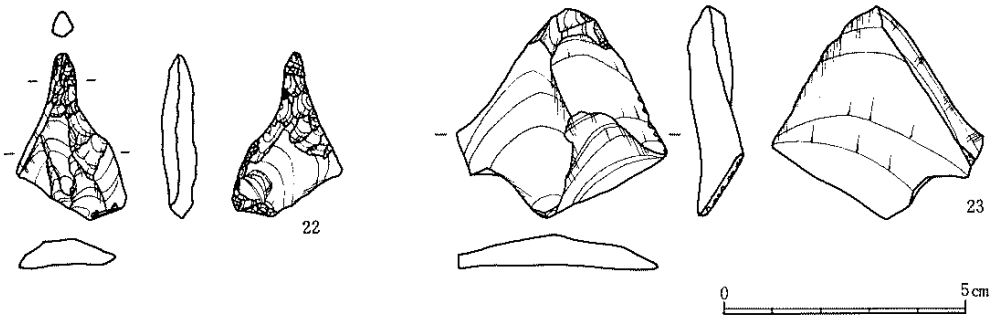


No	土色	土性	特徴
1			風倒木
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	やや粘性あり、しまりなし。
3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	やや粘性あり、しまりなし。

第10図　遺物包含層断面図



第11図　遺物包含層出土遺物（1）



No	器形	特　　徴	登録	図版
1	深鉢	口縁部：渦巻文（隆沈線）、矢羽状沈線文、頸部：無文	26	3 － 6
2	深鉢	口縁部：渦巻文（隆沈線）、矢羽状沈線文、１と同一個体	27	3 － 7
3	深鉢	口縁部：渦巻文（隆沈線）、押圧縄文（LR）充塡	25	3 － 9
4	深鉢	口縁部：渦巻文（隆沈線）、縄文（RL）	7	4 － 7
5	深鉢	口縁部：渦巻文（隆線）、　縄文（RL）	16	4 －12
6	深鉢	口縁部：渦巻文（隆線）、　縄文（RL）、５と同一個体	22	3 － 8
7	深鉢	口縁部：渦巻文（隆沈線）、４と同一個体	10	4 － 3
8	深鉢	口縁部：曲折文（隆沈線）、縄文（RL）	21	4 － 6
9	深鉢	口縁部：渦巻文（隆沈線）、不明縄文	19	3 －11
10	深鉢	口縁部：平行線文（隆沈線）、刺突文	17	4 － 5
11	深鉢	口縁部：平行線文（隆沈線）、縄文（LR）	8	4 － 2
12	深鉢	口縁部：渦巻文（隆沈線）、　縄文（RL）、５・６と同一個体	4	4 －13
13	深鉢	口縁部？：渦巻文（隆沈線）	13	4 －10
14	深鉢	胴部：渦巻文（隆沈線）	20	3 －10
15	深鉢	胴部：渦巻文（沈線）、縄文（LR）	23	4 － 1
16	深鉢	胴部：渦巻文（沈線）、縄文（LR）	5	4 － 9
17	深鉢	胴部：渦巻文（隆沈線）、縄文（LR）	9	4 － 4
18	深鉢	胴部：渦巻文（沈線）、縄文（LR）、沈線間研磨	14	4 －11
19	深鉢	口縁部：渦巻文（隆沈線）	6	
20	深鉢？	胴部：渦巻文（沈線）、不明縄文	15	4 － 8
21	深鉢	底部：渦巻文（沈線）、縄文（LR）	12	4 －12
22	石錘	頁岩製	28	4 －14
23	剥片	頁岩製、微細剥離痕のある剥片	29	4 －15

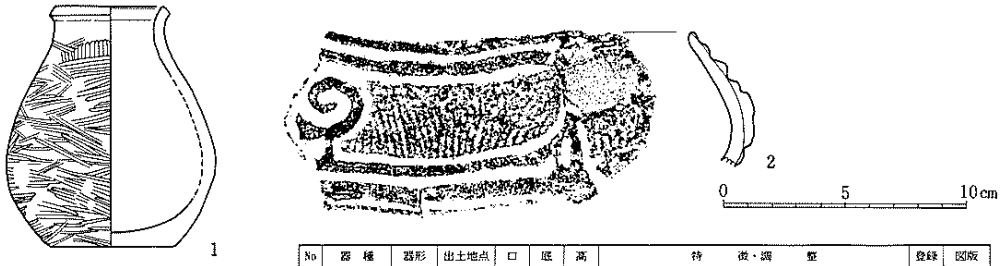
第12図　遺物包含層出土遺物（２）

れ以上の掘り下げは行なわず、平面での確認のみにとどめた。

遺物包含層出土遺物（第 9～11 図）

調査区の北側斜面において発見された。出土した遺物は摩滅が著しくほとんどが小片で、図示できるものは少ない。以下、図示した遺物についてその特徴を簡単に述べる。

第 10 図 1～13 は深鉢の口縁部破片である。いずれにも調整の加えられた隆沈文あるいは隆線文による渦巻文・平行線文が施され、頸部が残るものについては、頸部は無文となっている。なお、1・2 は同一個体と考えられ、隆沈線による渦巻文を施し、矢羽状沈線文を充塡している。14～18・20 は深鉢の胴部破片である。同じく沈線、隆沈線による渦巻文が施されている。21 は深鉢の底部破片で沈線による渦巻文を施している。22 は石錘、23 は微細剥離痕のある剥片で石材は両者とも頁岩である。



No	器種	器形	出土地点	口	底	高	特徴・調整	登録	図版
1	土師質土器	壷	P10	4.4	5.1	9.9	外：ヘラミガキ、ヨコナデ、内：不明、底：回転糸切り	22	4－16
2	縄文土器	深鉢	P5				口縁部：渦巻文（隆沈線）、縄文（LR）	2	4－17

第13図　その他の遺構出土遺物

これら文様を持つ土器についてその特徴をみると、大きな年代の隔たりはなく、勝負沢遺跡や中ノ内Ｂ遺跡に類例が見られるような大木 8ｂ式に位置付けられるものと考えられる。地文のみのものや石器については不明であるが、出土遺物全体のあり方からみて上記の年代におさまるものと考えられよう。

その他の遺構と出土遺物（第 12 図）

調査区北側斜面で検出されたＰ10 の堆積土から土師質土器壷が一個体出土した（第 12 図 1）。この土器の年代については、ロクロが使用されていることから平安時代以降のものであると考えられるが、他に類例を見出だすことができず詳細は不明である。

その他、Ｐ5 から大木 8ｂ式の口縁部破片が出土している（第 12 図 2）。

Ⅴ　まとめ

① 調査の結果、縄文中期の竪穴住居跡 1 軒、古墳時代もしくは奈良時代の竪穴住居跡 1 軒、1 基、近世墓 38 基、焼土遺構、遺物包含層などが検出された。

② 出土遺物には、縄文土器、土師器、石器などがある。遺物包含層から出土した縄文土器については縄文時代中期ごろのものと考えられる。

③ 今回の調査では、中世の遺構・遺物ともに検出されていないことから、1989・1990 年度に調査された中世の遺構は今回の調査部分にまでは及んでいないことが明らかとなった。

引用・参考文献

阿部・遊佐（1978）：「長者原貝塚」南方町文化財調査報告書第1集

阿部恵（1982）：「亘理城跡」亘理町文化財調査報告書第3集

伊藤・須田（1987）：「中ノ内Ｂ遺跡」東北横断自動車道関係遺跡発掘調査報告書第2冊

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14輯　東北史学会

丹羽・阿部・小野寺（1982）：「勝負沢遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ

丹羽茂（1981）：「大木式土器」『縄文文化の研究』Ⅱ　雄山閣

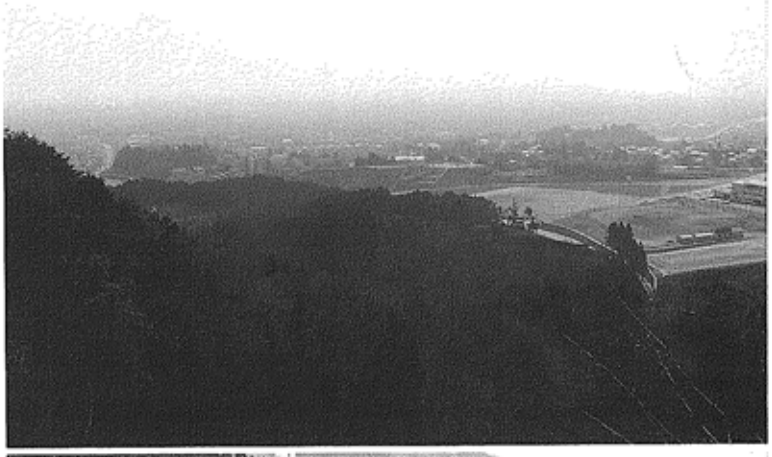
丹羽茂（1983）：「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集

宮城県教育委員会（1986）：「塩釜市新浜遺跡」宮城県文化財調査報告書第113集

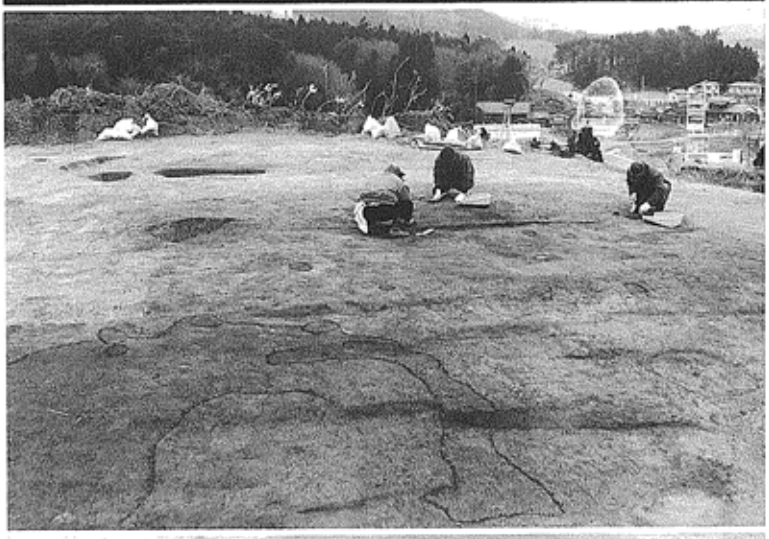
群馬県埋蔵文化財調査事業団（1991）：「白石大御堂遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第122集

写　真　図　版

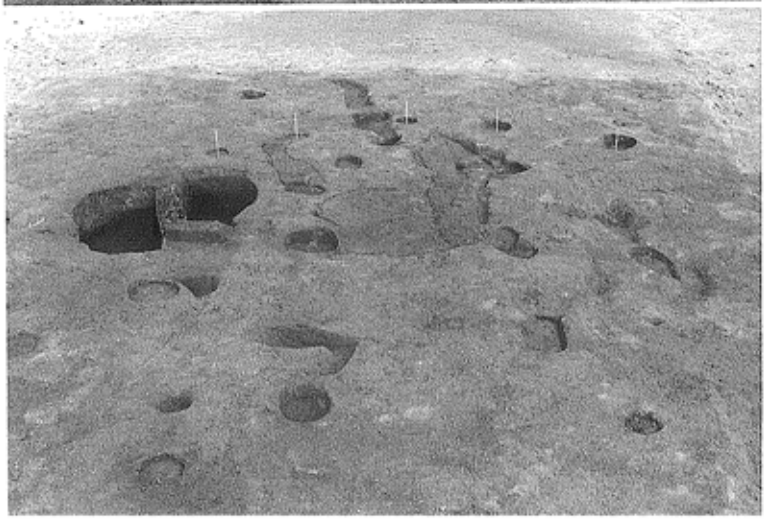
遺跡遠景（西から）



調査風景

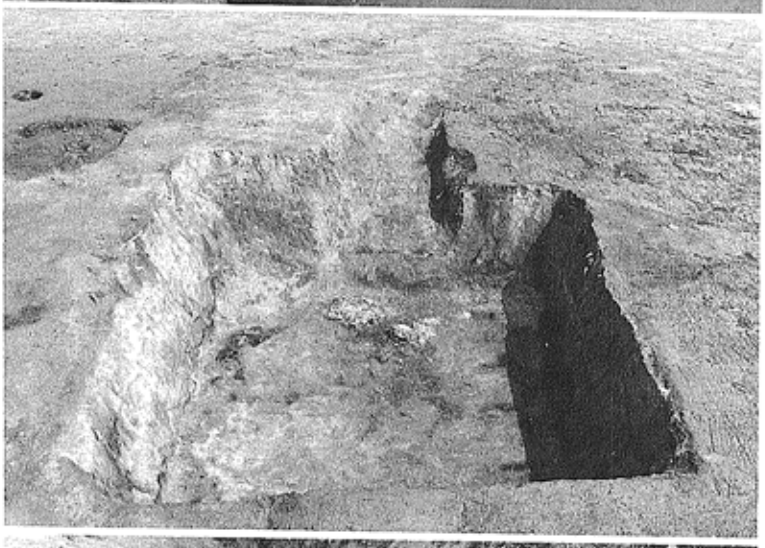


第１号住居跡



写真図版１

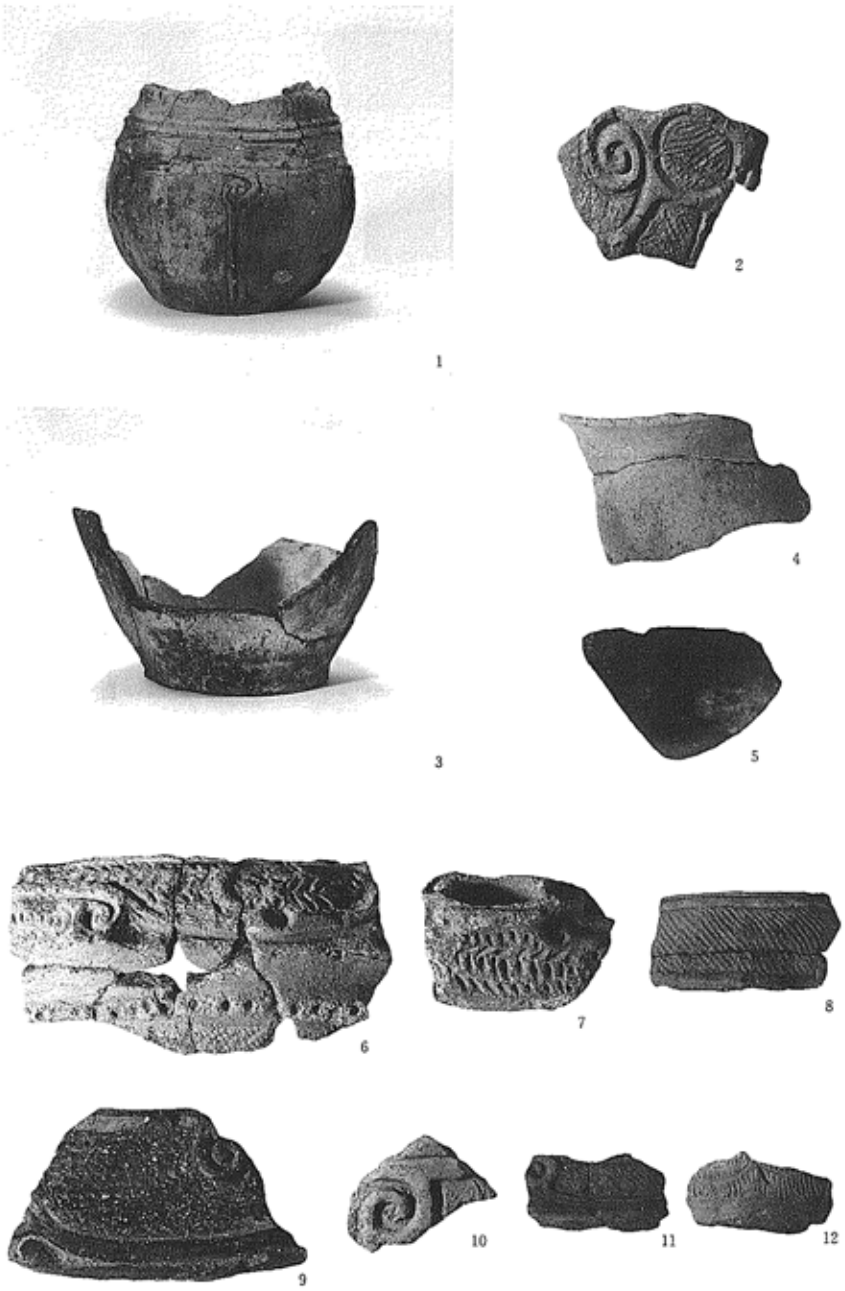
第２号住居跡



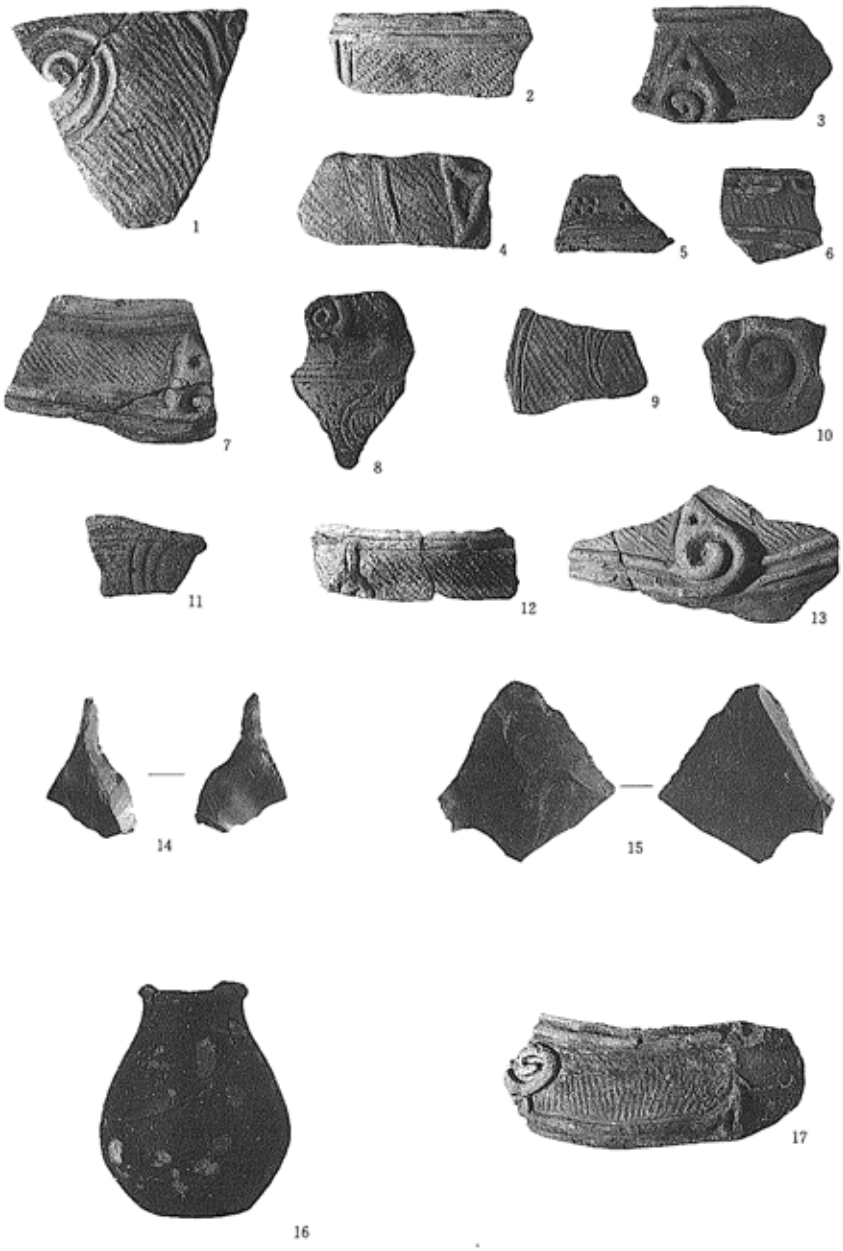
焼土遺構

遺物包含層セクション

写真図版２



写真図版３　第１・第２号住居跡、遺物包含層出土遺物



写真図版 4　遺物包含層、その他の遺構出土遺物

安養寺中窯跡群

安養寺囲窯跡群

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 49
Ⅱ　調査方法と経過 …… 50
Ⅲ　調査の結果 …… 52

調 査 要 項

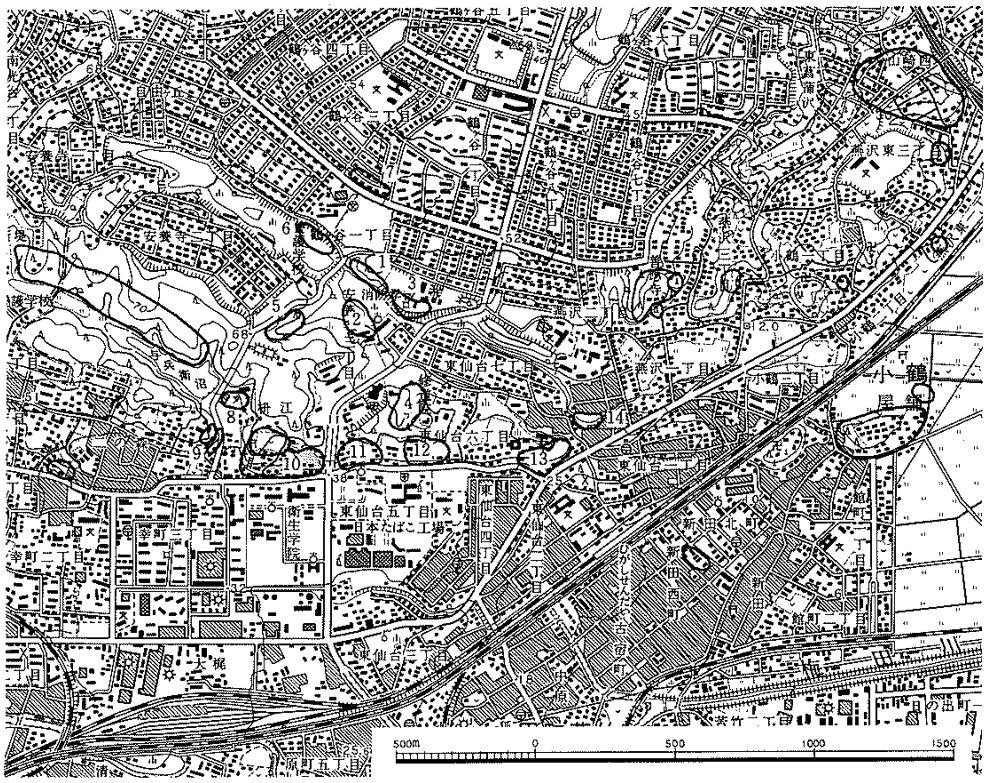
遺 跡 名：安養寺中窯跡群（あんようじ　なか　かまあとぐん）
　　安養寺囲窯跡群（あんようじ　がこい　かまあとぐん）
所 在 地：宮城県仙台市青葉区安養寺三丁目
調査原因：県有地内の遺跡の範囲確認調査
調査期間：1992 年 9 月 7 日～9 月 16 日
調査面積：①安養寺中囲 18,000 ㎡＋②安養寺囲 4,600 ㎡＝22,600 ㎡
発掘面積：①安養寺中囲 1,280 ㎡＋②安養寺囲　160 ㎡＝ 1,440 ㎡
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
　　調査第二係　係　　長　加藤　道男
　　技術主査　斎藤　吉弘
　　〃　　古川　一明

安養寺中窯跡群
安養寺囲窯跡群

Ⅰ　遺跡の位置と環境

安養寺中窯跡群、安養寺囲窯跡群は仙台市北東部の青葉区安養寺三丁目に所在し、東北本線東仙台駅の西約１ｋｍ、陸奥国府多賀城跡の南西約４ｋｍ、陸奥国分僧尼寺の北約２ｋｍに位置する。

窯跡群の所在する仙台市北東部の通称台ノ原丘陵、小田原丘陵は、広瀬川北岸に発達した四面の河岸段丘（台の原・上町・中町・下町）のうちの最高位の標高 50～100mの「台ノ原段丘」に相当するものである。その上面は七北田川・広瀬川支流の小河川によって複雑に開析され起伏に富み、両窯跡群の所在する安養寺地区は台ノ原丘陵の南東端部の燕沢から西北西方向へ入り込む沢の奥部に位置している。



第１図　周辺の遺跡

遺跡の所在する台の原・小田原丘陵周辺には古墳時代から奈良・平安時代にいたる各時代の窯跡が多数立地している。これらの窯跡群については昭和十年代に内藤政恒によって紹介され、大規模な窯跡群として広く知られるようになった。その後、東北学院大学考古学研究部・古窯跡研究会などによって窯跡の詳しい分布状況や内容を把握するための調査が継続的になされている。

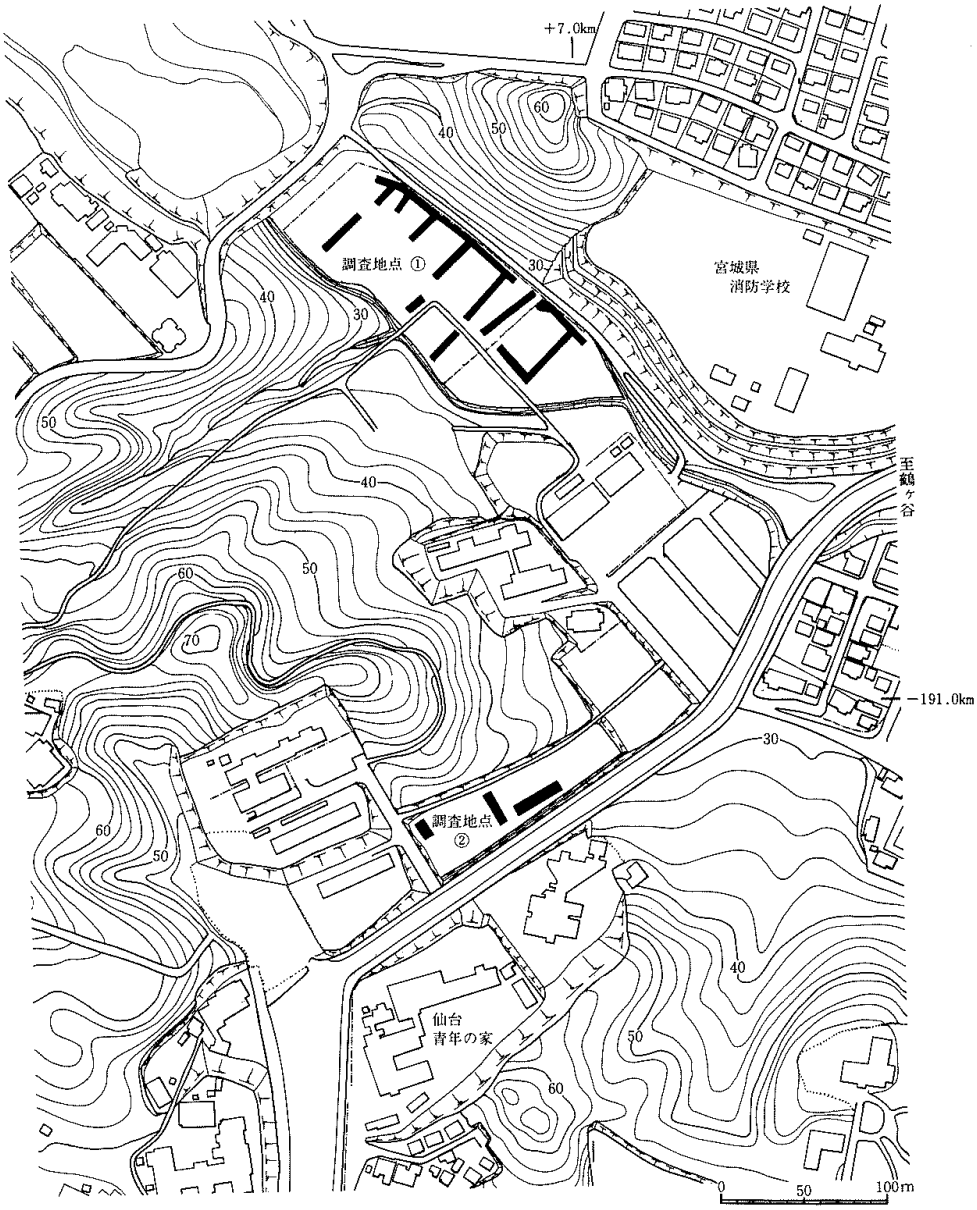
「台ノ原・小田原瓦窯址群」は台ノ原丘陵南部の東西 5ｋｍにもおよぶ広大な地域に分布している。その中でも東部に位置する安養寺地区周辺は窯跡群の分布がもっとも濃密に確認されている地域である。まず、南東端部の燕沢から西北西方向へ入り込む沢の入口の南北には古墳時代の窯跡が発見されたことで著名な大蓮寺窯跡群（13）と燕沢公園窯跡群（14）が立地している。また、この沢の奥に位置する安養寺地内では、沢をはさんで両側の斜面に向かい合うようにして窯跡群が確認されている。北側斜面には、三高西側斜面窯跡群（6）・鶴ケ谷窯跡群（7）・安養寺中囲瓦窯跡群（1）・安養寺下囲瓦窯跡群（3）、南側斜面には、安養寺配水場前窯跡群（5）・安養寺囲窯跡群（2）・安養寺下窯跡群（4）がそれぞれ隣接して立地している。また、安養寺地区の沢の南側に並行して西北西に延びる沢がある。この沢に面する斜面にも与兵衛沼窯跡群・枡江遺跡（8）・二ノ森窯跡群（9）が分布している。さらにその南側の「台ノ原段丘」の段丘涯である南斜面には庚申前・神明社（蟹沢中）（10）・小田原前田（11）・土手前（12）などの各窯跡群が並んで立地している。

Ⅱ　調査方法と経過

安養寺地区周辺の仙台市東部の丘陵地は宅地開発により地形の変更が著しい。前記の窯跡群の多くも破壊が進み所在すら確認できないものもあるが、安養寺地区の県有地内に所在する安養寺中囲・安養寺囲の両窯跡群周辺の地形は比較的良好に保存されている。今回の調査は両窯跡を中心とした県有地内の遺跡の範囲を確認する目的で行ったものである。

今回の調査箇所は、安養寺中囲窯跡群の分布する丘陵南西麓の低地（地点①）と、安養寺囲窯跡群の分布する丘陵南麓の低地（地点②）である。両地点の現況は、地点①が旧農業試験場の果樹試験林跡地で現在は荒れ地となっている。地点②は市道小田原・鶴ケ谷線の道路沿いの空き地である。

調査は各対象地に任意のトレンチを設定し掘り下げた。調査区の位置については縮尺 1/200 の平面図を作成し、とくに地点①の調査区では安養寺中囲瓦窯跡群との位置関係を確認できる現況図を作成した。調査状況の写真はモノクロ 35mmフィルムで撮影した。



第２図　調査区位置図

III　調査の結果

1、地点①

安養寺中囲窯跡群の立地する斜面の南西裾部の低地で、燕沢から西北西方向へ入り込む大きな沢の低地部にあたる。この地域は農業試験場の果樹試験林跡地で、平坦な圃場造成工事がなされている場所である。

この低地に沢の方向に直交もしくは平行する任意のトレンチを設定し掘り下げた。その結果、各所で複雑に重なり合った古い河道が検出され、遺構・遺物は発見されなかった。ただし、北東部のトレンチでは造成工事の際に削平されたとみられる凝灰岩の岩盤が確認された。これは安養寺中囲窯跡群の立地する丘陵斜面の末端部とみられ、その裾部の旧表土中からは古代の瓦の破片が少量出土した。

瓦が出土した調査区の東5mには、遊歩道沿いの崖面に窯跡の断面が4基露出している。出土した瓦はこれらの窯跡やその灰原の遺物が下方に流れ落ちたものの一部と考えられる。

発見された瓦は平瓦・丸瓦の破片で、端部や側辺部の破片が数点みられるが大きさを復元できるものはない。平瓦はいずれも凸面につぶれた縄叩き目、凹面に布圧痕の残るもので、丸瓦は玉縁部が確認できるものがある。これらの瓦はその特徴から安養寺中囲窯跡群の調査で発見されている瓦群（1966：東北学院大学考古学研究部）と同様のもので、多賀城Ⅲ期もしくはⅣ期に属する遺物と考えられる。

これらのことから、調査対象となった地点①の沢の低地部は古代以来一貫して河川の流路であったと考えられ、遺構が存在する可能性は低い。ただし、その縁辺部には斜面に立地する窯跡群の一部が近接しており、遺構の一部やそれらから流出した遺物が出土する可能性はあろう。

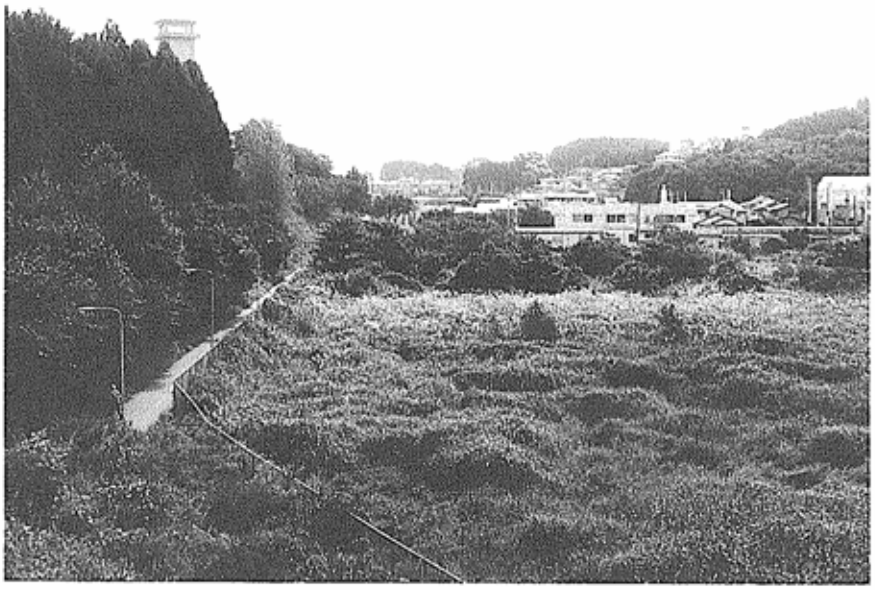
2、地点②

安養寺囲窯跡群の立地する斜面の南の低地である。地点①の沢に西側から合流する支流の沢の北岸の低地部にあたる。この沢の北側には安養寺囲窯跡群、南側には安養寺下窯跡群が立地している。調査地点は市道小田原・鶴ケ谷線の道路沿いの空き地で、厚い盛り土がなされ平坦地が造成されている。

対象地に任意のトレンチを設定し掘り下げた結果、厚い盛り土の下は凝灰岩の岩盤まで削平され旧表土は残っておらず、遺構・遺物は発見されなかった。安養寺囲窯跡群の主体はより北側に展開しているものと考えられる。

G.N.
トレンチ内スクリーンは凝灰岩部分
50
40
30
安養寺中所窯跡群
宮城県消防学校
0
50m
−190.8km
窯の断面
瓦片出土
範囲
30
保健衛生所
仙台家畜
+7.0km

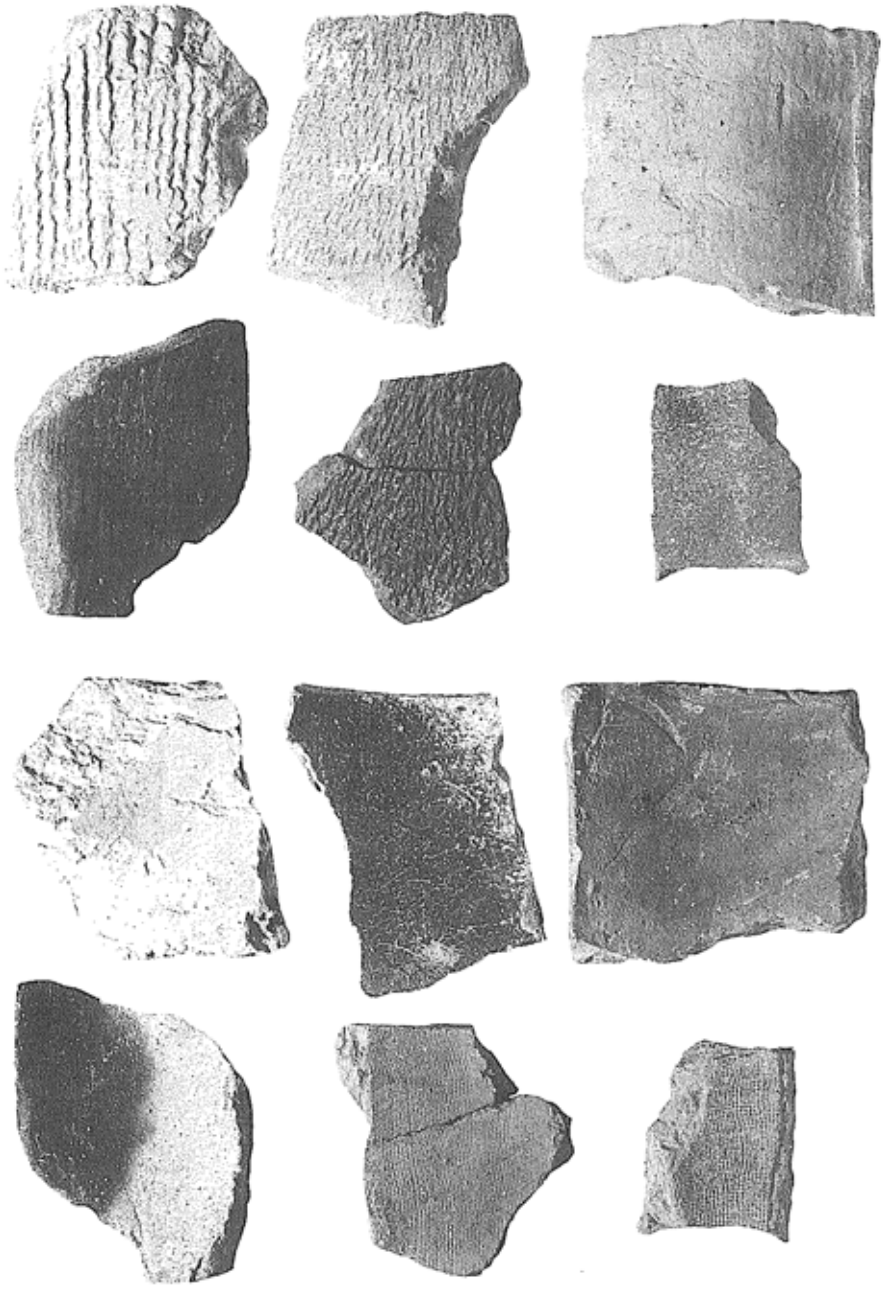
第3図　調査地点 ①



調査地点①（北西より）

調査地点②（南より）

写真図版 1



写真図版２　出土遺物　瓦凸面・凹面

丹 波 谷 地 遺 跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置 …… 59
Ⅱ　調査の方法と経過 …… 60
Ⅲ　層序 …… 60
Ⅳ　発見された遺構と遺物 …… 60
Ⅴ　まとめ …… 64

調 査 要 項

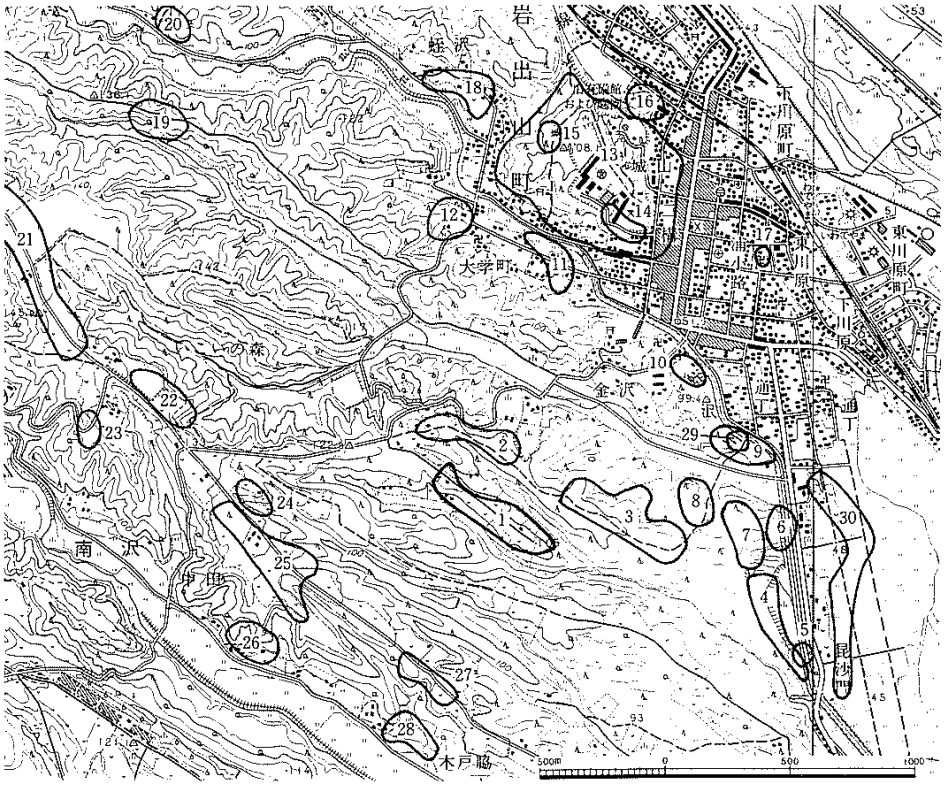
遺 跡 名：丹波谷地遺跡（たんばやちいせき）
遺跡記号：ＯＲ　宮城県遺跡地名表記載番号 35005
遺跡所在地：宮城県玉造郡岩出山町字轟地内
調査原因：町道改修工事
調査面積：約 1130 ㎡
調査期間：確認調査　1991 年 11 月 5 日～8 日、11 日
　　事前調査　1992 年 11 月 16 日～12 月 3 日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
　　確認調査　阿部博志　須田良平　天野順陽　大和幸生
　　事前調査　加藤道男　佐久間光平　佐藤憲幸
調査協力：岩出山町教育委員会　古川農林事務所　宮城県農業公社

丹波谷地遺跡

Ⅰ　遺跡の位置

丹波谷地遺跡は、玉造郡岩出山町字轟地内に所在し、岩出山町の中心部からは南西約1.3ｋｍの所に位置する（図1）。

岩出山町は、宮城県の北西部にあり、山形県との県境を南北に走る奥羽山脈の東に展開



番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	丹波谷地遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、弥生、古代	16	旧有備館及庭園	段丘	学問所・庭園	近世
2	上の深遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、縄文、弥生、古代	17	来迎寺板碑	段丘	板碑	鎌倉
3	岡金沢遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、縄文、弥生、古墳、平安	18	ひる沢遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
4	岩の上遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、弥生、古墳、平安	19	東昌寺沢遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
5	岩ノ上横穴古墳	丘陵斜面	横穴古墳	古墳	20	下東昌寺遺跡	丘陵	包含地	縄文
6	天神館跡	丘陵	包含地・城跡	縄文、中世	21	木通沢遺跡	丘陵頂部	包含地	旧石器、縄文、弥生、古代
7	天神山遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、平安	22	木通沢B遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、弥生
8	ヘッピリ坂遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、弥生、古墳、平安	23	中田裏遺跡	丘陵	包含地	旧石器
9	神明社遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文後・晩、弥生、平安	24	合戦原窯跡	丘陵斜面	瓦窯跡	奈良、平安
10	伊達家霊廟	丘陵斜面	霊廟	近世	25	合戦原遺跡	丘陵頂部	包含地・窯跡	縄文、弥生、古墳
11	大学町遺跡	丘陵斜面	包含地	古代	26	中田遺跡	丘陵	包含地	縄文、古代
12	満願寺跡	丘陵中腹	社寺跡	平安～江戸	27	木戸脇裏C遺跡	丘陵頂部	包含地	縄文、弥生、古代
13	岩出山城跡	丘陵	城館・包含地	縄文、近世	28	木戸脇裏B遺跡	丘陵	包含地	古代
14	城山A遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、縄文	29	神明社跡	丘陵端	社寺跡	平安～江戸
15	城山B遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器	30	一ノ構遺跡	沖積平野	城の外郭	室町～江戸

第１図　遺跡の位置

する陸前丘陵の末端部に位置している。町の中央部を流れる江合川を中心として、小河川が西北から東南に向かって並行して流れており、遺跡はこれらの河川によって開析された丘陵の尾根上（標高約 105m）から斜面にかけて広がっている。現状は畑や杉林となっており、縄文土器（早期・前期・晩期）、弥生土器、土師器・須恵器などが採集できる。この遺跡と小さな沢をへだてた北東側の丘陵上には、縄文時代から弥生・古代の複合遺跡である「向金沢遺跡」や「上の窪遺跡」がある。

Ⅱ　調査の方法と経過

丹波谷地遺跡のある轟地内のやせ尾根上を北西から南東へはしる道路（砂利道）の拡幅と舗装工事計画がもち上がったため、1991 年度にまず確認調査を行った。迂回路がないため現道区域は調査対象からはずし、拡幅部分の調査可能な区域に 19 本のトレンチを設定した。この確認調査時の面積は約 400 ㎡である。この調査の結果、底面に杭痕の残るいわゆる「Ｔピット」が 1 基発見された。遺物は出土しなかった。

この調査結果を受けて、1992 年度の事前調査では現道の部分に 3m幅で 4 箇所（北西側からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区）の調査区を設定した（図 2）。調査区のそれぞれの長さは、Ａ区：30m、Ｂ区：53m、Ｃ区：93m、Ｄ区：67m、調査面積は約 730 ㎡である。この現道路区域の調査では、土壙 2 基（Ｔピット）、溝跡 1 条が発見され、若干数の遺物（旧石器？、縄文土器、土師器・須恵器片）が出土した。Ｄ区の一部区域においてはさらにローム層の掘り下げを行ったが、新たな旧石器の発見には至らなかった。

なお、検出された遺構については、道路の測量杭を基準に平板測量による平面図および断面図を作成し、写真記録は、35mmカラー・リバーサル写真、6×7 白黒およびカラー写真によって行った。

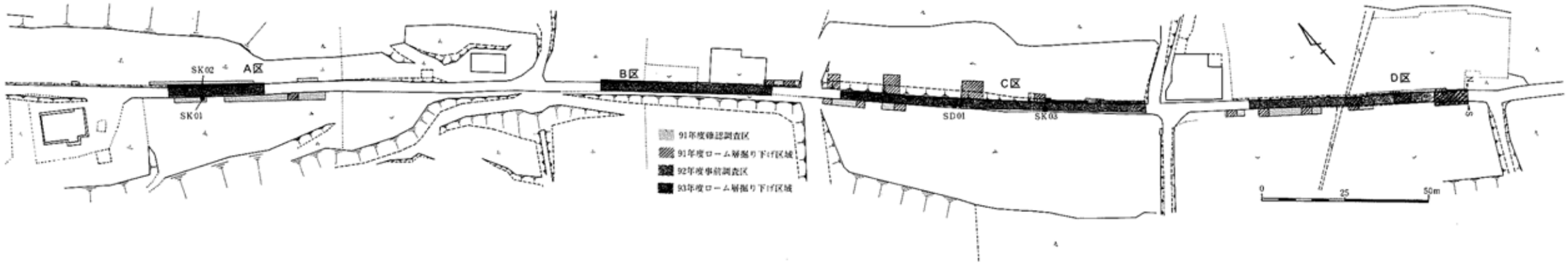
Ⅲ　層序

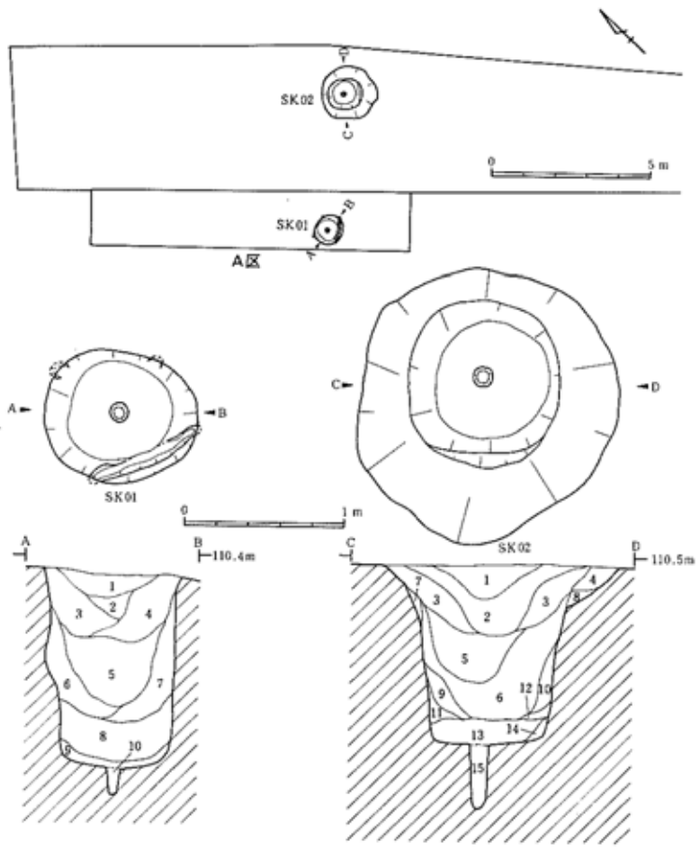
基本層序は図 2 に示した。1ａ層；現表土、1ｂ層；いわゆるクロボク土、2 層；褐色の漸移層、3 層；肘折軽石（火山砂）層、4・5 層；黄褐色ローム層、6 層；軽石や岩片を多く含む明褐色砂質シルト層（火砕流堆積物か？）である。これ以下が柳沢火砕流（東北歴史資料館 1985）となる。

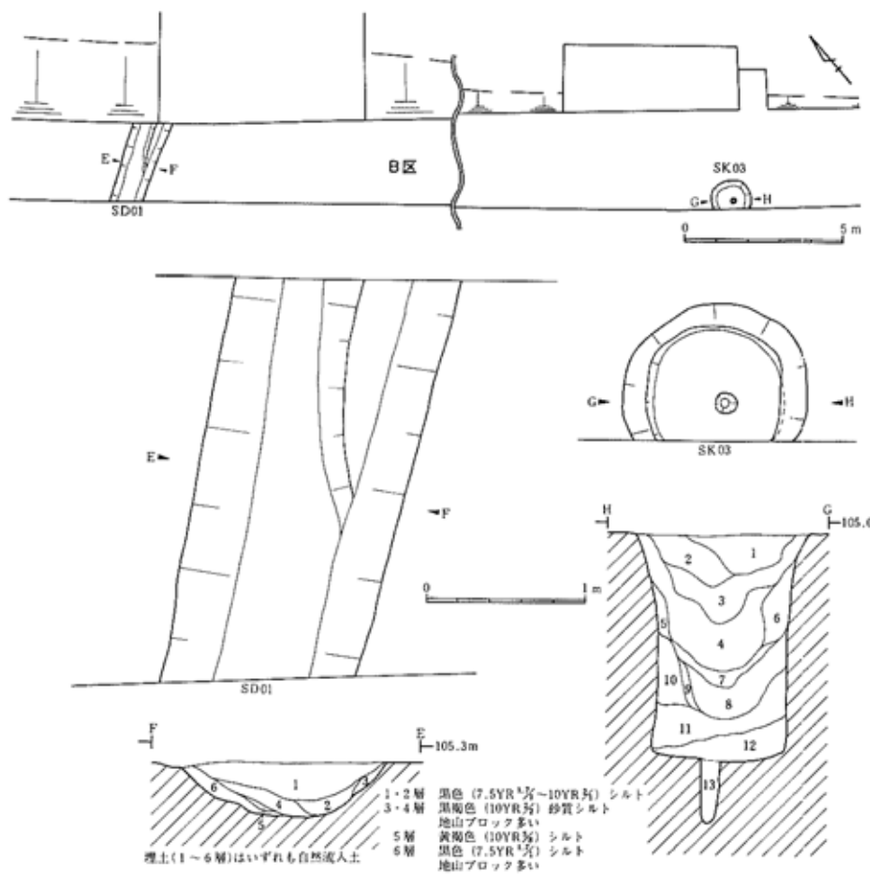
Ⅳ　発見された遺構と遺物

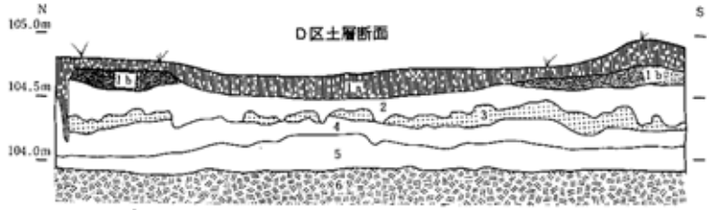
1. 遺構

Ａ区で土壙 2 基、Ｃ区で土壙 1 墓・溝 1 条が発見された（図 2）。土壙は 3 基ともＴピ









層序	土色	土性	備考
1a			表土。道路の砂利および植物の根が多い黒褐色土。
1b	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	均質なクロボク層。やや砂質。炭化物若干含む。
2	褐色 (10YR4/4)～暗褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	軽石火山砂を多く含む。炭化物若干含む。
3	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	軽石軽石・火山砂層。
4	黄褐色 (10YR5/8)	粘質シルト	ソフト・ローム。凝灰岩小礫若干含む。
5	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	ハード・ローム。4層に比べ白っぽく、凝灰岩多い。
6	暗褐色 (7.5YR5/6)	砂質シルト	火砂流か？ 軽石・スコリア・岩片多い。

層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	黒色 (10YR2/1)	シルト	自然堆積、地山粒少量	6	褐色 (10YR4/6)	シルト質粘土	自然堆積、壁の崩落土
2	黒色 (10YR1.7/1)	シルト	自然堆積、地山粒少量	7	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	自然堆積、壁の崩落土
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	自然堆積、地山粒やや多い	8	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	自然堆積、地山粒多い
4	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	自然堆積、地山粒多い	9	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	自然堆積、地山粒多い
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	自然堆積、地山粒少量	10	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	板碧、黒土・地山少量

層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	黒色(7.5YR1.7/1)	シルト	自然堆積、地山粒少量	9	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	自然堆積、4層に類似
2	黒色 (7.5YR2/1)	砂質シルト	自然堆積、地山粒少量	10	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	自然堆積、4層に類似
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	自然堆積、地山粒少量	11	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	自然堆積
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	自然堆積、地山粒少量	12	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	自然堆積、4層に類似
5	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	自然堆積、4層よりやや若干	13	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	自然堆積、地山粒・砂粒少量
6	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	自然堆積、砂粒多い	14	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	自然堆積、地山粒・砂粒少量
7	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	自然堆積、壁の崩落土	15	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	炭化物少量
8	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	自然堆積、壁の崩落土				

層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	黒色(7.5YR1.7/1)	シルト	自然堆積、砂粒少量	8	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	自然堆積、粘性ややあり
2	黒色 (7.5YR2/1)	シルト	自然堆積、砂粒少量	9	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	自然堆積
3	黒色 (7.5YR2/1)	シルト	自然堆積、黒味強い	10	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	自然堆積、8層に類似
4	黒色(7.5YR1.7/1)	シルト	自然堆積、1層に類似	11	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	自然堆積
5	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	自然堆積、地山粒少量	12	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	自然堆積、しまりあり
6	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	自然堆積、地山粒少量	13	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	自然堆積、しまりなし
7	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	自然堆積、地山粒少量				

第２図　調査区と検出遺構

ットと称される形態のものである。

[土壙]

ＳＫ01：Ａ区検出。開口部直径 90ｃｍ、底径 70ｃｍ、深さ 120ｃｍの円形の土壙で、底部中央に杭痕と見られる小ピット（径 10ｃｍ、深さ 15ｃｍ）が 1 個ある。土壙の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、壁ぎわに杭痕のような 2 つの小ピットと板状のものをはめ込んだような痕跡が確認された。埋土は黒褐色～暗褐色シルトの自然堆積層である。遺物の出土はない。

ＳＫ02：Ａ区検出。ＳＫ01 から北側へ約 3m離れた位置にある。開口部直径 150ｃｍ、底径 70ｃｍ、深さ 120ｃｍの円形の土壙である。壁はほぼ垂直に立ち上がり開口部で外側へ開く形態であるがこれは上部の壁が崩落したためであろう。やはり、底部中央に小ピット（径 10ｃｍ、深さ 40ｃｍ）が 1 個ある。埋土は上部が黒色～黒褐色のシルト・砂質シルト、下部が暗褐色～黄褐色のシルト・砂質シルトの自然堆積層である。遺物の出土はない。

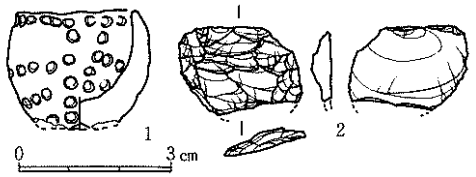
ＳＫ03：Ｃ区検出。ＳＫ01・02 からは東へ約 250m離れて位置する。開口部直径 120ｃｍ、底径 70ｃｍ、深さは約 140ｃｍで前二者に較べやや深い。底部中央に小ピット（径 15ｃｍ、深さ 40ｃｍ）を 1 個持つ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は自然堆積で黒褐色～褐色のシルト・砂質シルトが主体である。遺物の出土はない。

[溝跡]

ＳＤ01：Ｃ区検出。幅 120ｃｍ、深さ 35ｃｍ。埋土は自然堆積とみられる均質な黒褐色シルト主体で、砂層などの水成堆積は認められない。遺物はなく、時期・性格とも不明である。

2. 遺物

Ｄ区の 1 層・2 層（表土～漸移層）から縄文土器、土師器・須恵器の小片が数点とミニチュア土器 1 点、4 層（黄褐色ローム層）？から剥片が 1 点出土した。図 3－1 は竹管による刺突文をめぐらしたミニチュアの鉢形土器である。底部を若干欠損しており、底部中央には細い溝状のくぼみがある。時期は縄文後期であろう。2 は頁岩製の剥片（ポイント・フレーク）である。3 層（軽石層）～4 層（ローム層）の掘り下げ途中に出土したが、出土位置が不明確になった。しかし、剥片には黄褐色ロームが付着しており旧石器の可能性が高い。



No.	種　類	出土区・層	備　考
1	ミニチュア土器	Ｄ区　2層	口径2.3cm、器高2.3cm、器厚0.2～0.5cm
2	剥　片	Ｄ区　4層？	頁岩製。長さ(1.6cm)、幅2.3cm、厚さ0.3cm

第 3 図　出土遺物

Ⅴ　まとめ

(1)土壙３基、溝１条が発見された。土壙はいずれも底部に小ピットを一個もつ円形のもので、縄文時代の「Ｔピット」と考えられる。これらと同種の土壙はさらに尾根上を横断するように分布するものと推定される。なお、尾根のより先端に近いＤ区周辺の畑地には縄文土器が散在する。

(2)遺物はミニチュアの鉢形土器１点と旧石器の可能性が高い剥片１点、他に縄文・土師器の小片数点が出土した。

引用・参考文献

石岡憲雄 1991「「Ｔピット」について（再論）」『埼玉考古学論集』pp.479～508

今林啓爾 1983「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究』2　pp.148～160

興野義一・遠藤智一 1970「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史』下

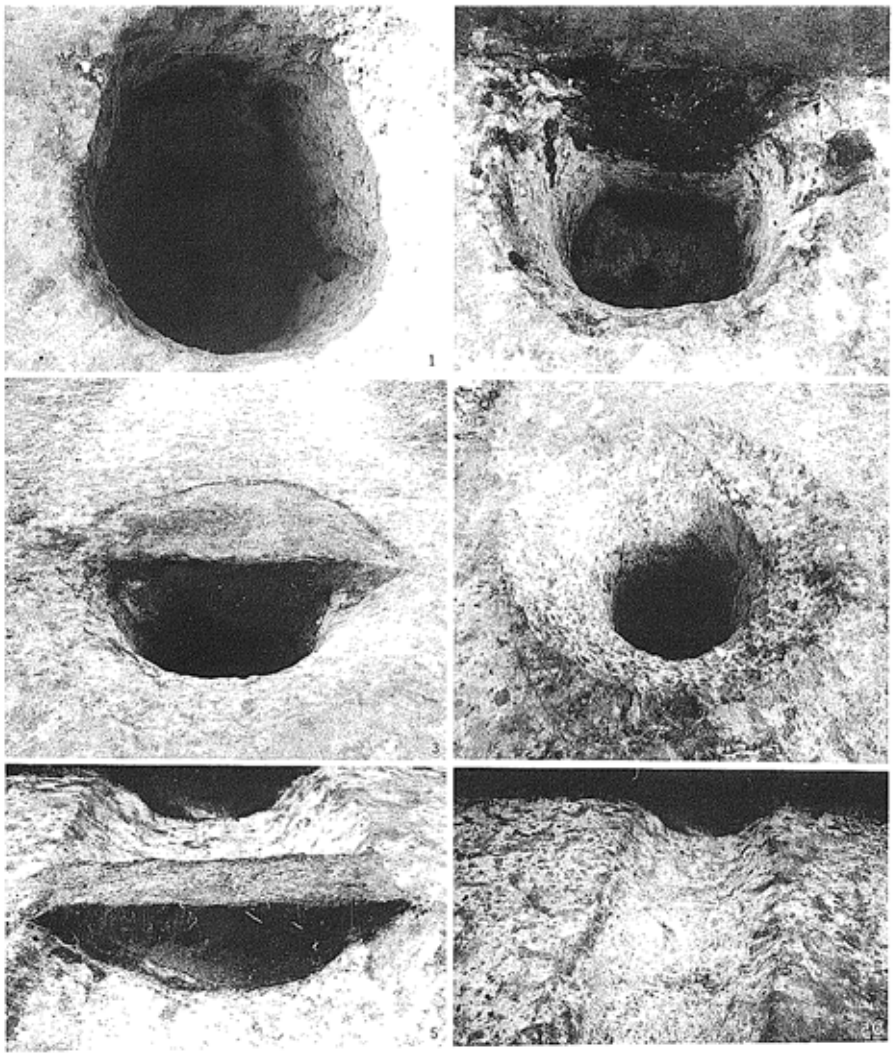
東北歴史資料館 1985『江合川流域の旧石器』　東北歴史資料館資料集 14

A区（北西から）

C区（南東から）

D区（南東から）

写真図版1



1. S K01（西から）
2. S K03（北東から）
3. S K02埋土断面（南東から）
4. S K02（南東から）
5. S D01埋土断面（北東から）
6. S D01（北東から）

S =2/3

D区出土遺物

写真図版 2

向 野 A 遺 跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と地理的環境 …… 69
Ⅱ　周辺の遺跡 …… 69
Ⅲ　前回の調査成果 …… 71
Ⅳ　調査の目的と方法・経過 …… 74
Ⅴ　発見された遺構と出土遺物 …… 74
※竪穴住居跡　※土壙　※溝跡　※焼け面
Ⅵ　まとめ …… 80
引用・参考文献 …… 80
写真図版 …… 81

調 査 要 項

遺 跡 名：向野Ａ遺跡（むかいのＡいせき）
宮城県遺跡地名表登載番号：44029
遺跡記号：ＧＣ
所 在 地：宮城県栗原郡高清水町字向野
調査原因：町道改修工事に伴う事前調査
調査面積：約 700 ㎡
調査期間：平成 4（1992）年 10 月 12 日・10 月 27 日～10 月 30 日
調査主体：高清水町教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：佐藤則之、古川一明、三好秀樹

向野Ａ遺跡

Ⅰ　遺跡の位置と地理的環境（第１・２図）

向野Ａ遺跡は、栗原郡高清水町字向野に所在する。遺跡は同町の中心部から直線距離にして南西へ約 1.5ｋｍの地点、国道４号線沿いに位置している。

本遺跡の所在する高清水町の地形をみると、奥羽山脈から派生する陸前丘陵の一部である築館丘陵が東西に延びている。この丘陵は同町のほぼ中央を西から東へ貫流する小山田川とその支流である善光寺川及び透川などの河川によって開析されており、北部・西部・南部の３つの丘陵地帯に大別される。また、河川の流域には扇状地性の低地が発達している。

向野Ａ遺跡は築館丘陵が枝分かれした南部丘陵地帯の標高 25m～33mほどの南側緩斜面に立地している。遺跡の範囲は東西約 120m、南北 180m以上で、現状は畑地及び水田となっている。また、遺跡の西辺には国道４号線高清水バイパス、東辺及び南辺に沿っては町道が遺跡を切り通すかたちで走っている。

Ⅱ　周辺の遺跡（第１図）

現在、高清水町内では縄文時代から中・近世にいたる各時代の遺跡が扇状地性の低地をのぞむなだらかな丘陵上で確認されている。これらのうち、向野Ａ遺跡と時期的に関連があると考えられる縄文時代、古墳時代から奈良・平安時代の遺跡について概観したい。

縄文時代の遺跡としては、本遺跡の北東約 2.5ｋｍの地点に大寺遺跡があり、昭和 30 年（1955）の東北大学の発掘調査で沈線文・貝殻腹縁文が施文された早期の尖底土器が多数発見されている（伊東：1957）。「大寺式」の設定は、この遺跡出土の土器を標式として行なわれた。

この他、縄文時代の遺跡としては西手取遺跡、萩田遺跡などの遺跡があるが、その性格が明らかにされたものは少ない。

次に、古墳時代の遺跡としては東館遺跡、大寺遺跡、経ケ崎遺跡などがある。東館遺跡（加藤：1980）では時期の異なる方形周溝墓１基と竪穴住居跡１軒が検出されている。

さらに、奈良・平安時代になると観音沢遺跡をはじめ松ノ木沢田Ａ遺跡、五輪Ｃ遺跡、西手取遺跡、下折木遺跡、下田遺跡などがあり、それぞれ竪穴住居跡や土壙などが検出されていて、集落跡と考えられている。

なかでも、本遺跡の東側約 200mの地点にある観音沢遺跡（加藤・阿部：1980）では 10

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	向野A遺跡	段丘	集落跡	縄文、古代、中世	31	大寺遺跡	段丘	包含地	縄文早、古墳、古代
2	菱ノ倉古墳群	丘陵斜面	古墳、経塚	古代、中世	32	生深町遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
3	中山遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、縄文	33	勝負カ町遺跡	丘陵	包含地	古代
4	石沢遺跡	丘陵麓	包含地	古代	34	小野横穴古墳群	丘陵斜面	横穴墓	古墳後
5	小深沢殿上館跡	丘陵	城館	中世	35	外沢窯跡	丘陵斜面	窯跡	平安
6	運難館跡	丘陵	城館	江戸	36	経ケ崎遺跡	段丘	包含地	縄文、古墳、古代
7	宮ノ脇遺跡	丘陵	包含地、塚	古代、中世、近世	37	上経ケ崎遺跡	段丘	塚	不明
8	小深沢Ⅰ遺跡	丘陵	集落跡	古代	38	北山囲古墳群	丘陵尾根	包含地、円墳	古墳後、古代
9	小深沢Ⅱ遺跡	丘陵	集落跡	古代	39	新寺館跡	丘陵斜面	城館	近世
10	陣館館跡	丘陵	城館	中世	40	堀場遺跡	丘陵	包含地	古代
11	下田遺跡	沖積平野	包含地	古代	41	市ヶ坂館跡	丘陵	城館	中世
12	宿ノ沢遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、古代	42	堀崎遺跡	丘陵斜面	包含地	古代
13	経壇遺跡	丘陵	経塚	古代、中世	43	梅女遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
14	殿上館跡	丘陵	城館	縄文、中世	44	鴻ノ巣館跡	丘陵	城館	近世
15	寺山遺跡	丘陵斜面	寺院跡	古代、中世	45	鴻ノ巣遺跡			
16	西手取遺跡	段丘	集落跡	縄文早・前、平安	46	城内窯跡	丘陵	窯跡	古代
17	折木山寺跡	丘陵	寺院跡	鎌倉	47	下沢田遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良
18	神山遺跡	段丘	包含地	古代	48	一ノ坪遺跡	丘陵斜面	包含地	古代
19	五輪C遺跡	段丘	集落跡	古代	49	萩田遺跡	段丘	包含地	縄文晩、弥生、古代
20	五輪B遺跡	段丘	包含地	古代	50	台町西遺跡	段丘	包含地	古代
21	五輪A遺跡	段丘	包含地	縄文、古墳	51	松ノ木沢田A遺跡	段丘	集落跡	縄文、古代、中世
22	明宮遺跡	段丘	包含地	古代	52	透川遺跡	段丘	包含地	古代
23	新田町遺跡	段丘	包含地	弥生、古墳	53	観音沢遺跡	段丘	集落跡	縄文、古墳、奈良～中世
24	下折木遺跡	丘陵端	集落跡	平安	54	向野B遺跡	段丘	包含地	古代
25	新庄館跡	丘陵	城館、包含地	平安、中世	55	松ノ木沢田C遺跡	段丘	包含地	古代
26	薬沢東遺跡	丘陵	集落跡	縄文、古代	56	仰返り地蔵前遺跡	段丘	包含地	古代
27	下佐野遺跡	段丘	包含地	古代	57	中ノ茎遺跡	段丘	集落跡	縄文、古代、中世
28	高清水城跡	段丘	城館	中世	58	覚満寺跡	段丘	寺院跡	中世、近世
29	東館遺跡	段丘	集落跡	弥生～平安	59	外沢田遺跡	段丘	包含地	古代
30	堂の池遺跡	段丘	包含地	古代					

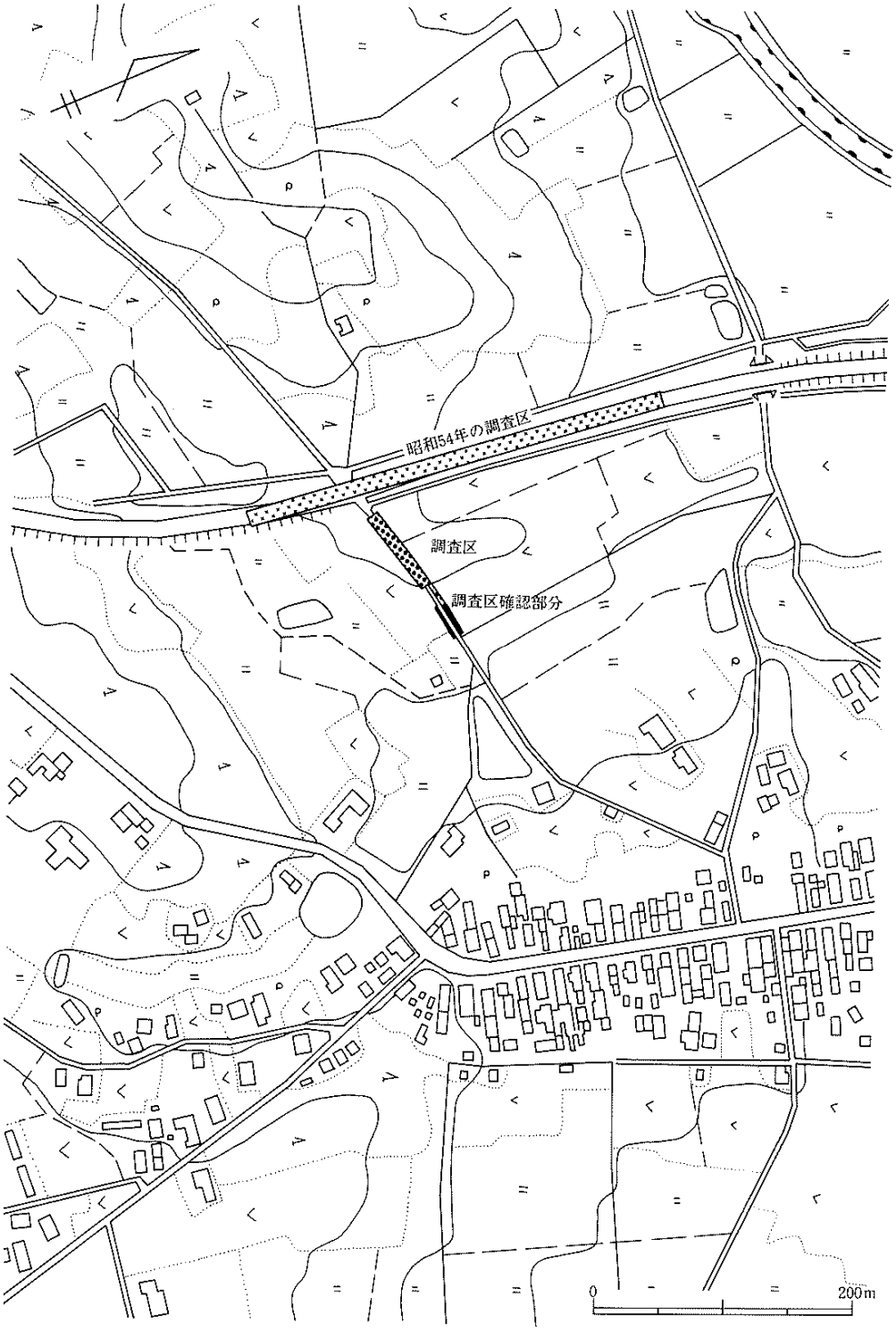
第１表　周辺の遺跡地名表

軒、谷をはさんだ南側約 300mの地点にある松ノ木沢田Ａ遺跡（千葉：1981）では１軒、奈良時代のものと考えられる竪穴住居跡が検出されており、本遺跡を含めた同時基の集落跡の広がりと展開に関心がもたれる。

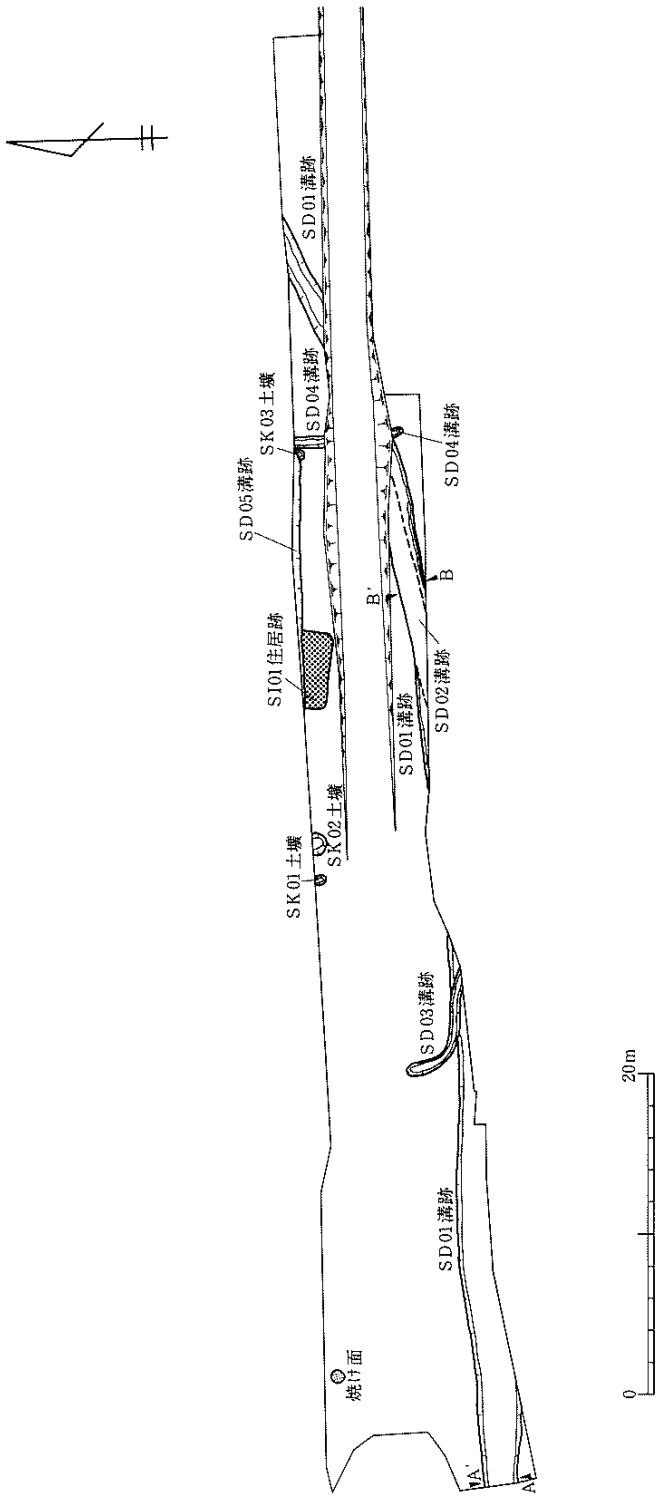
Ⅲ　前回の調査成果（第２図）

本遺跡は昭和 54 年 10 月 30 日から 11 月 30 日にかけ国道４号線高清水バイパスにかかる西側部分約 9500 ㎡が発掘調査されている（千葉：1981）。この調査では溝跡、井戸跡、土壙、焼土遺構などの遺構が検出されているが、所属時期など具体的なことについては明らかではない。また、遺物としては縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器、土錘、石鏃、砥石などが出土しているが、まとまった遺物は発見されていない。

さらに、前回の調査では竪穴住居跡も見つかっておらず、遺跡的には古代の集落の存在が予想されるものの、遺跡の時期、性格ともに不明瞭な点が多かった。



第２図　遺跡の地形と調査区位置図


SD01溝跡
SD04溝跡
SK03土壙
SD05溝跡
SD04溝跡
B
B'
SI01住居跡
SD02溝跡
SD01溝跡
SK02土壙
SK01土壙
SD03溝跡
SD01溝跡
焼け面
A'
A
0
20m

第3図　遺構配置図

Ⅳ　調査の目的と方法・経過（第２図）

今回の調査は、町道改修工事に伴うものである。

調査の対象となったのは国道４号線につながる町道の現道部分とその拡幅部分約 400 ㎡である。まず、平成４年 10 月 12 日に拡幅部分の確認調査を行なった結果、溝跡が確認され、確認面から土師器が出土した。その後、平成４年 10 月 27 日から 10 月 30 日にかけ現道部分も含め事前調査を行なった。

調査は、まず重機によって調査区の表土除去を行ない、その後に遺構の精査を行なった。調査で検出された遺構については、平板測量及び 20 分の１遣り方測量によって平面図を作成し、必要に応じて断面図も作成した。写真記録については、35mm白黒写真によって行なった。

Ⅴ　発見された遺構と出土遺物（第３図）

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡１軒、土壙３基、溝跡５条、焼け面１箇所であり、それらの遺構や遺構外から土師器、土製品が出土している。

【竪穴住居跡】

調査区内で１軒確認されている。

《ＳＩ01 住居跡》（第４図）

［位置・確認面］調査区北辺のほぼ中央に位置する。地山面で確認された。

［重複］ＳＤ05 溝跡と重複しており、これよりも古い。

［平面形･規模］住居跡の３分の２以上が調査区外のために明確ではないが、一辺約 4.8m の方形を呈するものと思われる。

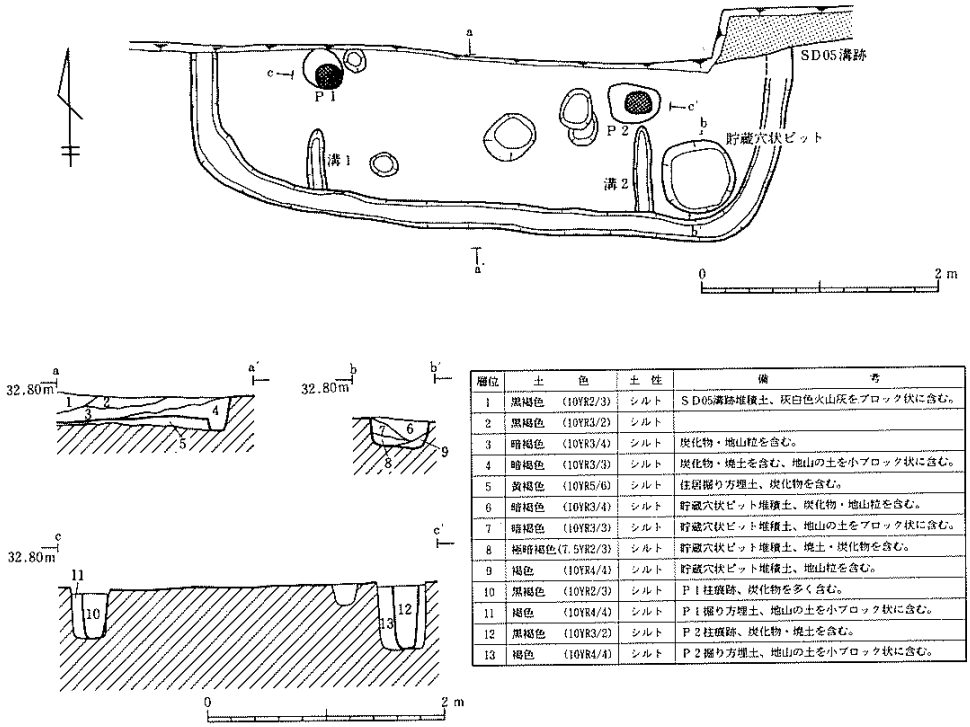
［堆積土］1～3 層は自然流入土であり、3 層は周溝にも堆積している。4 層は掘り方埋め土である。

［壁］地山を壁としている。壁の立ち上がりはやや斜めだが垂直に近く、高さは残りの良い箇所で約 20ｃｍである。

［床］ほぼ床面全体を掘る掘り方をもち、その掘り方埋め土を床としている。掘り方埋め土は住居の中心部ほど浅く、深さ最大約 15ｃｍである。

［柱穴］P1･2 は位置からみて主柱穴と考えられる。柱穴の大きさと形状は一定しないが、いずれも直径約 20ｃｍ、円形の柱痕跡が認められる。

［周溝］壁際を巡る。幅約 20ｃｍ、深さ約 10ｃｍで、断面「U」字形を呈している。堆積土の状況から住居機能時には埋まっていなかったと考えられる。



層位	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	SD05溝跡堆積土、灰白色火山灰をブロック状に含む。
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物・地山粒を含む。
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物・焼土を含む、地山の土を小ブロック状に含む。
5	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	住居掘り方埋土、炭化物を含む。
6	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	貯蔵穴状ピット堆積土、炭化物・地山粒を含む。
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	貯蔵穴状ピット堆積土、地山の土をブロック状に含む。
8	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	貯蔵穴状ピット堆積土、焼土・炭化物を含む。
9	褐色 (10YR4/4)	シルト	貯蔵穴状ピット堆積土、地山粒を含む。
10	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	P1柱痕跡、炭化物を多く含む。
11	褐色 (10YR4/4)	シルト	P1掘り方埋土、地山の土を小ブロック状に含む。
12	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	P2柱痕跡、炭化物・焼土を含む。
13	褐色 (10YR4/4)	シルト	P2掘り方埋土、地山の土を小ブロック状に含む。

第4図　S I 01住居跡

［溝］住居跡の南壁から主柱穴に向かって南北に延びる溝が2条検出された。溝1・2はいずれも幅約15ｃｍ、深さ約5ｃｍで壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は褐色のシルトで、自然流入土である。

［貯蔵穴状ピット］住居跡の南東隅で、隅丸方形の貯蔵穴状ピットを確認した。径約60ｃｍ、深さ約20ｃｍ、断面「U」字形である。

［遺物］堆積土中から土師器が出土している。いずれも破片で、図示できたものは土師器坏1点のみである。

〈土師器坏〉（第5図－1）

低い器形で底部は平底、口縁部はやや内湾気味に開く。摩滅しているため調整は明瞭でないが、外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキで黒色処理されている。また、底部にはヘラケズリが施されている。

住居の具体的な構造については全体を精査していないため明確ではない。また、年代についても出土遺物が堆積土中の土師器坏1点のみであるため限定できない。しかし、この

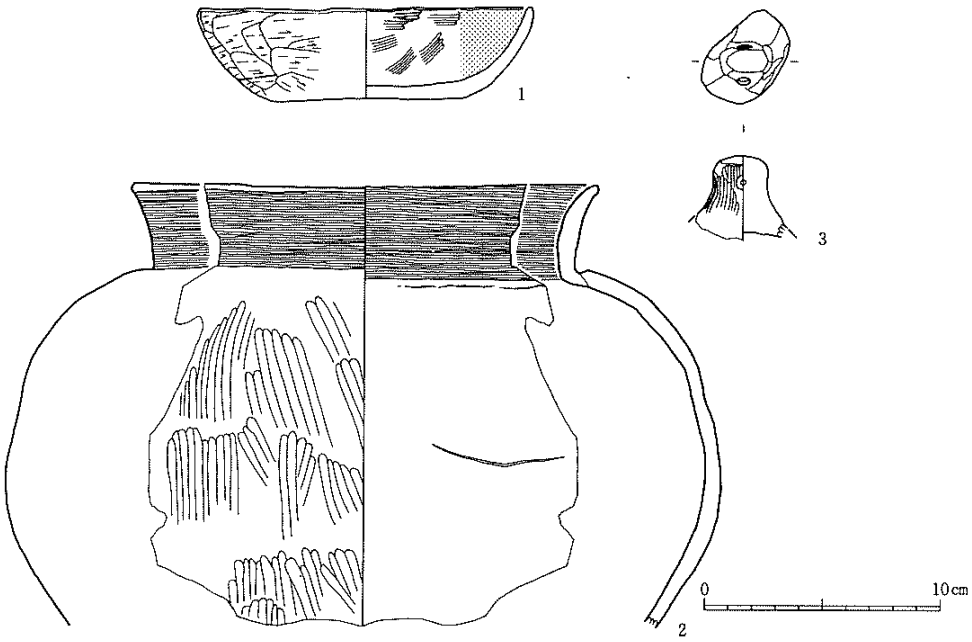
坏（第５図－1）は糠塚遺跡第 16 号住居跡（小井川・手塚：1978）、清水遺跡第 58 号住居跡（丹羽・阿部他：1981）などの出土のものに類似しており、8 世紀後半と考えておきたい。

【土壙】

調査区内の地山面で、3 基確認されている。

《ＳＫ01 土壙》（第６図）

調査区北辺の中央西寄りで検出され、一部調査区外にかかっている。長軸約 1.2m、短軸 0.8m、深さ 0.6mの長方形を呈する。底面は平坦で、壁はほぼ直立に立ち上がる。また、底面ほぼ中央と西壁際にはそれぞれ直径約 15ｃｍ・5ｃｍの円形の小ピットが確認された。堆積土は黒色と暗褐色のシルトに大別され、いずれも自然流入土である。遺物は出土していない。



番号	種別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存率	図版No.
1	土師器・坏	ＳＩ01	ヘラケズリ	ヘラミガキ＋黒色処理	ヘラケズリ	14.2	8.1	3.9	完形	3－2－1
2	土師器・甕	ＳＤ02	口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ		(19.8)			1／5	3－2－2
3	土製品・土錘	ＳＤ02	一部ヘラミガキ						1／3	3－2－3

第５図　出土遺物

《ＳＫ02 土壙》（第 6 図）

調査区北辺の中央西寄りで検出され、一部調査区外にかかっている。長軸 1.4m以上、短軸 1.2m、深さ 0.9mの隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はほぼ直立に立ち上がり、途中からやや斜めに立ち上がる。また、底面ほぼ中央には直径約 20ｃｍ、円形の小ピットが確認された。堆積土は黒色と暗褐色のシルトに大別され、いずれも自然流入土である。遺物は出土していない。

《ＳＫ03 号土壙》（第 6 図）

調査区北辺の中央東寄りで検出され、一部調査区外にかかっている。直径約 0.8m、深さ 0.9mの円形を呈する。底面は平坦で、壁はほぼ直立に立ち上がり、途中に弱い段がつく。また、底面ほぼ中央には東西に並んで 2 個、直径約 10ｃｍの円形の小ピットが確認された。堆積土は褐色を基調としたシルトもしくは粘土質シルトで、いずれも自然流入土である。ＳＤ05 溝跡と重複しており、これよりも古い。遺物は出土していない。

ＳＫ01～03 土壙はいずれも遺物が出土していないため、その年代については不明である。しかし、すべての土壙の底面に小ピットが検出されていることや、その形態から陥し穴であると考えられる。

【溝跡】

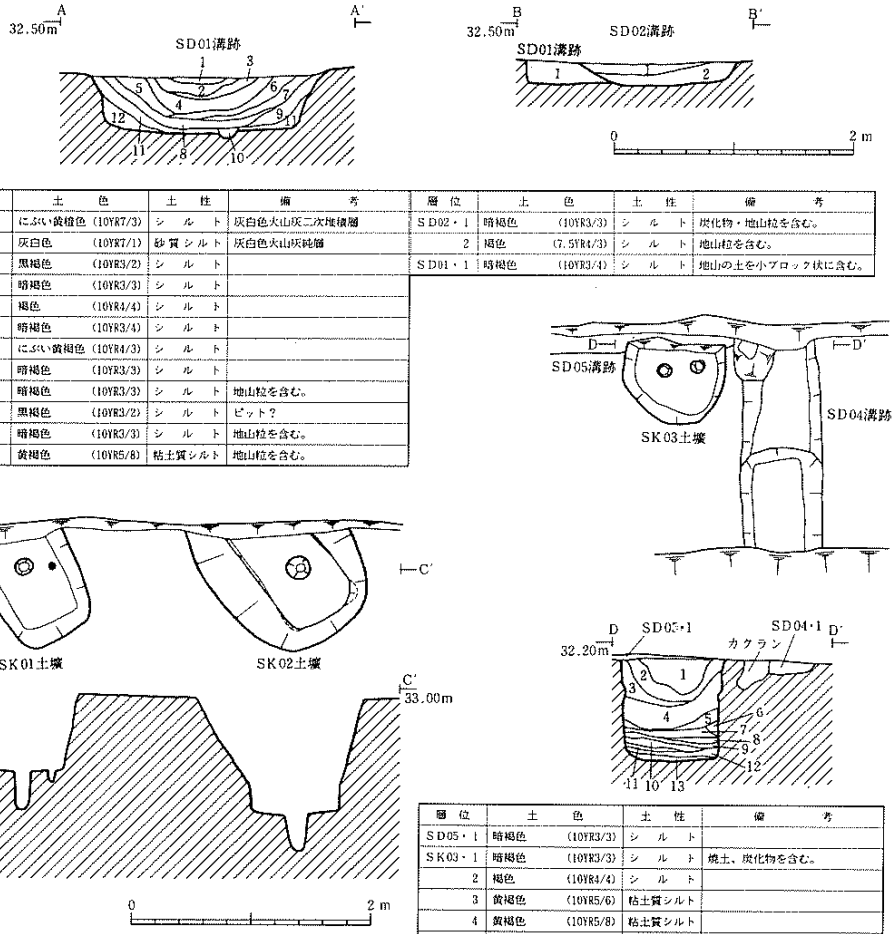
調査区内の地山面で、5 条確認されている。

《ＳＤ01 溝跡》（第 6 図）

調査区内を東西方向に延びる溝で、調査区の東半で北へ緩やかに曲がっている。幅約 1.6～3.0m、深さはもっとも残りのよいところで約 50ｃｍである。底面は平坦で、壁はほぼ直立に立ち上がる。底面の壁際にそって幅約 10ｃｍ、深さ約 5ｃｍの溝が部分的に確認された。堆積土は褐色を基調としたシルトもしくは粘土質シルトで、いずれも自然堆積土である。また、堆積土中の上部では灰白色火山灰が層を成している。ＳＤ02・03 溝跡と重複しており、これらよりも古い。ＳＤ04 溝跡との重複関係は不明である。土師器の小破片が出土している。

《ＳＤ02 溝跡》（第 6 図）

調査区内を東西方向、斜めに延びる溝である。幅約 1.3m、深さはもっとも残りのよいところで約 20ｃｍあり、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色のシルトで、いずれも



層位	土色	土性	備考
1	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	シルト	灰白色火山灰二次堆積層
2	灰白色 (10YR7/1)	砂質シルト	灰白色火山灰純層
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	
5	褐色 (10YR4/4)	シルト	
6	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	
7	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	
8	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	
9	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を含む。
10	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ピット？
11	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を含む。
12	黄褐色 (10YR5/8)	粘土質シルト	地山粒を含む。

層位	土色	土性	備考
SD02・1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物・地山粒を含む。
2	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	地山粒を含む。
SD01・1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山の土を小ブロック状に含む。

層位	土色	土性	備考
SD05・1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	
SK03・1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土、炭化物を含む。
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	
3	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	
4	黄褐色 (10YR5/8)	粘土質シルト	
5	明黄褐色 (10YR6/6)	粘土質シルト	
6	明黄褐色 (10YR6/8)	粘土質シルト	
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土、炭化物を含む。
8	明黄褐色 (10YR6/6)	粘土質シルト	
9	明黄褐色 (10YR6/8)	粘土質シルト	
10	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	粘土質シルト	
11	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	
12	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	
13	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土、炭化物を含む。
SD04・1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山の土を小ブロック状に含む。

第６図　ＳＤ01・02・04・05溝跡，ＳＫ01・02・03土壙

自然堆積土である。ＳＤ01 溝跡と重複しており、これよりも新しい。ＳＤ04 溝跡との重複関係は不明である。土師器、土製品が出土している。この内図示できたのは土師器甕１点、土製品１点のみである。

〈土師器甕〉（第５図－2）

下半部を欠いているため、全体の器形は不明である。体部は球形を呈し、比較的大形である。頸部には段があり、口縁部は外反している。外面の調整は、口縁部にヨコナデ、体

部にヘラミガキである。内面の調整は、摩滅しているため明瞭でないが、口縁部にはヨコナデが施されている。
〈土製品〉（第５図－3）
　下半部を欠いているため全体の形は不明である。鈕の部分には両面から穿孔された貫通孔が見られ、外面には一部ヘラミガキが施されている。類似する土製品が郷楽遺跡（菊池他：1990）などから出土しており、これによると土鈴であると思われる。

《ＳＤ03 溝跡》
　調査区の西寄りで検出された。幅約 0.6m、深さはもっとも残りのよいところで約 40ｃｍあり、断面形は「U」字形を呈している。堆積土は黒褐色のシルト 1 層のみで自然堆積土である。ＳＤ01 溝跡と重複しており、これよりも新しい。遺物は出土していない。

《ＳＤ04 溝跡》（第６図）
　調査区の東寄りで検出された。この溝跡は途中から一段深くなっており、幅約 0.7m、深さは深いところで約 15ｃｍ、浅いところで約 10ｃｍである。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色のシルト土１層のみで自然堆積土である。ＳＤ01・02 溝跡との重複関係は不明である。土師器の小破片が出土している。

《ＳＤ05 溝跡》（第６図）
　調査区の北辺に沿って確認されたが、精査を行なっていないため詳細については不明である。ＳＩ01 住居跡、ＳＫ03 土壙と重複しており、これらよりも新しい。

　ＳＤ02 溝跡から出土した土師器甕（第５図－2）は御駒堂遺跡第６号住居跡（小井川・小川：1982）、観音沢遺跡第８号住居跡（加藤・阿部：1980）、糠塚遺跡第 16 号住居跡（小井川・手塚：1978）などの出土のものに類似しており、大きく８世紀代の範疇に納まるものと考えておきたい。
　また、ＳＤ01 溝跡は前回の調査地点（調査区に隣接する西側の地点）では確認されておらず、溝の方向と地形を照らし合わせると、調査区より北方の丘陵上を囲む方向に延びている可能性が強い。

【焼け面】
　調査区北西隅の地山面で１箇所確認されている。直径約 0.8mの円形を呈する。遺物は

出土していない。

Ⅵ　まとめ

1．今回の調査結果と調査区北側の丘陵上の畑地に土器片が多数散乱していることなどから考えると、向野Ａ遺跡は主に奈良時代の集落遺跡で、調査地点は集落の南縁部にあたり、集落の主体は調査区の北方の丘陵上に展開している可能性が強い。

2．ＳＤ01 溝跡は前回の調査地点では確認されておらず、調査区より北方の丘陵上を囲む方向に延びる区画溝である可能性が強い。

3．検出された遺構の中には陥し穴と考えられる土壙がみられる。

引用・参考文献

伊東信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』1

小野寺祥一朗（1979）：「五輪Ｃ遺跡」宮城県文化財調査報告書 65

加藤道男（1980）：「東館遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告Ⅲ」宮城県文化財調査報告書 62

加藤・阿部（1980）：「観音沢遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」宮城県文化財調査報告書 72

加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

菊地・庄子他（1990）：「利府町郷楽遺跡Ⅱ－仙塩道路関連遺跡発掘調査報告書」宮城県文化財調査報告書 134

小井川・手塚（1978）：「糠塚遺跡－宮城県文化財発掘調査略報」宮城県文化財調査報告書 53

小井川・小川（1982）：「御駒堂遺跡－東北自動車道遺跡調査報告Ⅵ」宮城県文化財調査報告書 83

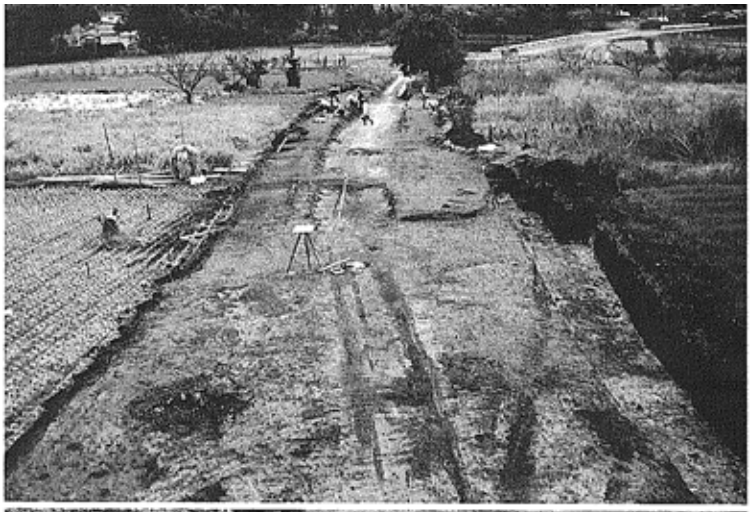
千葉宗久（1981）：「松ノ木沢田遺跡－東北地建バイパス関係遺跡調査報告書」宮城県文化財調査報告書 76

千葉宗久（1981）：「向野Ａ遺跡－東北地建バイパス関係遺跡調査報告書」宮城県文化財調査報告書 76

丹羽・阿部他（1981）：「清水遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」宮城県文化財調査報告書 77

写　真　図　版

1.調査区全景
（西より）

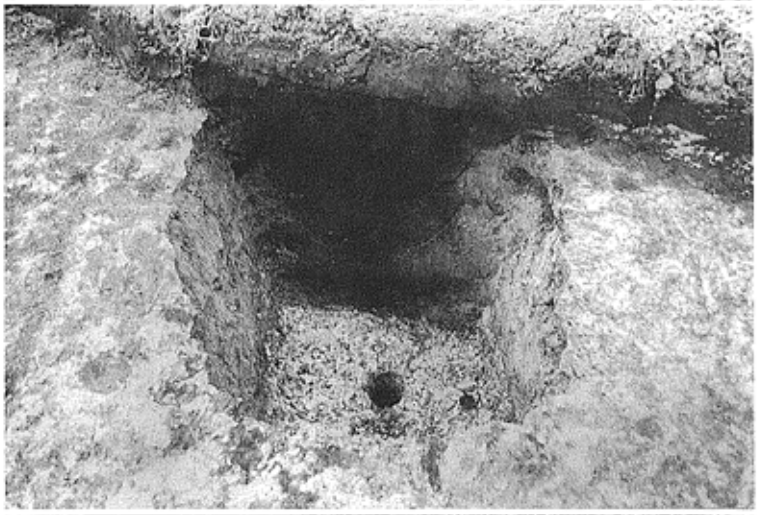


2.ＳＩ01住居跡
（西より）

3.ＳＤ01・03溝跡
（東より）

図版１

1. S D01溝跡
（東より）

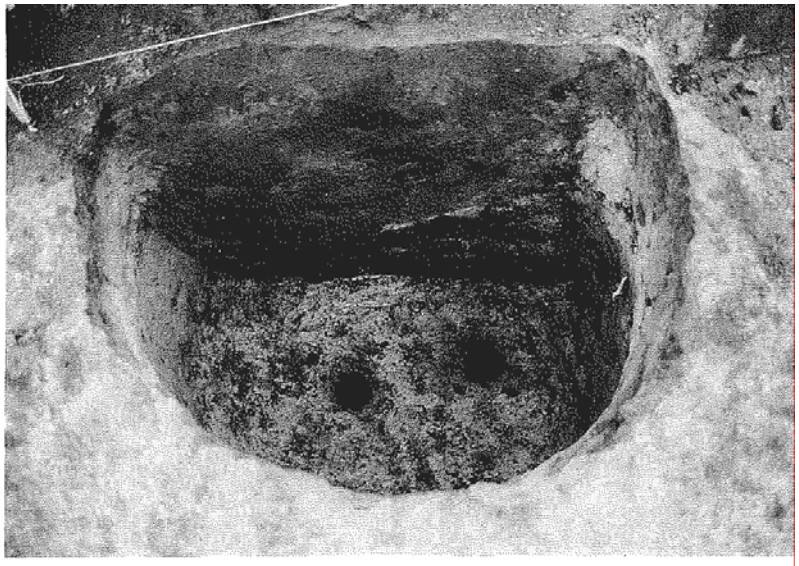


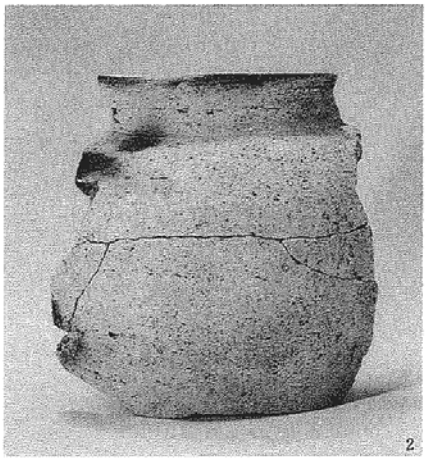
2. S K01土壙
（南より）

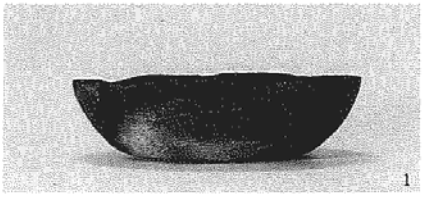
3. S K02土壙
（南より）

図版 2

1．ＳＫ03土壙
（南より）







図版３－２　出土遺物　S＝1／3

黒　沼　館　跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と地理的環境 …… 89
Ⅱ　黒沼館の変遷と構造 …… 89
Ⅲ　調査の目的と方法・経過 …… 91
Ⅳ　発見された遺構と出土遺物 …… 92
Ⅴ　まとめ …… 94
引用・参考文献 …… 94
写真図版 …… 95

調 査 要 項

遺 跡 名：黒沼館跡（くろぬまたてあと）
　　宮城県遺跡地名表登載番号：54012
遺跡記号：ＫＶ
所 在 地：宮城県登米郡中田町宝江黒沼字浦
調査原因：中田町総合公園整備事業計画に伴う確認調査
調査面積：約 5700 ㎡
調査期間：平成 4（1992）年 11 月 9 日～11 月 10 日
調査主体：中田町教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：佐藤則之、小村田達也、三好秀樹

黒 沼 館 跡

Ⅰ　遺跡の位置と地理的環境（第１図）

黒沼館跡は、登米郡中田町宝江黒沼字浦に所在する。遺跡は国道 346 号線から直線距離にして南西へ約 750mの地点に位置している。

中田町は宮城県の北東部に位置しており、北は岩手県東磐井郡花泉町に接している。町の東端には北上山地の西縁沿いに南下してきた北上川が流れ、西部からは奥羽山脈から派生する築館丘陵の間をぬって東行する迫川が流れこんでいる。この北上川と迫川は町内から並行して南流し、その流域に広い仙北低地帯を形成している。

町の大半は両河川による氾濫原で構成されており、町の中央部には複雑に蛇行する旧河道が存在し、その周縁に自然堤防が発達している。遺跡は北上川から 2.5ｋm西方に位置する標高 8m～11mの自然堤防上とその周辺に立地している。

Ⅱ　黒沼館の変遷と構造（第２図）

遺跡の範囲は東西 140m以上、南北約 130mで、台形状に広がっている。遺跡は現在宅地となっている中央部を除き削平を受けており、その範囲は明瞭ではない。削平された部分は水田や畑地などに利用されている。

黒沼館跡は高泉館、鶴ケ塀館などとも呼ばれている。

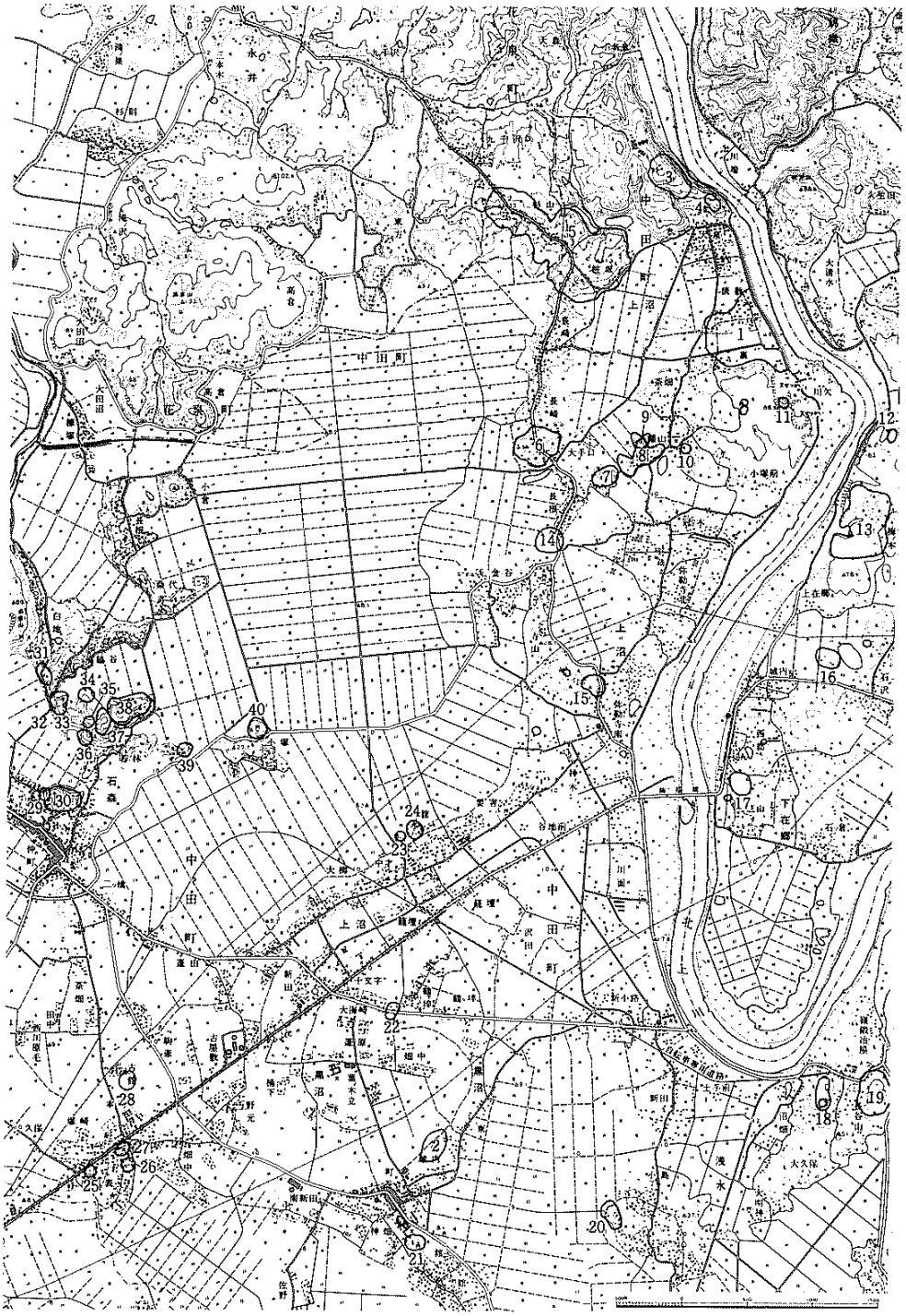
城主及び年代については『黒沼村風土記御用書出』に、

古屋敷　壹ツ　但シ高泉杢様御先祖様御住居之由承傳候得共年號等相知不申候事

とあり、寛永五年（1628）高泉長門定康が高清水から黒沼村に移り、宝永二年（1705）米谷に移るまでの約 77 年間、定康、兼康の親子二代にわたって居所したとされている（中田町史：1977）。

また、天和元年（1681）に諸士から藩に提出された在郷屋敷絵図には、天和二年二月十三日付で奉行黒木上野宗信が、在郷の屋敷について格付けを判定した文書が添付されている。これによると、高泉杢在郷屋敷は要害の地ではなく、居屋敷を除屋敷として拝領し、伝馬役を勤め、市の立つ町場を拝領する「居所付」に格付されている（写真図版 2）。

黒沼館跡の構造は、『中田町史』によると、城下を含め東西十町余(約 1.1ｋm)、南北七町余(約 770m)の平城で、往時は後方に北上川が流れ、南に堀を巡らした要塞であったとされている。また、天和元年（1681）に藩に提出された「登米郡黒沼村高泉杢在郷屋敷絵図」（写真図版 2）をみると、屋敷は東西六十間(約 110m)、南北七十六間(約 140m)の



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	大泉遺跡	沖積平野	包含地	縄文中・晩、弥生、古代	21	新井田新館跡	自然堤防	城館	中世
2	黒沼館跡	自然堤防	城館	江戸	22	伊神館跡	自然堤防	城館	近世
3	大泉館跡	丘陵	城館	中世	23	八幡寺跡	自然堤防	寺院跡	近世
4	補陀落山観音寺跡	丘陵麓	寺院跡	古代、近世	24	桜場館跡	自然堤防	城館	中世
5	杉山古墳群	丘陵頂	円墳	古墳後、奈良	25	西明寺跡	自然堤防	寺院跡	近世
6	朝日館	丘陵	城館	中世	26	加賀野館跡	自然堤防	城館	中世
7	上沼古館跡	沖積平野	城館	近世	27	本道寺跡	自然堤防	寺院跡	近世
8	上沼館跡	沖積平野	城館	中世	28	石森古館跡	自然堤防	城館	中世
9	玉の墓遺跡	沖積平野	墳墓	中世	29	古塚壇遺跡	自然堤防	塚	近世
10	円福寺跡	丘陵麓	寺院跡	中世	30	石森館跡	分離丘陵	城館	古代、中世、近世
11	七ツ森遺跡	丘陵頂	塚		31	白地横穴古墳群	分離丘陵	横穴墓	古墳後、奈良
12	洞山古墳	丘陵麓	古墳	古墳末	32	愛宕山寺院	分離丘陵	寺院跡	
13	丸森山遺跡	丘陵	包含地	縄文中・後	33	石森遺跡	分離丘陵	包含地	縄文
14	新内ノ目遺跡	沖積平野	包含地	縄文前	34	二ツ木貝塚	丘陵端	貝塚	縄文中～晩
15	弥勒寺館跡	丘陵端	城館	中世	35	十念仏山遺跡	分離丘陵	包含地	縄文晩
16	湖水館跡	自然堤防	城館	中世	36	双樹山秀山寺跡	分離丘陵	寺院跡	
17	高橋館跡	丘陵	城館	中世	37	大壇遺跡	分離丘陵	祭祀跡	近世
18	観音寺跡	丘陵	寺院跡	近世	38	双樹館跡	分離丘陵	城館・包含地	古代、中世、近世
19	長谷館跡	分離丘陵	城館	中世	39	西方塚跡	沖積平野	寺院跡	
20	小島館跡	分離丘陵	城館	中世	40	小塚館跡	分離丘陵	城館	中世

第1表　周辺の遺跡地名表

ほぼ方形を呈し、周囲には土塁が巡っている。その土塁の内側西辺から南辺にかけて「L」字状に「壁」と記された塀が見られる。さらに、昭和46年（1971）に作成された地籍図によると、遺跡の西縁部から南縁部にかけて「L」字状に一段低い平坦な水田が見られることから、この「L」字状に一段低い平坦な部分が堀跡にあたると推定されている。しかし、「高泉杢在郷屋敷絵図」をみると屋敷地の東辺と南辺の一部では堀跡らしきものが見られるが、北辺から西辺にかけては広く沼地に窪まれており、堀跡は見られない。この屋敷地の北側には神社があり、南側には家中屋敷が広がっている。

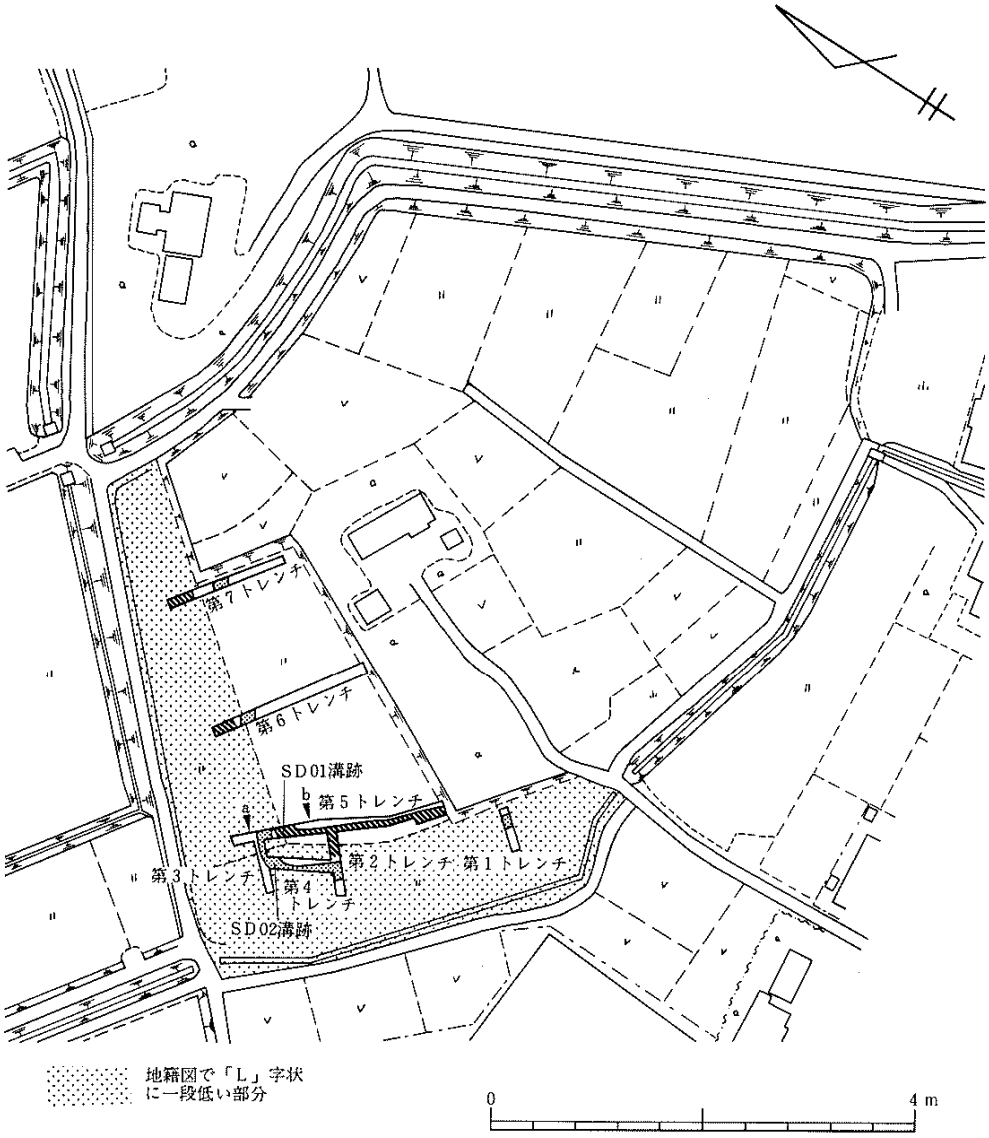
このように資料によって記載されている内容が異なること、発掘調査が行なわれていないことなどから館跡の具体的な構造については明確ではない。

III　調査の目的と方法・経過（第2図）

今回の調査は、中田町総合公園整備事業計画に伴う確認調査である。

黒沼館跡の堀にあたるとされている地点のうち西縁から南縁にかけての部分が、今回の調査対象地域にあたる。この地域は最近まで水田や畑地として利用されていたが、現在は中田町が所有しており、荒地となっている。

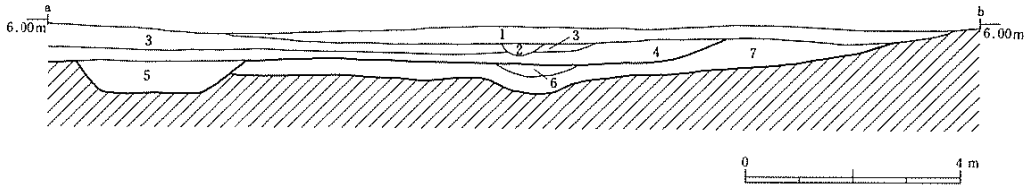
調査は堀跡の範囲を確認することを目的とし、任意の方向・規模のトレンチ調査を11月9日と10日にわたって行なった。トレンチ調査は合計7本、約365㎡である。トレンチ調査部分と遺構については、平板測量による平面図を作成し、必要に応じて断面図も作成した。写真記録については、35mmカラー・リバーサル写真によって行なった。



第２図　遺跡の地形とトレンチ配置図

Ⅳ　発見された遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は溝跡２条であり、いずれも地山面で確認された。また、第５トレンチの表土中から土師器高坏の脚部１点（古墳時代前期～中期）、近世の陶磁器１点（切込産、19 世紀）が出土している。



層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	粘土	酸化鉄を多く含む。水田耕作土	5	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土	SD02溝跡の堆積土
2	黄灰色 (2.5Y4/1)	粘土		6	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)	粘土	SD01溝跡の堆積土
3	黄褐色 (2.5Y5/3)	粘土	水田耕作土	7	オリーブ褐色 (2.5Y4/3)	粘土	黒褐色土、黄褐色土のブロックを多く含む。SD01溝跡の堆積土
4	黄灰色 (2.5Y4/1)	粘土					

第３図　第５トレンチ北壁断面図

【ＳＤ01 溝跡】（第２・３図）

第 2、5～7 トレンチの地山面で検出された、遺跡の西縁から南縁にかけて「Ｌ」字状に延びる溝である。溝の幅は約 7.5mで側面は緩やかに立ち上がり、中央部に断面「Ｕ」字形に深く掘り込まれた部分がみられる。深さは浅い部分で約 50ｃｍ、深く掘り込まれた部分で約 90ｃｍである。溝の堆積土は 2 層で、2 層ともオリーブ褐色の粘土層であるが、下層には黒褐色土と黄褐色土のブロックが多く含まれており、埋められた可能性がある。また、堆積土の上面にはごく最近のものと思われる水田の耕作土がみられる。ＳＤ02 溝跡と重複しており、これよりも古い。遺物は出土していない。

【ＳＤ02 溝跡】（第２・３図）

第 1～7 トレンチの地山面で検出された。ＳＤ01 溝跡と同様に「Ｌ」字状に延びる溝で、最大幅約 4.0m、深さ約 50ｃｍである。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。溝の堆積土は自然堆積土 1 層のみで黒褐色の粘土層である。また、堆積土の上面にはごく最近のものと思われる水田の耕作土が 2 層みられる。ＳＤ01 溝跡と重複しており、これよりも新しい。遺物は出土していない。

ＳＤ01 溝跡とＳＤ02 溝跡は、ともに同方向に延びる溝跡であるが、ＳＤ02 溝跡は調査区の北にいくほど東方に曲がっている。ＳＤ01 溝跡とＳＤ02 溝跡によって囲まれると考えられる範囲は東西 50m以上、南北 60m以上である。また、これらの溝跡より外側の地山は沼地である。

Ⅴ　まとめ

1．今回の調査で検出された溝跡 2 条のうち、ＳＤ01 溝跡は地籍図の一段低い部分（第 2 図）の内側に沿って延びている。しかし、この溝跡はその規模・形状からみると明確に堀であると断定できるものではなく、遺構に伴う遺物も出土していないため年代についても不明である。また、「登米郡黒沼村高泉杢屋敷絵図」によると屋敷地の東辺と南辺の一部では堀跡らしきものが見られるが、今回の調査対象になっている南辺の西半と西辺には堀跡が見られず、屋敷地を巡るように沼地が広がっている。これらのことを考え合わせると、調査地点については館跡が機能していた当時は沼地という地形を利用して堀としての機能をもたせていた可能性がある。

2．黒沼館跡の範囲は、館跡に伴う堀と推定されていた一部分についてのみの限られ範囲の調査であったために具体的には判らないが、屋敷地は諏訪神社の南側に位置し、現況で東西 140m以上、南北 130m以上の範囲に広がっているものと思われる。また、黒沼館跡は在郷屋敷であり、「高泉杢屋敷絵図」に添付された文書によると「居所付」として格付けされている。絵図中では屋敷地の南側に家中屋敷が広がっている。

3．溝跡に囲まれた部分の表土中より古墳時代前期から中期のものとみられる土師器高坏の脚部が 1 点出土しており、同遺跡内に古墳時代の遺構が存在する可能性もある。

引用・参考文献

小林清治他（1982）：『仙台城と仙台領の城・要害』日本城郭史研究叢書 2

（1776）：「黒沼村風土記御用書出」『宮城県史』26

佐藤　巧　（1979）：『近世武士住宅』

柴桃正隆　（1973）：『仙台領内古城・館』2

中田町史編纂委員会（1977）：『中田町史』

藤沼邦彦他（1981）：「宮城県」『日本城郭大系』3

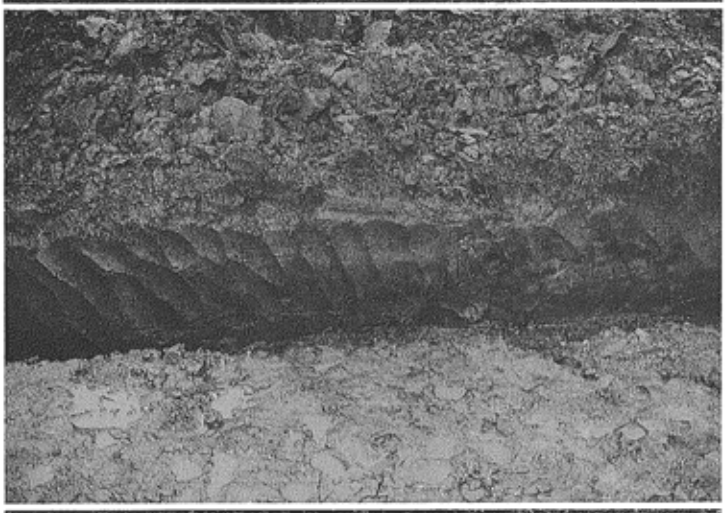
登米郡黒沼村高泉杢在郷屋敷絵図　天元元年（1681）：宮城県立図書館所蔵　ＫＤ296－ト 5

貼付：高泉杢覚書　1 通

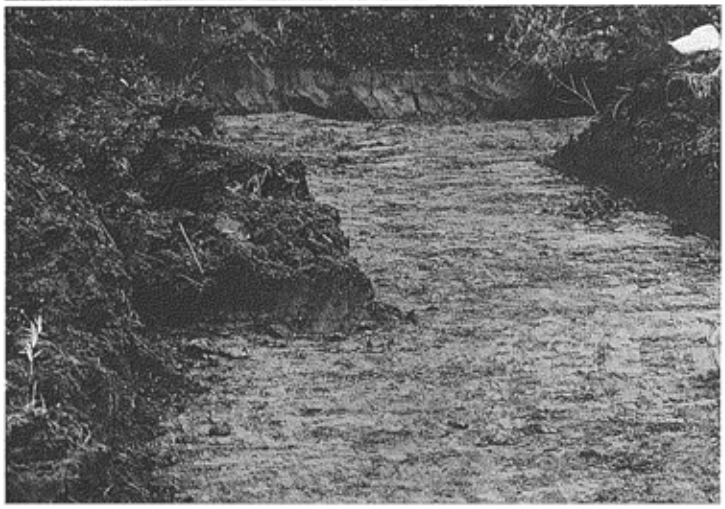
吟味書　　1 通

1.遺跡近景
（南より）

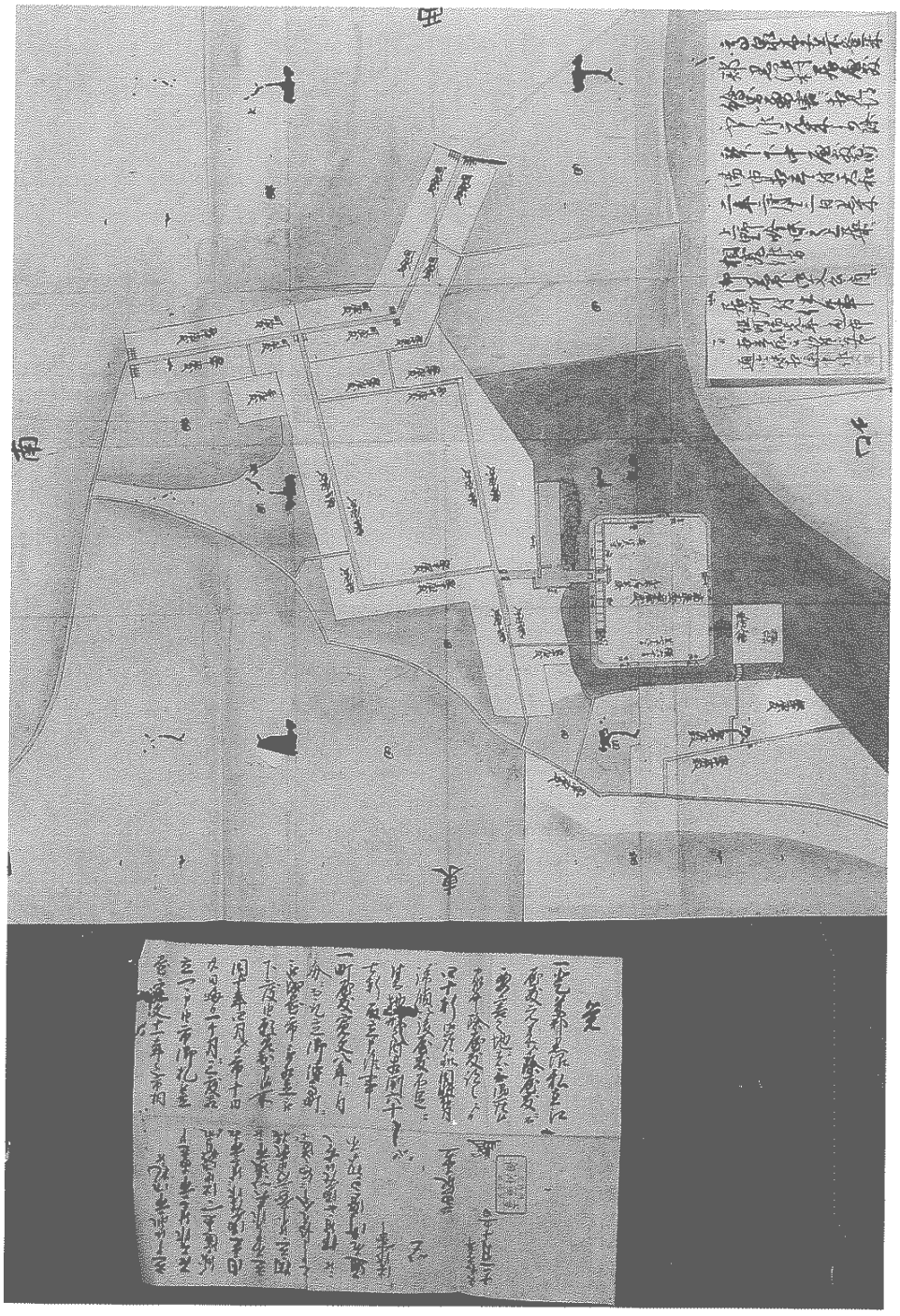
2.第５トレンチ北壁断面



3.第５トレンチ
（南東より）



図版１



図版２　「登米郡黒沼村高泉杢在郷屋敷絵図」

貼付：高泉杢覚書　１通
　　吟味書　　１通　宮城県立図書館所蔵ＫＤ296-ト５